山本忠雄著

文體論

——方法と問題——

賢文館藏版

序

私が始めて書いた研究論文は「英語の感情表現」であつた。バイイなどの感化もあつて、私の興味は言語の論理的形式よりも感情的様相に在つたのだ。理性的な文法論よりも人間の現實に近い文體論が好ましいものに思はれた。しかし言語活動に於ける感情の機能やこれを表現する言語形式には一般過程や瞬間的様相だけしか認めることができないのに不滿を感じ出した。中身のある現實を求めたくなつた。フォスレルの方法に近づいて行つたのはそのためである。

文體論の沿革は『文體論研究』（三省堂、昭和十三年）に紹介した。本書ではそれを自分の立場から整理し一應の基礎を築きたいと思ふのである。それは理論だけを說くことではない。實踐しながら得られる結果を方法にまで高めたいと思

ふのだ。既成の體系を押しつけるのではない、實踐に伴つて體系を發展させたいのである。それは體系といふ概念に合はないかも知れないがそれでよいのだと思つてゐる。

各方面の問題を網羅するために、雜多な材料を取扱つてゐる。どれも實驗的なものばかりであるが、學問的な見通しは略々ついてゐるつもりである。これが第二部の內容になつてゐるもので、第一部は文體論の方法をまとめたものである。そのうちで、生活機能に關する部分はフランスの心理學者に負ふところ多く、言語學の理論に就てはソシュール及びその學徒に敎へられること大であつた。文體論そのものは、バイイとフォスレルが根抵になつてゐる。

本書を執筆するに際しては、これから文體論をやらうとする人々を、絕えず念頭に置いた。記述を分りよくし、解說や手引を加へたのもさういふ理由からである。

前著に好意ある批評や忠言を賜つた先輩知友諸氏に、此處で改めて謝意を表

し、併せて本書に對しても御示教を與へられんことを切望する。そのために若い科學の生長が助けられるならば、幸とする者は筆者に限らないのである。

昭和十五年五月

山本忠雄

目次

第一部　文體論の方法

一　ことばとその見方

ことばとは何であるか。われわれは毎日ことばを使つてゐる。これほど分りよいものはなささうであるが、定義するとなると、これほど難しいものはない。口に出し耳に聞くのもことばであれば、文字に書き目で見て讀むのもことばである。現に此處に記してゐるのもことばである。ことばは常識的に誰でも知つてゐるものであるが、ことばといふ中には、色々異つたものが含まれてゐる。「彼奴のことばは聞きとれない」といふ時のことばは、發音卽ち口で出る形のことを言つてゐるが、「昔のことばは分らない」のことばは意味卽ち內容のことである。「これは何處のことばだらう」のことばは日本語又は英語といふやうな一定の組織だつた言語のことを言ひ、「昔のことばは女みたいだ」といへばそのことばは個

人の用ひる言語のことである。 これは少し考へれば分ることで、整理してみると、ことばには音形と意味の二相があり、一般社會のことば即ち言語 (langue) と個人のことば即ち言 (parole) があることになる。 ことばは此の二つに分けて考へられる活動で、その中には心理的な働きや生理的な働きが含まれてゐる。 かやうに綜合した活動を言語活動 (langage) といふ。 これが有名なソシュール(一) (Ferdinand de Saussure) の言語理論である。

ソシュールの理論を少し別な觀點から見ると、ことばは體系としての言語と機能としての言に分けられるだらう。 ことばがことばとして通用するのは、一般に理解される音形と意味の聯合があるからである。 例へばハルと言つてそれが「春」を表はすものと誰もが理解してゐなければ、ハルはことばの要素にはならないだらう。「春」も人によつて感じの相違はあるだらうが、ハルといへば少くとも「秋」でない「春」だといふ點は明白である。 又ハルガスミといへば「春の霞」のこと、ハルメクといへば「春の氣候になる」といふ意味で、一貫した「春」といふ要素がある。

ハルはかういふ風に音形と意味の聯合した單位であつて、かかる單位なり又單位の結合例へばハルアキ(春秋)なりが、われわれの腦裡に共通の約束として、一定の體系を有してゐる。それが日本語ならば日本語といふ言語を作るものであつて、日本語を語る者である限り、誰でも用ひ誰でも理解し得るものである。銘々のことばは別々でありながら、一般に用ひて一般に理解されるのは、言語といふ共通な體系が内在してゐるからである。

言語の實在的な單位はソシュール[二]の言つてゐるやうに「能記」(signifiant) と「所記」(signifié) の聯合したものであつて、どちらを單獨に取出しても、それは抽象であつて實在ではない。「聯合」といふ語がわるければ、クローチェ[三](Croce)のやうに「有機的關係」と稱してもよい。それは意味といふ内容と語といふ外形が對應するといふ、昔からの「内外並行說」を鵜呑みにする譯ではない。

ところが、具體的にわれわれの經驗するのは、かうした體系そのものではない。例へば、今、私が、ハルガキタと言つたとする。これはハル-ガ-キ-タといふ三要素よ

り成る文、卽ち言語の一形式を用ひたのである。しかし直接經驗するのはさういふ抽象的な形式そのものではなくて、今私が言つた具體的な事實である。ハルガキタと文字で記せば、具體的な樣相は明かでないが、實際にハルガキタと聲に出した場合を考へてみると、聲には色々の抑揚があり調子があつて、何等かの氣持を表はしてをり、それに表情や身振が加はつて、具體的な言表は或る相貌を呈するものである。それでハルガキタなる言表を聞いた者は、その意味を理解すると同時に、歡喜ならば歡喜といふ氣持を感知するであらう。これは勿論特殊な一例であるが、個人が言語を行使した場合に、體系としての言語には見當らない樣相が發動することは、原則的に認めてよい事實である。文字で記されたものも、個人的な言の一例として見る限り、同樣である。現に今私が此の文を草してゐる間に、漢字や假名の遣ひ方、段落の切り方、テニヲハの使用法に、相當の氣配りをしてゐる。これも個人的な言に働く一つの樣相である。かやうな樣相は言を特色づける要素であるが、その一般的な特色は、個人によつて異ること、場

合々々によつて異ること、抽象的な形式として存在しないこと、などであつて、かかる様相の加はつた言は、一回切りであり、個人的であることが、何よりも特性となるのである。これを靜的に實在する體系と較べてみると、動的な働き卽ち機能であると云へるだらう。

さういふ意味の機能は、用ひられた言語の形式に次元の異つた力の掛け合はされたものである。同一の形式を用ひても、場合によつて異つた效果を生むのはそのためである。平凡な語が平凡でなくなることは、我々のよく經驗することである。例へば「兵に告ぐ」の一文は所謂名文ではない。しかし我々があの一文に感動したことは事實である。一語一語を逐つてあの文を讀めば、何の變哲もない平凡な文章である。しかも何の變哲もない平凡さが却つて當時の人々にあの强い感動を與へてゐる。それは何よりも我々があの**ことば**によつて、上官の部下をおもふ温い心情に打たれたからである。我々は又それに打たれる背景の緊張した空氣の中にあつたのである。さうした理由からあの平凡な一

文に大きな價値を見出してゐる。さうなると、題目の中にある「兵」といふ語にまで、何か特別な感情を持つやうになるのである。あれは軍隊では何時も使つてゐる當り前の語だらうであるが、環境のちがふせいもあらう、あの場合あのやうに使はれてみると、特別な意味をもつて私達の胸に迫つてくる。文の形だけは平凡なのである。しかも我々はそれに特殊な經驗をしてゐる。かう考へると、・・・ことばには大事な二つの見方、卽ち形式から見る見方と機能から見る見方のあることが分るであらう。

上田廣の『建設戰記』の中に次のやうな一節がある。

「君は喰ふか、喰はれるか、つていふ言葉を知つてるだらう」
「そりや知つてゐる、そこまで來てるから俺も氣になるんだよ」
妙な話はそれで終つてしまふ。「喰ふか、喰はれるか」といふのも嘗て水間部隊長の訓辭にあつた言葉だが、私はこれくらゐ日の經つにつれて現在の私たちの焦慮を言ひ現して

ゐる言葉はないと思つた。この動物的な本能の一時的な現れをつかんだ言葉は、私たちが本當に民族的な正義に燃えるときいつそう悲壯な響を持つのである。さうだ、喰ふか喰はれるかだ、と私はもう一度呟く。

「喰ふか喰はれるか」はそれまでに聞いたこともあつて、特別の感銘はなかつた。ところが此の戰場に於ける異常な雰圍氣に於て、それの本當の意味が實感できて、しみじみした感情を味はつてゐるのである。此處でも平凡な語が特殊な價値を持つて體驗されてゐる。かういふ方面から見ると、ことばは又異つた相を呈するものである。

言語表現そのものは何とでも解釋のできる不定な意味しか持たない。「愛は生命である」といふ表現は、詩人の印象的な叫びともなれば、生命の本質に關する哲學的な斷言ともなる。これを詩人の叫びと見た場合を、クローチェは「敍述」(proposition)といひ、哲學的な斷言と見た場合を「判斷」(judgment)といつて、兩者を明確に區

別してゐる(*Logic*, Engl. tr., Macmillan, London, 1917, P. 112)。その名稱は別として、かやうな區別が認められるのは、文法形式を分析して見るのでなく、生きた體驗の表現を見るからである。

ことばを學問的に、卽ち言語學的に觀察するのは、從來さうした生きた體驗としての語でなく、その根柢にある一般形式を分類し說明することであつた。さうすると「兵に告ぐ」は名詞の與格に動詞の敍實法が加はつた文の形式であり、「喰ふか喰はれるか」は動詞の能動態と受動態を連結した文の形式となる。體驗はそのままでは學問にならないで、これを基本形式に分析してはじめて學問になるのであつた。しかし生きた體驗をそのまま觀察する學問の方法もあつてよい筈である。醫學に解剖學と生理學があるやうに、言語學にも解剖學と生理學があつてよい。雜駁な比喩であるが、解剖學に匹適するのが形式の學卽ち文法論であり、生理學に匹適するのが機能論なのである。

私は先づ廣い意味の機能論から出發しようと思ふ。本論より遠ざかるやう

であるが、これを第一に明かにしておかねばならない。此處で解してゐる廣い意味の機能とは、生活機能一般のことである。その中に於て、言語活動が如何なる位置を占め、如何なる働きをなすかを、一通り說明することにする。

一、de Saussure: *Cours de linguistique générale*, Payot, Paris, 1916, deuxième édition 1922.
　小林英夫譯、言語學原論（岡書院、一九二八）

二、Ibid., P. 144.
　譯書、二〇九頁

三、Croce: *Logic*, Engl. tr., Macmillan, London, 1917, P. 114.

二　生活と言語活動

我々は生活してゐる。これは根本的な事實である。食物を食べ、着物を着、家に住んで生活してゐる。之を物質生活として置かう。次に我々は泣いたり笑つたりして生活をしてゐる。感情を除いて了つては我々の生活は成り立たない。人間はとりわけ感情的な動物であつて、泣いたり笑つたりすることは、我々人間に特有な生活の仕方である。これを感情生活としておく。それから我々は考へて生活してゐる。何を食べようか、何を着ようかと考へてゐる。本能生活といつても、全然考へのない生活は、少くとも人間の生活ではない。我々は思考生活をしてゐるのだ。物質生活、感情生活、思考生活――かういふ生活は、實際に於て、別々に存在するのではなく、生活目的によつて有機的に統一されてゐる。

どれかが優勢になることはあつても、それだけで獨立するのではない。さういふ點に生活といふものの特色がある。

右に述べたのは、人間の有機生活と云へるものである。かういふ生活は、どんな人間、例へば孤島に流れついたロビンソン・クルーソーでも營まねばならない生活である。ロビンソン・クルーソーは、島に辿りつくと、早速小家を建てたり作物を作つたりする。何も考へてゐないやうだが、實利的な生活設計を考へて之を實行してゐるのである。感情が無ささうに見えるのは、彼の特色であるが、實利感情――之も感情の一種である――が働いてゐる。從つて、ロビンソン・クルーソーでも、上に述べた人間の有機生活だけは圓滿にやつてゐる。

ところが、ロビンソン・クルーソーで特異なのは、彼が孤島に辿りついたといふことである。かういふ經驗は我々の生活に滅多にあるものではない。文明社會――とまで行かなくても、共同社會から隔絶されたといふことは、思ひ切つた裝置を施した大きな實驗である。普通我々が營んでゐるのは社會生活である。

團體の種類は色々であるが、社會的に協働の生活をしてゐることは同一である。元來人間は群住して共同生活を營んだものである。原始社會に於ては、個人の獨立性など認められない。各人は團體の一員としてしか生存の權利を持たないのである。家長と家族、首長と輩下、そして生活目的に向つての協働――之がかやうな社會の單純な構造であり機能である。文明社會といつても、根本的な意味に於ては、之と變りは無い。異る點は、原始社會には變化も發達も無い、歷史を缺いでゐるのが原始社會の特性であるのに反して、文明社會には歷史があり文化があり價値の創造があることとである。

かやうな社會は、單なる個人の寄り集りではない。一＋一の關係では社會は成り立たない。社會には個人の集り以上のものがある。集團的な機能や民族精神が社會を結成し之を發達させる帶（バンド）である。原始社會では、之が單純な生活目的への活動といふ形で現れ、文明社會では、それが價値の創造といふ文化的な活動、又は宗教的な理念の發展、といふ形になつて現れる。かうした中心があつ

て、各人その處を得た活動を營み、それが有機的な統一を見せる。我々は統一の中心と雜多な遠心的樣相とを眺めることができるのである。

先づ個人的なものよりも集團的なものの優位を認めなければならない。これは各社會を通じての根本的な生活を出發點とする以上、當然のことである。生活は元來活動であり行爲であつて思索ではない。活動や行爲は孤立して行はれるものではない。孤立して行へるのは思索のみである。思索はとりわけ知性の活動であつて、生きた具體的な生活より遠ざかる傾向のあるものである。生活の活動や行爲は、集團的な感情や民族的な精神によつて結ばれてゐるもので、思索の產物である「同一と矛盾」、「類比と對照」の如き論理的な形式を超越してゐる。「雜多の統一」のやうな矛盾した概念が融合してゐるのは其の爲である。即ち生活を律してゐるのは、知性では解釋のできない感情の論理なのである。

（二）

生活、とりわけ社會的生活と解釋した生活は、何よりも動の相から眺めなければならない。動に能動となり受動となつて有機的な聯關を作る。社會的行動

の根本的なものは、命令と服從、相談と協働といふ形に還元することができる。その具體的な方法には、手を動かせる運動や、道具例へば刀や旗やラッパの如きものを用ひる運動が考へられる。しかし人間には天性惠まれた言語器官がある。生理的に惠まれた條件や特有な發達を示す知能の作用があるので、音聲を分節し、之を用ひて物の記號とすることができる。從つて、號令や協議も、言語活動によつて敏速且つ正確に行ふことができる。

我々の生活をかう考へ、その中に於ける言語活動を觀察するならば「言語は思想感情を傳達する手段である」といふ定說を改めて一考する必要があらう。これは思想感情を出來上つた固體と考へ、言語活動はそれを甲から乙へ言語を通じて手渡しする活動と解するのである。論理的な意味は、時間を絕した、從つて作用ではない構造なのであるが、これを言語活動によつて傳へる場合は、それが作用にならなければならない。言語活動を機能の側より見れば、直接經驗するものは「我考ふ」といふ作用であつて、考へられたものではない。意味構造は遠く

に志向される客觀的なものであつて、直接に經驗するのは意味作用そのものである。此の意味作用は主觀的な働きであるが、純粹に個人的なものではない。言語活動が始まる場合、必然的に話者と聽者の役割が分化される。即ち言語活動には原則として表現(Ausdruck)と印象(Eindruck)の面がある。表現することは印象されるやうに表現するのである。表現作用は廣い意味で個人經驗の社會化である。その手段として社會の共有財である言語を用ひるのであるが、具體的な言語活動に於ては、言語といふ形式だけでなく、もつと大事な社會生活の機能を考へなければならない。言語を通じて言語活動は行はれるが、我々が具體的に經驗するのは言語活動そのものである。思想感情の作用は言語活動に於てである。我々が思想感情を表現するといふ場合、又これを理解するといふ場合、思想感情の作用そのものを注意する必要がある。これを律するものが社會生活の動的な作用である。その意味で、我々が考へるといふのは共に考へることであり、感ずるといふのは共に感ずることである。その契機になるものが言

語活動なのである。かやうに考へてくると、言語活動は例へば或る感情を既知の者即ち話者から未知の者即ち聽者に言語を通じて傳達するといふやうな機械的な說明では、到底感情の表現及びその理解は明かにならない。感情は傳へるべきものでなく受取るべきものでない。生活の具體的な一瞬間に於て、現實の行爲を中心にし、話者と聽者が同じ感情を共感するのでなくては、感情を理解することはできない。

成程、時間的に分析すれば、話者に表現すべき思想があり、生理器官の活動が行はれて、發音作用となり、その結果生じた音聲が聽者に傳はつて、意味の理解作用が行はれるといふ順序になつてゐる。しかし、これは系路を一々分析して考へた話であつて實際の言語作用はかかる簡單な圖式では說明されないのである。ほんとうの理解が生ずるためには、話者も聽者も同一の生活面に立つて、同一の心理的な時間を經驗しなければならない。

言語活動は、生活機能を助け、生活を促すだけではない。それ自身が生活機能

の一なのである。我々は言語活動によつて生活を營んでゐると稱してよい。
これは言語活動の本質を理解する上に大事なことであるが、又具體的に經驗される言の性質を理解するためにも缺くことのできない要請である。

1、Ribot : *La logique des sentiments*, Félix Alcan, Paris, cinquième édition 1926.

三　言語（ラーング）と言（パロール）

言語活動が旗を振つたりラッパを吹いたりする合圖又は信號と異る點は、言語を用ひるといふところにある。言語は歴史的に傳承された普遍形式であつて、之を生きた活動にするのが言語活動である。言語は、そのまゝの姿では、我々の經驗し得ない潛在的なものである。例へば、我々は國語を知つてゐるといふ。しかし之を經驗するのは、生活の必要があつて具體的に之を活動とした場合である。現に私は國語を用ひて此の文章を書いてゐる。かういふ具體的な場合に臨んで始めて言語を經驗するのであつて、その根柢となる言語そのものは、一定の形式として我々の腦裡に靜かに内在するのである。言語はその意味で靜的な體系と稱してよい。我々の使つた言語は、形式又は體系としての言語その

ものではない。根柢にある一般形式とそれが具體的に現れたものとは、少くとも方法上から區別しなければならない。

言語の體系とはどんなものであらうか。我々の知つてゐる言語は、個々別々な語彙や文法から出來てゐるものではない。例へば「父」といへば「母」と結びついてゐる。「兄弟」は「姉妹」と結びついてゐる。之は意味上の聯合であるが、文法的な形の上からも聯合してゐる。「父の(手紙)」「父は(健在)」「父を(見送る)」などその例である。更に「父の(手紙)」は「母の(土産)」「兄の(帽子)」「妹の(人形)」といふ風に聯合してゐる。のといふ語だけは使はないし、その意味を說明しろと言はれても、文法家でない限り、適確な答を出すことはできないが、右に擧げたやうな形式のつながりがあつて、實際に使ひ誤ることはない。形式として內在してゐるといふのは、その意味である。かかる形式が內在してゐる證據には、所謂「類推形成」といふ現象を見るがよい。「赤い」「白い」「青い」といふ語があつて、いといふ形が一般形式として內在してゐる。それがために、子供は自然に「茶色い」と言ふのである。しかしかか

る語法は「茶色だ」「茶色の」に訂正される。心理的な活動から云へば、「茶色い」は自然な形成であつて、許されてよい理由を持つてゐるやうに見えるが、何故に許されないのであるか。許す者は何であり、所謂「誤」を正す者は誰であるか。

此處で、言語のも一つの特性、卽ち言語が歴史的に傳承された形式であるといふ事實を考へなければならぬ。「赤い」「白い」「青い」といふ語は、生活の必要上、用ひ古された語であつて、一聯の形式的なつながりとして存在してゐる。「茶色」は、それが「茶」から出た比喩であるのを見ても分るやうに、言語の時代層から云へば、前述の語彙に較べて後期に屬するものであると思はれる。從つて、形式上それらの仲間入りが許されないまゝで、受け繼いで來てゐるのである。「黃色」は之に較べると、兩者の中間に位する。「―色」といふ形である點では「茶色」と等しいが、茶（支那より渡來）の比喩を用ひた點では、「茶色」の方が後期の言語層に屬するものであらう。いづれにしても、「黃色い」といふ形は、歴史的に傳はつてをり、社會一般の許してゐるものである。

一人、二人と算へるのに、ヒトリ、フタリ、ミタリ、ヨタリと言つたのは古い時代のことである。今ではミタリの代りにサンニンといふ。之は明かに「三人」であつて、支那語から渡來した語である。此の外來語が、形の上でまとまりを見せてゐたヒトリ、フタリ、ミタリ……の中に侵入し、意味上聯合して、數の序列の中におさまつてゐる。ヨタリは今ではヨッタリともいひ、ヨニンともいふ。之も兩者の中間に位して、兩方の形がそのまゝ許されてゐるのである。

心理的には、自然に規則正しい聯合の形をとる傾向が存在するから、もし歷史的な條件が加はらなければ、言語の體系は、名實ともに意味と形とが揃つた整然たる姿を呈するかも知れない。ところが、歷史的に偶然な事實が發生し、之が混和して一見雜然たる相を見せるのである。支那文化との接觸、それに伴ふ支那語よりの借用など、上述の例でも分るやうに、かうした歷史的事實なのである。心理的な機構と歷史的な事實——かういふ由來はあるが、我々に與へられる言語は歷史的な傳承物としてである。親より子へ、子より孫へと傳へられて行く。

又一時代より次の時代へと受け繼がれるのが言語である。そして此の傳承物を忠實に保存させるのが社會の拘束力である。個人は自由に發展させようとしても、それを許さないのが社會の力なのである。個人は言語を文法書にあるやうに全體系として傳承するのではなく、ボチボチと體系にまとめ乍ら受け繼いで自分のものにする。從つて個人が自分の言語體系を反省する場合でも、全體系を展望するのには相當な努力を要する。普通は體系の一斷面を想起するに止まるが、それでよいのである。言語を受け繼いで自分のものにすると述べたが、これは取りもなほさず個人の心理的な作用なのである。かかる自主的な作用が活潑となれば、前記の如き「茶色い」といふ形も生じてくる。之はやがて社會の力によつて訂正されるだらう。いくら此形が合理的であると言つても、自然な心理作用の産物であると言つても効目は無い。社會が許さなければ言語の要素として通用はしない。

さういふ點から、言語の體系は又社會的に共通な所有物と稱することができ

る。共通な所有物であればこそ、言語を用ひて互ひに理解することが可能なのである。それで、言語を用ひての言語活動は、一般根柢である形式を具體的な個々の場合に機能化させる活動であると云へるだらう。

生活機能の一としての言語活動は、とりわけ情意的なものであることを前章で述べた。ところが、一般形式としての言語、社會的制約としての言語は、とりわけ知的な體系である。知的な體系といふのは一種の類語反覆(トートロヂー)であつて、形式とか體系とかいふものが元來知的な性質を持つたものなのである。實際の言語活動に於て我々の經驗するものは、柳は綠花は紅ともいふべき現象の世界である。ところがその中より抽象した一般形式は、現象の根柢に橫たはるもので、其自身は色も無ければ味も無い形骸である。一方は無限に流動し無限に變化する生きた姿であるのに反し、之は寥々寂々と橫たはる靜かな體系である。水は飲んでうまい、しかし水の成分であるH_2Oは味も無く香も無い。

知的な體系である言語が、情意的な言語活動の作用によつて、生きた姿となつ

て顯現し來つたものを言と稱する。言は一般形式が特殊な機能となつて現れたものである。我々が直接體驗するものは此の言である。我々は言によつて直接に表現し理解するのである。言は知的な形式が情意的な活動によつて轉換したものであるから、その中核に知的な要素を有し情意的な衣をまとつた生き物である。知的な中核は論理的な意味を代表し、情意的な衣は生活の樣相を現はしてゐる。

谷崎潤一郞は『文章讀本』の中で「待望」などといふ語を聞くと、立て膝をして食膳に向ひ、大急ぎで飯を頰張る人の、卑しいしぐさを思ひ出さずにはをれないと述べてゐる。これは「期待」といふ語と「希望」といふ語から合成されたもので、構成法から云へば、別に好惡の感情の入るべき語ではないのであるが、かういふ語を造つて用ひなければならない人の氣持を批判してゐるのである。これが新造語であり現在好んで用ひられるために、ことさら情意的な作用が目立つのだ。「荒鷲」といふ語でも事變以來特別な意味に用ひられて、比喩的効果を擧げてゐる。

これら新造語は、新しい語形なり用法なりによつて、人の注意を惹くのであるが、用ひ古された語でも、新しい必要に應じて用ひられると、強い感情に訴へることができる。論理的內容は同一でも「弱肉強食」よりは「喰ふか喰はれるか」の方が情意に訴へる力が強いし「富める國、貧しい國」よりも「持てる國、持たざる國」の方が現在の必要に叶つてゐる。「複雜怪奇」といふ語も、平沼內閣が總辭職に際して用ひたので、新しい感情價値を持つにいたつた。

かやうな特色は、言語の形式そのものに具はるよりも、生活の場面に卽して現れるものであつて、これを理解するには、言の動的な構造と情意的な發動力を觀察しなければならぬ。言は言語のやうに簡單な圖式では說明できない。言は不安定であり又發展的である。言は多樣な因子より成り、微妙な構造を有する。次にかかる言の因子と構造を一應明かにしておかう。

四　言の因子と構造

言は言語が言語活動によつて機能化したものであると述べた。言語活動は既述の如く生活の一機能である。從つて言語活動の作用によつて言が生ずるならば、言の構造は具體的な生活の一斷面であると云へよう。此の斷面の各要素と要素間の關係及び統一的なメカニズムを明かにしなければ、言の特性は說明されない。

「言の因子」(factors of speech) といふ語はガーディナー(一)(Gardiner) が用ひてゐる。彼によると、言の因子は、話し手 (speaker)、聞き手 (listener) 言語 (language) 及び意味する物 (thing meant) の四つであつて、立場 (situation) はその背景になるといふ。立場を單なる背景と考へるのは、動的な言を說明するのに充分ではない。立場をビューレル(二) (Karl

Bühler）は「場」（Feld）と言つてゐる。場とは磁場の場であり電場の場である。かういふ風に物理學的に解釋すると、場に現れる力の強さ及び方向、力の本體といふやうな概念が生じてくる。場は力例へば磁力が働くから生ずるものであつて、始めから豫定された背景ではない。言に就て云へば、場は話し手と聞き手によつて構成されるものであり、又場があつて、話し手は話し手となり、聞き手は聞き手となる。三者は互ひに聯關して構成されて行くもので、始めから場があり話し手があり聞き手があつて、三者が寄り集るといふものではない。此の場合、磁力に相當するのは言語活動の力である。三つの因子は、言語活動の力によつて、分化され統一されるのである。

物理學的な解釋は、最近の心理學の特色である。[三]ゲシュタルト心理學がそれで、その根柢にあるものは、力・方向・場の如き力學的な概念である。かういふ方面から言の一例を說明してみると斯うなる。例へば、甲と乙の二友人が路上で出會ふとする。互ひに始めは相手が誰であらうかと疑問を生じ、其處に緊張が始ま

る。近づいてみて、甲は乙を、乙は甲を認知する。其處に新しい場面が構成されて別な緊張を生ずる。甲は乙を乙だつたと思ひ、乙は甲を甲だつたと思つて、親密の感情が湧き起る。此の感情が動力となつて異質的なものが構成され、異質的なものを均して緊密な同質性に復らうとする緊張が生れる。そこで互ひに例へばヤアヤアと言葉をかけ合つて緊張が解ける。ヤアヤアといふ言表は、かくの如き複雑な動的構成の一過程であるといふのが、ゲシュタルト心理學の説明である。

右の説明で、力と方向による心理過程は明かとなるであらうが、我々の不滿を感ずるのは、形式的な概念が多くて内實を缺いでゐるといふことである。例へば、親密の感情を生じてヤアヤアと言葉をかけるといふ事實を、もう少し生きた體驗として解釋してみたい。社會生物學的な解釋が之に近い。例へばバイイ(四)(Bally)流に云へば、次のやうになる。

甲と乙とは同じ社會團體の成員であつて、共通の目的(之は意識しなくてもよ

い例へば種族保存に向つて共々生活を營んでゐる。彼等の生活を促進するものが快であり、之を阻むものが不快である。さて甲乙が路上に相會して、ヤアヤアと言葉をかけ合ふとすれば、之は互ひに無事なことを喜び、惹いては種族の安泰を祝ふ快なる感情を自主的に表現する。さういふ意味で、ヤアヤアは一種の情的表現である。

ゲシュタルト心理學は動的構成又は緊張體系の一單位として個人を見、生物學的な觀點は個人を社會又は團體の一成員として見てゐる。前者の特色は機械的な力學に在り、後者の特色は生の目的觀の上に立つてゐる點に在る。力學的な見方は厚みの無い構造を見てゐるし、目的觀そのものは理念的で餘りにも遠大な見方である。私は厚みもあり血の通つた手近な生活を見て行きたい。日々の生活機能を中心にして觀察したいと思ふ。

前の例を取つて考へると、甲と乙とが友人であるといふ事實及び兩者が路上で出會つたといふ事件そのものを端的に觀察する。甲と乙とは友情で結ばれ

てゐる。之が大きな生活である。そして兩者が路上で會したことは、その生活の一斷面である。此の場合に何よりも動力となるものは、友情の具體的な發露である。此の動力に動かされて言語活動が始まるのは生活の具體的な一機能である。言語活動を心理的に見れば記憶の再生や表象の確認といふやうな作用が行はれてゐるであらうし、生理的に見れば腦中樞の命令が神經によつて傳へられて發音器官の運動を生じ或る音聲を發生するものと考へられる。その細かい分析はさて置いて、兎に角言語活動が生活の一機能として發動するといふことに注意すればよい。言語活動を契機として、一定の立場を生じ、話し手に對する聞き手の關係としての甲と乙の關係が生ずる。此處に生じた構造は、力と方向の如き純粹な力學的構造でもなく、あらかじめ具はつた背景の前に左右より話し手と聞き手が現れるといふ簡單な舞臺構造でもない。言語活動によつて再構成された生活の斷面であつて、生活機能といふ力によつて組立てられた生きた構造である。單なる舞臺面の如き立體構造では不充分である。言語

活動によつて調節された四次元的な構造と考へなければならない。

かかる言語活動によつて生じたヤアヤアなる言表は、靜的な體系より動的な機能に轉換された次元の異る單位であつて、之が言の一例なのである。かやうな言表には、感情が活潑に働き、血が活き活きと通つてゐる。かやうに考へると、もはやヤアヤアが再認の感情を「傳達する」手段であるといふやうな、素朴な説明ではどうにもならない。根本的に別な働きがあることを知るのである。

以上の説明で明かな如く、所謂「言の因子」なるものは結局言語活動によつて動的に分化され構成されるものであつて、始めから別々に存在するものではない。もともと役割の異る甲が乙に如何にして思想感情を傳達するか、又乙が如何にして之を理解するか、といふやうな事はもはや問題とはならない。筆者の考によれば、言語活動といふ情意的な作用があればこそ、甲と乙は話し手と聞き手の相關的な關係に置かれるのであり、生活機能に根ざした理解があればこそ、言行爲となつて現れるのである。

讀者或は反問されるであらう、實際相手の話を聞いて之を理解し得ない場合があるではないか、と。 聊か詭辯に聞こえるかも知れないが、次の如く答へることができる。 卽ち「理解し得ない」と感ずるのは、そもそも理解が根柢に在るからであつて、偶々理解不可能の一事例を以てしては、根本的な理解の條件を覆すには足りない。 少くとも理解し得ないことを認める半面には、理解しようとする志向作用が働いてゐることは事實である。 生活の具體的な場面には、複雜な條件が錯綜してゐるから、偶々理解し得ないやうな事例も生じ來るのであつて、原則としては上述したやうな共感の事實を前提としなければならない。 全然未知の外國語を聞いて理解し得ないとか、全然社會の異る人間の言葉が分らないとかいふ場合は、生活機能を共にしてゐない場合であつて、之は始めから問題にならないのである。

一、Gardiner: *Theory of Speech and Language*, Oxford, 1932.

二、K. Bühler: *Sprachtheorie*, Fischer, Jena, 1934.

三、Lewin: *A Dynamic Theory of Personality*, McGraw-Hill, New York, 1935.

Lewin: *Principles of Topological Psychology*, McGraw-Hill, New York, 1936.

波多野完治、文章心理學（三省堂、改版一九三七）

四、Bally: *Le langage et la vie*, Payot, Paris, 1926.

小林英夫譯、生活表現の言語學（岡書院、一九二九）

Bally: *Traité de stylistique française*, 2 vols., Carl Winter, Heidelberg, seconde édition 1919–21.

五　人格と文體

(一)バイイは、言の機能に自主的な要素のあるものを第一義とした。例へば、老人が停車場のことをステンショバ(ステンショと停車場の混成 contamination)と言つたとする。我々は之を聞いて老人の時代と教養とを推察するが、老人自身はさういふ語のおかし味を意識して言つたのではない。即ち自主的表現ではない。之に反して、彼が「龜の甲より年齡の功」と言つたとすれば、彼自身此の言葉の持つ効果を意識して言つたもので、自主的表現であり、情的表現として取扱ふことができると言ふのである。

その點で、バイイは單なる人間の實日的な機能をのみ考へてゐたのでないことが分る。しかし彼は個性を第二義の問題とし、ただの活動又は行動としての

言を考へ、個性を持ち人格を有する個人の自由な表現行爲は問題としなかつた。我々の出發點も、生活の一機能としての言語活動であつて、その結果生ずる言には、何等個人の創造と認むべきものは無かつた。今やそれより一歩を進めて、人間より個人、機能より創造を考へるべき段階に達した。

具體的な言を、時間的に生起する一現象又は一機能とのみ考へないで、其處に何等かの中心を見出し、その中心に則つて之を絶對的な創造と見做すのには、進んだ直觀が必要である。比喩によつて説明すれば、言の一般機能はピラミッドの底面に相當する。かかる底面が無ければ、ピラミッドは存在の根柢を失ふであらう。しかしピラミッドをしてピラミッドたらしめるものは、此の底面ではなく立體三角形の頂點である。我々は今、言の底面よりその頂點へ登らうとしてゐるのである、堅實な形態を作らうとしてゐるのである。

我々は、言の中心點乃至は頂點を、話し手の人格に求めようとする。話し手を、言語活動によつて分化した言の一因子と考へることで滿足しないで、話し手を

言の中心に置かうとするのである。そのためには、先づ人間一般から個人又は人格といふ概念に到達しなければならない。

第二章に於て、人間の生活には、單なる有機的生活の外に、社會生活の存在することを述べた。更に社會生活には、原始社會の生活と文明社會の生活があることを記し、文明社會の生活には歷史的な要素の加はり來ることを說いた。歷史的な要素とは、ただ時間的な變化過程をいふのでなく、時代的に發展する價値的な個性の存在することをいふ。例へば、ルネサンスは一定の因あり果あつて生じた事件ではあるが、それが歷史的な事件であるためには、その時代にのみ實現し得た價値及び絕對の性格を有することを認めなければならない。文明社會の生活はかういふ意味で歷史的である。歷史的であり絕對の性格を有することを第一義として考へるならば、かかる社會生活は民族生活と稱すべきものである。民族生活を營む主體は、人格的な民族である。民族は、(三)シュプランゲル(Spranger)によれば、民族的世界觀を有し、かかる世界觀を中心とする固有な文化

を持つてゐる。民族的世界觀の確立によつて、民族に適しい獨自の價値が保證される。民族の精神的な絆になるのは民族獨得の言語である。民族は要するに個性を持つた人格であると稱することができる。その點で、民族は單なる人種でもなく國體でもない。民族にも民族生活にも獨自の性格が具つてゐる。

個人はかやうな民族の分化したものである。分化といふのは、ただの分割でも分裂でもない。絶對的な轉換による發展である。例へば、兩親の血を繼いだ子が、兩親とは又異つた絶對的な人格として生れる如きものである。かかる分化によつて、民族の無限なる個々の單位であり、しかも絶對的な性格を具へた個人が生じてくる。個人は、もとから民族精神の擔ひ手であつて、しかも絶對獨自の性格を有する人格なのである。

かやうにして、個人的な人格と、此の人格に卽した(四)絶對價値が生じ來るのである。此處まで到達すれば、言機能の單位は個人獨得の價値として考へられる。言語活動の基底に在る言語に、單なる心理的體系だけでなく、民族精神なるもの

が含まれてをり、言語活動そのものも、もはや有機生活の機能であるに止まらず、民族生活の創造作用となる。かかる作用によつて分化する個人は、單なる話し手と聞き手でなく、個性を持つた創造的な人格となるのである。又かかる人格は、上に限定したやうな言語活動を俟つて、始めて現れると云へるのである。人格が人格を理解する過程も、既述(三三頁)の如く、始めより分離した甲が乙を理解するといふやうな機械的なものではない。此の場合も、言語活動の根柢に共感と理解が既に存在するのである。クローチェはその根柢に「精神の普遍性」を認めてゐる(aesthetic, Engl. tr., Macmillan, London, second edition 1929, P. 121)が、さうした實體を考へなくとも、活動の概念から理解作用は自ら說明されると考へる。言語活動を契機として、理解する人格と理解される人格に分化するのである。

或る人格が表現するといふのは、クローチェによれば知覺的な內容を直覺によつて形作ることである。クローチェが別に外部的な傳達作用を考へ、その際に行はれる語の選擇を說いてゐる(aesthetic, P. 117)のは anti-climax だと思ふ。直覺の形成

作用そのものに、相手を考慮し相手に束縛されながら、客觀性と普遍性を賦與する作用が含まれてゐなければならぬ。さうでなければ、眞の意味での表現は認められない。クローチェの如く、內部表現と外部表現を區別することは、理解作用に機械的な說明を施さねばならぬ原因となるのである。

言を價値の單位と考へ、これを表現する個人に卽して解釋する場合に文體といふ。文體を研究する言語學の方法が文體論である。文體論は、機能論を底面とするピラミッドの頂點に位するものと云へる。換言すれば、人格を中心とする機能論である。その意味で、一般的な言語形式を體系化する文法論と對立するものである。

文體論の取扱ふ問題は、文法論に於て扱はれる問題の全部に對應する。卽ち音形及び意味の全部を研究の分野とするものであつて、決して文法論の問題の一部分に限られるものではない。文體論と文法論の差は、方法の差であつて扱ふ問題の差ではない。

一、Bally: *Le langage et la vie.*
小林英夫譯、生活表現の言語學

二、Vossler: *Gesammelte Aufsätze zur Sprachphilosophie,* Max Hueber, München, 1923, P. 97 ff.

三、シュプランゲル、文化哲學の諸問題（小塚新一郎譯、岩波書店、一九三七）

四、Vossler: *Positivismus und Idealismus in der Sprachwissenschaft,* Carl Winter, Heidelberg, 1904.
Vossler: *Sprache als Schöpfung und Entwicklung,* Carl Winter, Heidelberg, 1905.
小林英夫譯、カルル・フォスレル言語美學（小山書店、一九三五）

六　文體論の特性

　文體といへば、誰しも多少の關心を有し、文體論も、人夫々の意味に於て、多少なりともファミリアーな概念らしく思はれる。そのために却つて混雜や誤解が生じ易く、嚴正な言語學の方法としての文體論は、一般に認識されることが少い。
　古くから「文體論」(stylistique)といふ名稱は、ラテン語法の修辭的用法を教へる學問といふ意味に用ひられてゐる。今でもさういふ考へは殘つてゐて「正しい用法」「美しい語法」を教へるのが文體論だと解釋され勝ちである。さういふ意味の文體論は、一種の修辭學であつて、規範的なのがその特色である。例へばマイエル(Richard M. Meyer)の「ドイツ語文體論」(*Deutsche Stilistik*, C. H. Beck, München, dritte Auflage 1930)などその一例である。一定の標準を設け、之に照らして文章の良し惡しを論ず

るのである。本書にいふ文體論は、かやうな規範學ではない。經驗的な記述の學であることがその特性である。その論ずる價値は、一定の客觀的な標準によつて批判される價値ではない。個人に卽し人格の表現としての絶對價値を論ずるものである。

一方「文體論」は文學の方面で古來論ぜられてゐる。文學も廣い意味の生活機能の一であり、とりわけ人格のすぐれた表現である以上、此處にいふ文體論の對象となり得ることは勿論であるが、「文學的な」價値の批判を目ざすか目ざさないかによつて、文學論と分れるのである。文體論では、漱石ならば漱石の表現された人格を記述すれば仕事は濟むのであつて、漱石が秀れた作家であるかどうかは問ふところではない。我々に手近な材料としては、文學作品が一番多く、又研究のし甲斐のある對象であるから、文體論の實踐に文學作品を持つて來ることが事實一番多いのであるが、我々はかかる作品を言の一例と見做すに過ぎない。文學作品に就て「研究し甲斐がある」と考へるのは、言語學の範圍外である別な高

い標準から批判する丈であつて、言語學としては如何なる材料も研究し得るのを原則とする。筆者が「文體論研究」に於て試みた「西田幾多郎博士の文體」と題する研究はその一例に過ぎない。

文學論で問題になるのは、意識的な文學的技巧の價値批判であらう。某々作家に「文體」があると稱せられるのは、文學的に秀れた技巧のある文體のことを言ふ場合が多い。グールモン (Remy de Gourmont) は「我々が感ずる如く、我々が考へる如く、我々の身體全體を擧げて、物を書く」(*Le problème du style*, Mercure de France, Paris, 1924, P. 9) と記してゐるが、その意味では文學も生活機能の產物と考へられるにしても、文學研究は其處に止まるものではあるまい。意識的な創造を重んずる點に文學論の特色があるのであらう。之も言の一例である限り、文體論の對象となることを妨げないが、技巧そのものの文學的價値は文體論の論ずべき問題ではない。

此事を一例によつて說明しよう。谷崎潤一郎は『文章讀本』(二八七頁以下)に於て、小說『蘆刈』の中の一節を取上げ「なくもがな」と思はれる箇所を指摘してゐる。

二三の例を示すと、

わたしはおひ〳〵夕闇の濃くなりつゝある堤のうへにたゝずんだまゝ**やがて**川下の方へ眼を移した。

……などゝ追懐にふけつてゐると**わたしの空想はそれからそれへと**當時のありさまを幻にゑがいて管絃の餘韻、泉水のせゝらぎ、**果ては**月卿雲客の**ほがらかな**歡語のこゑまでが耳の底にきこえてくるのであつた。

ゴチックにした箇所の無い方が、谷崎氏は文學的表現としてはすぐれたものであると反省してゐるのだ。文體論はむしろその「なくもがな」の表現を用ひなければばならなかつた必然性を追求して行くのである。文學的には劣つてゐても、それらの表現に當時の谷崎潤一郎に卽した價値を見出すのが文體論の任務である。

すぐれた修辭家でもあつたファウラー(Fowler)兄弟は、英語の'indeed'の濫用を戒めてゐる。しかし文體論は、さういふ語を用ひなければならぬ人々の心理をさぐつて行くのである。それを使つていいか惡いかは文體論の問ふところではない。

此處にいふ文體論は、文法論と並ぶ言語學の方法である。文法論は、十九世紀の分析的な科學精神と結びついで、目ざましい發達を遂げた。音韻論や形態論に亘つて、すぐれた分析と體系とを見せる印歐比較文法は、その著しい一例である。それは合理的なもの體系的なものに見られる單純な美しさを有しはするが、そのまゝでは複雜多樣な言語の實相を說明することはできない。それは何よりも動的な樣相を缺いでゐたからである。秀れた言語哲學者であつたフンボルト(Wilhelm von Humboldt)は、「言語は活動(energeia)である」と喝破したが、此の豫言者的な言葉が科學者によつて實證されたのは、十九世紀末の機能的な心理學が發達してからである。從來、言語學は歷史文法であるとの考へが、一般を支配して

をり、言語(ラーング)のみがその對象であると考へてゐる者は、今でも少くない。しかし言語學が language in general を研究するものならば、形式の面だけで研究は完了するものではない、併せて機能の面、現象の相を研究しなければならない。此處に機能論の存在理由があり、ひいては文體論の存在價値があるのである。

現代心理學の動向は、要素的分析より機能的な觀察へ、一般的な心理過程の研究より全體觀を基調とする個性心理學の方向へ發達してゐる。動的な全體心理學は新しい意味で美學への根柢をなす。それが純粹な形で發達すれば、類型的な性格學より絶對的な人格心理學に到達するであらう。一方、感情の研究も、リボー (Ribot) を始めとして、着々成果の現れることが期待され、我國では黒田亮博士の『勘の研究』(岩波書店一九三三)など、心理學的に新生面を開いてゐる。

文體論は、かういふ心理學を最も有力な補助學科とする。しかし文體論を心理學例へば性格心理學の一部門とする考へには同意し難い。文體論は何處までも文法論を基礎にするものであり、言語活動を契機にするものだからである。

形式と機能なる兩面は、文體論の始めから終りまで忘れることのできない基礎概念である。文法論の脚場を持たない文體論は、恰も土臺の無い家のやうなものであつて、言語學の方法としては不完全なものである。文法論を基礎とし、表現の契機を重んずる點で、文體論を言語を一徵表とする性格心理學の一部門とする考へには贊成し得ない。性格心理學としては、言語表現は一つの手がかりに過ぎないものであるが、我々は言語表現を性格又は人格を中心とした機能と見る點で、立場を異にするものである。「文體」(Stil)といふ概念は、元來殘された型といふ意味を持つてゐるが、我々は特定の人格又は性格が存在として既に與へられた個體であり、文體はそれの殘した型であると考へ、さういふ意味で、文體を觀察して人格像を再構成するといふ方法を探るわけではない。我々は、フォスレル(Vossler)が「フランス人はフランス語を語ることによつてフランス人となる」と述べた意味に於て、人格は語ることによつて作られると解し、人格が文體を殘すのでなく文體によつて人格が生れると考へる。從つて、言語表現を通じて人格

を見るのでなく、言語表現に於て人格を見るのである。我々の再構成するのは、言語活動であつて人格ではない。言語活動を再構成し、言語活動を機能の相に於て觀察し、その中心核に創造される人格を眺めるのである。我々はクローチェやフォスレルの說いた追想(二)(nachdenken)をなす前に、作者の表現過程そのものを再構成しなければならない。人格の創造作用に加はらなければならない。これは經驗的には不可能かも知れないが、時空を超越した觀想によつて行ふことができるのである。此事に就ては、改めて次の章に說明を加へるであらう。

次に、文體論の實踐方法の原則とも云ふべきものを要約して置かう。

一、Vossler: *Geist und Kultur in der Sprache*, Carl Winter, Heidelberg, 1925, P. 128.

二、Croce: *aesthetic*, Engl, tr., P. 119.
Vossler: *Positivismus und Idealismus in der Sprachwissenschaft*, P. 36 ff.

七　文體論の實踐方法

此處に最も實踐の機會の多い文學作品を例に取つてみよう。直接與へられたものは文字に記したことばである。これは既に記されたものであり既成物である。それが日本の作品である場合は、用ひられた言語は日本語である。これを先づ日本語の文體の一例と考へるならば、その主體は日本人であり、人格は日本人の民族性である。さうすれば、此處に中心點となるのは、日本人又は日本人の民族性であり、それを具體的な表現に於て觀察することになる。日本人の本質は、形而上的な實在ではなくて、日本人としての理念の發展である。我々はその發表の相を具體的な表現に於て觀察するのである。その基礎を文法論の方法によつて求めるならば、それは一般文法即ち歴史的發展の相を除いた言語

一般の構造となる。文體論はその具體的な現象の相を日本語に於て研究するのである。例へば、日本語の特性を和辻哲郎博士の解する如く「知識的反省以前の體驗の表現として極めて豐富であり、無反省なる自然的思惟を論理的に發展させることなく常により強き情意の表現とからみ合はせる」點にあるとするならば、此の論理以前の情意性は、言語一般が日本語に於て發展し顯現した相であり、其處に日本人的な特性の表現を見るのである。これは更に歷史的に發展して個々のより具體的な相となつて現れる。その一例として今與へられた日本語を觀察することになるのである。例へば、

福子さんどうぞゆるして下さい此の手紙雪ちやんの名借りましたけどほんたうは雪ちやんではありません

（谷崎潤一郎『猫と庄造と二人のをんな』）

は關西語の一例である。「手紙は」を「手紙」といひ、「名を」を「名」といふのは關西語の

特色である。關西語特に婦人のそれに就ては、谷崎氏自身に說明がある。その特色は、昔ながらの「餘情と含蓄」があることで、「大阪語には言葉と言葉との間に、此方が推量で情意を酌み取らなければならない隙間がある。」（谷崎潤一郎「鶉鷸隴雜纂」一六八頁以下）關西語では、テニヲハの用法が判然と區別されない。「名は借りた」も「名を借りた」も「名が借りた」も一樣に「名借つた」で濟ますのである。これを谷崎氏は餘情と含蓄の現れと見たのであるが、少くとも論理的な識別が十分語形に現れないことだけは云へると思ふ。（かやうな語法を谷崎氏が小說に於て借用したのは、シュピッツェルがケル（Kerr）の文體に關して述べた（*Stilstudien* II. Max Hueber, 1923, P. 二三）やうに、關西人の性格を如實に表現するためである。谷崎氏は「しんどい」の如き語を他の文にも用ひてゐる。）此の特徴は、別な方面に於て、日本語全體の持つ特徴である。それを別な作品から示してみよう。

「ハリ」

もう承知出來なかつた。三平は棒を拾ふと、金太郎の頭を叩いた。コツンと大きな音がした。そこで棒を投げつけて、家の方へ驅け出した。十間ばかりで振返ると、金太郎顏を眞赤にして追ひ驅けて來る。とつさに、道の小石を拾ひとり、金太郎に投げつけて、また家の方に驅け出した。家に五六間の處に來ると、門に兄の善太が立つてゐた。それを見ると金太郎は追ふのをやめた。何しろ、善太は五年生である。（坪田譲次「風の中の子供」）

此の文章には、文法上の主語卽ち「三平」の出てゐない文が四つある。「もう承知出來なかつた」といふのは「三平が承知出來なかつた」ことである。日本語では「三平」を必ずしも明示する必要がない。かやうな場合、セシエ（Sechehaye）は situation が主語になつてゐると言ふ。嚴密に云へば、立場に織込まれた人物が主語になつてゐるのである。かやうに主語を明示しない可能性は、他の言語例へば英語にもある。しかしそれが自由であること、範圍の廣いことは、日本語に於て特に發達した一つの特徴である。これも和辻博士の語を借れば、論理以前の心性の表現

と見ることができるであらう。

右の例は、日本語の一例として與へられたことばを見た場合である。卽ち、與へられた材料から、日本語の文體を文化史的に解釋した場合である。其處に主體となるのは日本人又は日本人の民族性である。此の場合も、種々の形に發展し來る言語一般の構造が、基礎形式として豫定されてゐるのである。さうでなければ、少くとも歷史的に親近性を持たず、互ひに文化的な交渉の無い言語を相互に比較することは、嚴正な科學的方法によつては許されない。言語一般の形式が、具體的に現れ來る相として、日本語を觀察するのである。「具體的に」と言つたが、それを具體化させるメカニズムは何であらう。地理・風土及び生活條件などが、個人的な言に於けるsituationに該當すると考へられるであらうが、それらのものは、ただ條件として認められるだけであつて、これを直ちに發展の場と考へることはできない。ハーフェルス（Havers）は、心的な機構をも一種の條件と考へ、中心になる衝動力として、或目的に向ふ努力を擧げてゐる。ハーフェルスは、外的な

言語形式にも條件の存在することを述べてゐるが、これも見樣によつて、心的・物理的な條件と考へることができるだらう。要するに、衝動力と條件のたたかふ所に、個性的な言語が發展すると解せられる。言の場に該當するのは、地理的な條件よりも歴史的環境であり、言語活動に該當するのは、發展としての歴史的事實である。

次に、言語を與へられた文法形式と考へ、それの具體的機能として言を觀察する狹い立場に立つて、文體論の實踐方法を考察して行くことにしよう。

それでもう一度前にかへるとして、與へられた文學作品のこ・と・ば・を見よう。先づ要請されるのは、其處に用ひられた言語の文法的知識である。これは必ずしも文法論のやうに體系化された認識でなくとも、文法的なものの基礎知識である。特に外國語を用ひたものを材料にする場合は、文法的知識が大切な條件となる。文法的に正しく理解されてゐなければ、文體的な徵表を正しく運び正しく解釋することはできない。卽ち、一般的なものと個性的なものの辨別が完

全に行はれないのである。文體を論じてゐるつもりで、實は文法の說明をしてゐるといふ場合が少からず生じ得るのである。正しい文法知識が豫定されてをれば文體的なるものを速かに感知し得るのである。

此處で一言注意しておきたいことは、文法といひ文體といつたのは、決して與へられた言語材料そのものの別ではないといふことである。文法は形式を、文體は機能を見る方法であるといふことは、何度繰返してもよい。決して材料そのものによつて定まる譯ではない。[三]私は西田幾多郞博士の文體として

猫も死んでしまつた

といふ例を擧げたことがある。それを或人は批評して「死んだもの」が他にもあるのだから「猫も」と言つたところで何も不思議はないではないか、さういふ語法は日本人なら同じ場合に誰でも使ふもので、これを敢て文體的といふのは當ら

ない、と言つた人がある。かういふ解釋を私は文法論的だと言ふのである。その解釋を誤つてゐると言ふのではない。ただそれでは文體論に對する批評にはならないと言ふだけだ。「も」といふ助詞はなるほど一般的な文法形式である。文體論が問題にするのは、かかる一片の助詞が、西田博士の筆にかかつて、如何なる機能を生じ、如何なる價値を表はすか、の問題である。博士の鋭敏なテニヲハの使ひ方や、博士の人間らしい一面が、此の助詞に表現されてをり、かやうな語法に博士の人格を如實に見るのは、「も」を文法の一隅から探し出して說明するのでは分らない。

'Came a silence.' や 'Arrives the milk.' の如き語順は、現代英語では珍しい例である。一番多く用ひてゐるのはウェルズ (H. G. Wells) とロレンス (D. H. Lawrence) で、殊に後者の紀行 "Sea and Sardinia" によく出る。これは普通の語順と異る點で何かしら讀者の注意を惹くものである。しかしまだ普遍的な文法形式と考へることはできないもので、機能がとりわけ活潑であり、作者の自發性 (spontaneity) を認めさせる餘地

がありそれだけこれを獨自の價値として評價することが許されてゐる。これもやがては普遍形式卽ちパウル(Paul)のいふ 'usuell' 又は 'habituell' なものに落着くかも知れないが、今のところは直ちに文體的に扱つてよささうである。(文體から文法への過程に就ては、Spitzer: *Stilstudien* I P. 158, II P. 164 及び Spitzer: *Aufsätze zur romanischen Syntax u. Stilistik*, Max Niemeyer, Halle, 1918, P. 144 を參照されたい。)

柳田國男氏が『國語の將來』(創元叢書)の中で記してゐる「感激させられる」の如き言ひ方は、やはり一種の新造語(neologism)である。形式としては元來可能なのであるが、これが具體的に用ひられるに就ては、「感激させる」主體の威力に對する一種の畏敬の念(これは時にヒューモラスにもなる)が働いてゐる。これは少くとも知識階級では機能を幾分か失ひ、次第に文法形式として扱はれ易くなりかけてゐる。(動詞の受動態の文體に關しては、Spitzer: *Stilstudien*, I P. 191 の脚註を參照されたい。)

右の二例は、比較的文體論で研究し易いといふ丈のことであつて、原則としては、材料そのものによつて此處に述べた方法が規定されると考へないことであ

る。

機能及び價値をどうしてとらへ、どうして解釋するか――これが最も大きな問題である。

ことばが口で語られ耳で聞かれる場合は、言語活動が情意の作用に支配されることが、直接に經驗できる。感嘆文や命令文や疑問文は勿論のことであるが、「これは本だ」といふやうな陳述文に於ても、純粹に論理的な觀念や判斷作用そのものが全部ではない。觀念とか判斷とかいふものは、知性の作用で分析したり組立てたりすることはできるが、それが生活の機能として見られる時は、情意の動きを見逃すことはできない。「本」といふ語は、文法的要素としては、一つの觀念を表はすものであるけれども、それが具體的に語られる場合は、直接生活に結びついた形象（イメヂ）になる。形象は如何なるものであつても觀念を骨組としそれに情意の動きのかけ合はされたものである。さうして生きた姿、直接に經驗されるものとなり、言の一要素となるのである。「これは本だ」といふのは、何かの必要に

應じ、欲求に動かされて言表される文である。その文の一要素として用ひられた「本」はすでにいはば電子を帶びた生ける要素でなければならぬ。何かの必要又は欲求は、言語活動に際して直接經驗される情意的なものであつて、これは言語活動の因子となる話者にも聽者にも直ちに感じられるものである。口で語り耳で聞くことばに於ては、アクセントの強弱や音調の高低や發音の速度や休止の狀態、一言で言つて廣い意味のリズムといふ調節作用により、直感的に感知される。文の觀念や判斷が理解されない時でも、調子とか氣分とかいふものは速かに感知し得る場合が多い。かういふ動的な作用を受けた場合、たとへ一つの觀念に相當する語といへども、冷かな知性のみの單位となることはできない。「本」はその場合に於ける「本」であり、具體的に感知される形象としての「本」である。更に言語活動の現在に於ける體制だけでなく、廣い生活の環境や背景にまで及ぶならば、情意的な色彩を持つた記憶や聯合の作用がこれに組込まれ、複雑な、しかし具體的な經驗となるのである。

右に述べたやうな口で語り耳で聞く言語活動に於ては、生活的な機能は、或は單純な生活感情、或は行動的な社會感情を主調として、直ちに感知し得るのであるが、文字に書かれ目で讀まれることば**は**、そのまま見れば、與へられたものであり、生命を持たない存在である。我々はこれを生きた言語活動として再現してみなければならぬ。如何にして再現するか、再現されたものの特性は何であるか。これを先づ明かにすることが、書かれたことばを實踐する場合の根本的な仕事である。

人が口で語る場合と文字で記す場合とでは多分に相違のあることは誰しも知つてゐる。人によつて一樣ではないが、語るままを記すといふことは稀であつて、又さうしたものは讀み辛いものである。例へば議會の速記錄を見るがよい。あれは演說のまゝに近いものであるが、文字に記されたのを見ると奇異の感じがしないわけには行かない。文字で記す場合は、成るたけ簡略に明析に整理されるのが常である。殊に文書とか文學作品とかになれば、夫々ちがひはあ

つても、(四)グールモンの言ふやうに「情感の特殊化」が行はれる筈である。誰も感じたままを書くといふことはできない。論理的な整理、又情感の洗練を經なければならない。

書かれ讀まれることばには一種の作法があるのである。書く氣構へ、讀む氣構へは、此種の言語活動を特異なものにしてゐる。我々はそれを形式的な綾や機械的な技巧として考へないで、これも自然的な、又は必然的な姿として見て行きたい。話しことばに於て、言語活動により話者と聽者の役割が分化されるやうに、文字のことばに於ては、言語活動が作者と讀者の役割を分化させるのである。此の役割は、話者と聽者に較べて、交渉が直接でなく、時空の上から云つて隔りがあり、且つ右に述べたやうに、相互に一種の氣構へがあつて特殊な姿勢を取るといふ點が異つてゐる。しかし結局これも程度の高い言語活動の因子及び構造として見たいと思ふ。

我々が文章を讀む場合は、先づ何が書いてあるかを知らうとする。即ち文章

の意味內容を知らうとする。意味內容を組立てる要素は一々の語句であるから、それら語句の一般意義、卽ち言語の要素として有する共通な意義が出發點になるわけであるが、文章の意味を理解する場合は、それらが觸發的な役目をなして、全體的な意味の構造を理解するのである。此の意味構造は、均齊や緊密の度合は一樣でないにしても、一種の論理構造(五)をなすものであつて、これが客觀的な存在として志向されるのである。それで何が書いてあるかが分るのである。全文の大意といふのは、かやうな意味構造にまで組立てられた意味の內容をいふ。例へば

花咲き鳥歌ふ

といふ文章があつたとして、花の咲くことと鳥の歌ふことが對比されてゐるとも考へられやうし、花が咲いた上に鳥が歌つてゐるといふ倂列的な敍述とも取

れやうし、花も咲き鳥も歌つてゐるといふ全體圖をひろげたものとも解せられやう。いづれにしても「花咲く」といふ部分と「鳥歌ふ」といふ部分を機械的に寄せ集めたのでない全體構造が出來上るのである。此の全體構造には、別な語を用ひて「春の景色」といふ説明を下すことができる。かやうに新しく組立てられたものをさして文の意味といふのである。かやうな意味構造を志向する場合に、一種の感情を伴ふ。出來上つた構造に對する感情であつて、對比又は併列の如き論理構造に於ては、それが形のまとまり又は完成に對する弛緩の感情であり、「春の情景」といふ意味に於ては、質的なものに對する快の感情が現れるであらう。志向される意味構造に主觀的感情が加はつて、全體印象（六）が經驗される。我々が「分つた」と思ふのは此時である。

　意味構造は客觀的なものであつて、文章の作者もこれを志向してゐるのである。但し作者が文章の完成によつて經驗する全體印象と、讀者が意味を理解する場合の全體印象とは、必ずしも一致するとは限らない。それは意味構造に對

する主觀的感情が別種のものであり得るからである。快・不快の如き生活感情は、各人各樣に經驗される具體的感情である限り、讀者が作者に對立してゐる場合は、必ずしも同一であるとは限らないであらう。「花咲き鳥歌ふ」が客觀的な事實だけをいふのでないとすれば、我々は作者が此の表現によつて何を經驗してゐるかを直接に知らなければならぬ。知・る・といふ語を用ひたが、これが知的に知るといふ意味ならば、作者の生活態度や環境や教養などを調べることによつて、或程度まで知り得るであらう。しかし單なる論理的事實をいふに止まらない文章に於ては、かやうな知り方は不完全である。進んで情的に感・じ・なければならない。生活を知つても之を感ずることにはならない。感ずるには、感情移入や追感などの方法では、到底機械的なのを免れない。作者と共に感じなければならない。

此處まで來て、やつと言語活動といふ最も大事な機能に到達する。言語活動に於ては、もはや讀者は出來上つた文章を受動的に受取り、之を異つた立場から

解釋するといふが如き過程を辿らないのである。文章は與へられたものであることを止めて、與へ與へられる活動又は機能となる。此際に最も敏感に經驗されるものは、何がといふことだけでなく、如何にといふことである。何を經驗し何を表現するかよりも、如何に經驗し如何に表現するかが直感されるのである。何がといふ問はまだ客觀的なるを免れない。如何にといふことが明かになつて、始めて具象的な經驗となるのである。

(七)シュピッツェル（Spitzer）は、作品を反覆精讀することによつて、作者の意味聯關に沒入することを說いてゐる。これは言語活動を再構成する一つの方法である。二度三度讀むうちに、讀み方が變つてくる。始めは客觀的な意味構造を組立てることに沒頭するとしても、二度目は同じ意味構造を組立てる作者と略歩調を合はせることができる。讀み方が動的になり發展的になつて來たのである。三度目には、作者が如何に感じ如何に表現しようとするかの衝動又は意圖を知るやうになる。此處まで來れば、情意的な機能——譬へて云へば息づかひに接

することができる。グールモン(八)が「生理的問題」と言つた文體は此處に現れるのである。

客觀的な意味を知るのは、眞理を求めることに外ならない。主觀的な情意機能には衝動又は意圖がある。それは生活の必要や欲求に應ずる働きであり、生の目的をめざす活動である。快・不快をはじめとし、嬉しさ悲しさなどの感情は、生活目的を標準とした一種の價値判斷と見倣されるだらう。文體論でいへば、バイイの方法がこれを根柢にしてゐる。

しかし我々の生活は、かうした心理的な生活だけではない。もつと高い理念を求める生活がある。快・不快を心理的な價値とすれば、例へば善・惡は倫理的な價値である。言語活動に於て我々の求める究極の價値は美的な價値である。卽ち言語活動によつて分化されるものを、單に人間としての話者及び聽者としないで、人格としての役割に高めるのである。又其處に現れるものを、單なる心理的機能としないで、價値の創造とするのである。個人に於て創造される絕對

價値を求めるのである。既成の標準によらないで、個人に即して直觀される絶對價値が中心になるのである。過程としてのhowでなく、必然としてのwhyを求めるのである。文體論で此の方法を說いたのがフォスレルである。

心理的な感情や衝動は、いはば形なくまとまりのない水や油の如きものである。之をクローチェの言ふ如く、直覺に高め表現に形作ることは、或る客觀的な又恒常的な價値に結晶化させることである。我々はこの表現過程に參與することによつて本當の讀者たる資格を得るのである。又かやうな讀者をぬきにしては作家の表現は本當の意味で行はれない。我々は作者になつてみる必要はないのであつて、本當の讀者になりさへすればよい。我々は客觀的に味はふ立場を固めさへすればよいのである。'give'と'take'とは表現作用に於て互ひに聯關したものである。

本當の讀者になるためには、單に讀みを繰返すだけでは十分ではない。讀みを深くしなければならない。質的に讀み方を變へなければならない。一言で

言へば、現象學でいふ本質直觀の方法による。(九) 單に與へられた存在を理解するのでなく、充實した意味統一に自身を深化させる方法である。これを前に引用した坪田讓次の『風の中の子供』の一節(五一頁)によつて說明しよう。

「バカッ」

もう承知出來なかつた。三平は棒を拾ふと、金太郎の頭を叩いた。コツンと大きな音がした。そこで棒を投げつけて、家の方へ驅け出した。十間ばかりで振返ると、金太郎顏を眞赤にして追ひ驅けて來る。とつさに、道の小石を拾ひとり、金太郎に投げつけて、また家の方に驅け出した。家に五六間の處に來ると、門に兄の善太が立つてゐた。それを見ると金太郎は追ふのをやめた。何しろ、善太は五年生である。

「もう承知出來なかつた」は「もう承知出來ない」の一種の間接話法、卽ち體驗話法(erlebte Rede)である。三平の話法を作者が間接に取次いだものであるが、それに

は直接話法に含まれる感動的な調子が殘つてゐる。「金太郎顔を眞赤にして」は、もう一つ强くすると「金太郎奴・顏を眞赤にして」ともなる。これにも三平の氣持が生きてゐる。「何しろ、善太は五年生である」は、金太郎の立場を作者が取次いだもので、「何しろ」は元來金太郎の氣持を表はす語である。バイイに從ふと、右の語法に見られる「もう」や「金太郎」や「何しろ」は、情的表現の例と考へられる。バイイはかやうな情的表現を體系化しようとしたのであるが、我々は此の具體例に卽してその情的機能を明かにすればよい。右の例で、作者が作中の人物の立場に立ち、その氣持をそのまま讀者に傳へる手法を用ひてゐる。かやうな態度を中心にして見ると、上述の表現に作者特有の價値を認めることができる。その價値が如何なものであるかを確めるために、同じ作品から別な一節を取つてみよう。

木の葉のゆれるのを見ると、美代子は大げさな驚き方をした。

「まあ、三平チャン、どうしませう？　私、お母さんに叱られるわ。ね、お願ひだから下りて

來てね。」

泣かんばかりの頼みである。これも二度三度ときかなくなつた。三平が木に登り始めると、直ぐ美代子が來て、木をゆすり出すのである。

「ホーラ、ホーラ、落ちろ、落ちろ。」

そのうち、山の池の側に出たのである。谷間の一方に高い堤があつて、三方は山の斜面で、高い木が茂つてゐた。水にはその木々が映り、蒼蒼と深く、物凄さに三平もゐばることを忘れた。

「どう？　三平チヤン、あんたん處の方にはこんな池ないでせう？」

「ウン」

うなづかずにはをれない。

「恐い？」

全く恐い。水まで二、三間もあるだらうか。一匹の龜が四足を伸ばして浮いてゐる。頭をもたげてノンキな有樣である。

「私、この池で泳いだことあつたわ。彼方までは行けないけど、半分どこまで泳げたわ。

「三平チャン、泳げる？　泳げないんでせう。」

三平は默つてゐた。默つてゐるより他なかつた。

「泣かんばかりの頼みである」はその上に「何しろ」を補ふこともできる。これも唯の判斷ではない。「泣かんばかりの頼みなのだからね」と言ふこともできるが、さうしないのは作者の作法であつて、氣持は同じことである。判斷に訴へるよりは感情に訴へる。これも子供の立場から見たものであるが、其處には作者の大人としての同情がこもつてゐる。「木をゆすり出すのである」も「何しろ」を補つてみられる。やはり三平の氣持を作者が間接に取次いでゐる。その氣持とは、「木をゆすり出してこまる」といふ氣持なのである。「うなづかずにはをれない」や「全く恐い」や「默つてゐるより他なかつた」も、作者が三平の側に立つて述べたもので、感情をいたはつた言ひ方であるが、子供の氣持そのものを傳へたのではない。子供の生活をいとほしむ作者の氣持が現れてゐる。

右のやうな語法に價値を見出すとすれば、それは何故であるか、その價値とは何をいふのであるか、又その解釋に對する批判は如何にしてなされるか。作中の人物の話法を體驗話法として傳へる仕方に特色があることは、さうでない普通の表現に較べて、直ぐと認められることであらう。これが作品全體にあふれてゐる作者の人生觀に深く結びついてゐるところに、獨得な價値を見出し得る。卽ち作者の意味統一に於て見られた場合に、此の語法が特殊な價値を持つのである。その價値とは、言語表現に於て表はされる作者の態度であり、人格といふ中心點に於て創造される特異な世界觀である。これを價値と名付けるのは、作者の人格を規定する契機になるからである。唯かくかくの感じがする、といふのでは印象批評であり、各人各樣の主觀的解釋になり、何等の客觀性も持たない獨斷に陷るであらう。單なる感じや印象でなく、それを作者の意味聯關に於て理解するところに、とらへられた徵表が價値にまで高められるのである。そして作者の人格や意味聯關が既知の概念として押しつけられ、それに照らして一

々の徴表を吟味するのではない。表現に於て、又表現の奥に、かやうな本質的なものを直觀するのである。かくして直觀したもの、及びそれに卽しての價値の解釋を批判するには、別な標準、例へば作者の傳記や作品のテーマ又は內容そのものや文學批評家の判斷による必要はない。かやうな資料も參考にはなるけれども、それだけで批評の標準になるわけではない。むしろ我々の直觀が正しいかどうかを標準としなければならない。

上に引用した例でいへば、我々が普通「もう承知出來ない」と言ふ場合、其處に興奮の感情が現れることを知つてゐる。同じ語法を用ひて作者は「もう承知出來なかつた」と表現する。意味內容の上から「承知出來ない」者が作中人物の三平であることも自明の理である。唯「出來なかつた」と客觀的に述べてゐる點に、作者自身の表現が見られるわけである。此の表現には、主觀的感情と客觀的記述のかけ合はされたところに、特異な價値を生じてゐる。それは人物の側に立ちながら、作者としての判斷を下す點である。これと似た例「何しろ、善太は五年生で

ある」や「默つてゐるより他なかつた」などと比較してみると、子供の正直な論理をいとほしむ大人の感情の現れてゐることが知られるであらう。同種の例は他にもあつて、それらが累加されるごとに、かかる價値を明確にとらへることができるだけでなく、價値の內容そのものが單に一時的な氣持の動きに止まらない深い意味を持つてゐることを感ずるのである。又異種の例を見ると「そこで棒を投げつけて、家の方へ驅け出した」、「そのうち、山の池の側に出たのである」、「默つてゐるより他なかつた」の如き主語を明示しない文に於て、中心人物が注意の焦點を占め、場面に躍如と動いてゐることを示してゐるが、其處に窺はれる作者の興味は、「金太郎顏を眞赤にして追ひ驅けて來る」や「一匹の龜が四足を伸ばして浮いてゐる」の如き、人物卽ち三平の凝視した光景を直感的に描寫する直敍語法及び「直ぐ美代子が來て、木をゆすり出すのである」、その他同じ作品にある「もう泣けさうになつて來たのである」の如き「どうにも仕方がない」といふ困り果てながら諦める詠嘆的な語法などからも、略〻中心點が明かになるのであつて、子供を凝

視め、子供の生活を愛する作者の態度が、強い客觀性を以て現れてゐる。その上、論理的な關係を明示する接續詞の類を用ひることが少く、前後の脈絡を說明することの稀な表現は、全體としてのまとまりよりも、部分的な場面や行動を印象的に描寫する力があり、全文のリズムは悠然たる流れではなく、素朴で活潑なテンポを示してゐる。かやうな調子は大成し圓熟した靜觀の產物ではない。もつと若々しい、或は幼い調子である。しかしそれは子供そのままの文章ではない。「もう承知出來なかつた」や「うなづかずにはをれない」や「默つてゐるより他なかつた」は、大人としての客觀的な判斷を示してゐる。それで、これらの表現に見られる價値を、子供を中心とし、子供に興味を集中し、子供を愛する大人の感情として認めるのである。

かやうに價値を認めるのも、直觀作用によるからであつて、價値らしきものは、始めから志向されるのである。類例を重ね、又異例とも比較するのは、志向されたものが何であるかを明確にし、之に客觀性を持たせるためである。表現作用

の再構成が完全であれば、それだけ價値を明確に知ることができるのである。

以上述べたところで明かであると思ふが、價値の本質は、語法の形式だけでも意味の內容だけでもない。意味內容が形式づけられ、それが作者の本質と結びつく時に、かやうな語法は價値があるといひ、その價値の內容は作者の本質をいふのである。

價値の內容を說明することが、かやうな方法による文體論の結論となるのであるが、かかる說明は如何なる立場からすべきであるか。これが此處で述べるべき最後の問題である。坪田氏の作品によつて、價値の內容を「大人の子供に對する愛」とするならば、これは一種の人生觀、一種のパトス、又は現實批判とも理想追求とも見做されるだらう。此處に用ひた語の意味を一定の標準まで客觀化し理念化すれば、それは[一〇]類型學的な概念となる。かやうな概念の型式で統一した記述をすれば、それに高められる價値は相對的な價値になる。例へば、パトスといへばそれはロゴスと對照された價値になるのである。ドイツの學風は、[一一]文

藝學で見られる通り、類型學的なところに特色があるが、フォスレルはさうではない。彼の求めるものは絶對的な價値である。絶對的な價値は、低い位では「かういふ感じがする」といふ印象であり、それが客觀化されてくると具體的な徵表の特質を明かにすることになり、高い位に達すれば理念的な概念になるか人格像そのものを作ることになる。これに相當するものを坪田氏の作品に求めるとすれば、一種の哀感的な感情が底流をなし、子供の世界への憧憬となつて發展し最後に人間愛又はその具現としての人格像に完成した姿を見出すといふことになるであらう。

右は記述を假に完全な方法に理想化しての話であつて、實際は中々さう簡單には行かないのである。[一]ドラクロア（Delacroix）は思想の自發性と言語の自律性との間に隔りがあり、爭ひがあつて、其處から文體が生れると述べてゐるが、かかる隔りを埋め爭ひに打克つところに表現といふ形成作用の苦心が存するのである。表現作用の再構成といふことは、實際に於てかかる苦心に接することに外

ならないであらう。更に欲求と素質の爭、理想と現實の因果的な葛藤を見出すであらう。私共は其處に人間の苦惱の姿を見せられるのである。シュピッツェルは、宗教詩人ペギ (Péguy) の文體を研究し、彼がベルグソンを崇拜し「生の流れ」の哲學を自分の表現に創造しようと欲しながら、結果に於ては「言語の自律性」に支配され、欲求と氣質との爭に終始した結果、およそベルグソンとは遠い主知的な文體を作り出したことを記してゐる。シュピッツェルの結語を引用しよう。それは現實的な人間の姿を述べながら、しかも觀念的な人間像を示して呉れるものだ。

吾人はペギの文體に於て彼の精神習性の必然的な作用、卽ち二つの精神方向の悲劇的な爭鬪を學んだ。ペギに於て鬪つてゐるのは、世俗的な靈感と學者的な靈感、彼の素朴な神祕感と彼に征服された主知精神、生への彼の意志、生命化現實化への彼の意志と眞理への努力、識別と抽象、彼の詩人的氣質と論爭的氣質である。(*Stilstudien*, II P. 360. Cf. Ibid., PP. 341, 345.)

一、和辻哲郎、續日本精神史研究（岩波書店、一九三五）、三九二頁

二、Havers: *Handbuch der erklärenden Syntax*, Carl Winter, Heidelberg, 1931.

三、山本忠雄、文體論研究（三省堂、一九三三）

四、Gourmont: *Le problème du style*, Mercure de France, Paris, quinsième édition, 1924, P. 41 ff.

五、Hönigswald: *Die Grundlagen der Denkpsychologie*, Teubner, Leipzig, zweite Auflage 1925, PP. 57—58.

六、Gomperz: *Weltanschauungslehre*, zweiter Band, erste Hälfte, Eugen Diederichs, Jena, 1908, P. 220 ff.

七、Spitzer: *Stilstudien*, 2 vols., Max Hueber, München, 1928.

八、Gourmont: *Le problème du style*, Préface, P. 9.

九、Reyer: *Einführung in die Phänomenologie*, Felix Meiner, Leipzig, 1926, P. 136 ff.

一〇、岡崎義惠、日本文藝の樣式（岩波書店、一九三九）

一一、Schneider: *Ausdruckswerte der deutschen Sprache*, Teubner, Leipzig, 1931.

一二、Delacroix: *Le langage et la pensée*, Félix Alcan, Paris, deuxième édition 1930, P. 414.

第二部　文體論の問題

一　知的表現と情的表現

1　機能としての表現

表現は機能として見れば一般に情的である。「ラヂオ體操だよ」といふ聲を聞いて急いで起床する場合を考へてみよう。此の表現の論理的な意味は、ラヂオ體操が今から始まるといふ事であるが、これを聞いた者が起床して始めてその意味が完了し効果を生ずるのである。アメリカの行動論者(behaviorist)は、その場合「起床」なる行動が右の表現の意味であると言ふ。此説の可否は別として、言語形式は知的であつても、表現を機能としてみれば、これを促す根柢として情意の動力を認むべきことは、既に述べた(三五頁―二六頁)通りである。

表現を知的な形式に體系づけるのが文法論の仕事である。その意味から云つて、バイイが情的表現を言語の中より求めこれを體系化したのは、彼が言ふ通り「文體論」と稱すべきものではなく、既にセシエ[一](Sechehaye)が指摘した如く「文法論」の擴充に過ぎないものである。バイイがフランス語の類義語を感情價値に從つて「識別」[二]したのは、感情表現の可能性を段階づけたものであつて、生活に具現した實相ではなかつた。彼は此點で方法と問題を混同してゐたのである。

バイイは知的表現と情的表現とを區別し、とりわけ情的表現を「文體論」の問題とした。しかし彼も生活機能として考へれば知的表現も結局情的な性質を免れ得ないことは知つてゐた。その點を徹底させると、知的表現と情的表現の別は、質的な別でなく量的な別になり了るであらう。我々の態度が科學的であるだけさういふ結果になるのであるが、尚生活心理に於ては、バイイの分けた通り、知的表現と情的表現を質的に異るものとして受取つてよいと思ふ。そして兩表現を對當に文體論、又はその基礎となる機能論の問題としてよいと思ふ。

方法は明確に文法論と區別することが大切で、同じ問題でも形式として見ず機能として見る立場を守るのである。さうした場合、知的表現は機能性(バイイの言ふ「表現性」(三)に該當する)の negative なもの、情的表現は機能性の positive なものとして區別するのである。順序としては、positive な方、即ち情的表現から始めるのが妥當であらう。

2　情的表現の構造

情的表現は先づ「聲の表情」に現れる。ヴントは心的過程には外部表現が伴ふと考へ、言語活動をかかる表現運動の一種と見做した。此說によれば、呼吸の調節、聲帶の運動及び口腔器官の運動は、心的過程の隨伴現象である。その點に於て、言語活動も顏面表情と同じ表現運動である。ヴントの表現說は此處にいふ

情的表現に最もよく適用されると思ふ。

「聲の表情」とは、發音器官に直接表現される感情機能であつて、聲の抑揚や調子、アクセントにリズムなどを含むものである。それらが言語の要素又は形式として觀念的な記號になつてゐるものを除き、直接機能性の認知される直感的な表出となるものを聲の表情と稱するのである。

「バカッ」と罵る時の急激な聲門閉止「シマッタ」と叫ぶ時の急調なアクセント、「マコトニ殘念」と述べる際の緩調な抑揚など、聲の表情は話し言葉の生きた樣相で、日々我々の觀察し得るものであるが、それを技巧化したものが、講談・落語・漫才などの寄席藝術や講演・說教・スピーチなどに使用される雄辯術の一種になつてゐる。

聲の表情に現れる構造は、どの言語にも共通なものが多い。例へば音韻を延ばすのと、重ねるのがある。中國地方でよくコーマイ（こまい、小さい）と發音するのを聞くが、元は母音を長くした情的表現であつたのだらう。ヤハリをヤッパリといふのも、その例であつて、ヤハリのハは元〔Ξ〕の子音を持つてゐたもので、その

情的表現の形がヤッパリに見られる[三]の延長なのではあるまいか。サッパリなども同種の語であると思ふが、元の形は何であらう。アハレの情的表現がアッパレであるが、今では意義が變化してゐる。印歐語にも子音を延ばす情的表現の仕方がある。[四]ブルクマン(Brugmann)が'Konsonantengemination'(子音重加)と呼んでゐる現象にその例がある。例へば、ギリシャ語のgýnnis(女々しい男)、ラテン語のcuppes(食道樂)の如くである。母音を延長した例に英語のleetle (little)がある。これはN. E. D. (*New English Dictionary*) に「躊躇したり愼重に強めて發音する形を滑稽に眞似たもの」と說明してある。音節を重加する例には、[五]フランス語で惡者をいふ時のNénesse (Ernest), Lébert (Albert) の如き名前がある。韻をふむのは、強く感覺表象に訴へる情的表現の例であつて、俗語に多い。例へばメチャクチャ、ドタバタなどで象徴音を用ひる。英語にはtopsy-turvy (テベコベ)、hodge-podge (ゴクマゼ)、helter-skelter (アハテフタメキ) など例が多い。とりわけ女子は此種の表現を好むもので、大阪の方言でホッチッチ(放つておいて呉れ)といふのはその一種である。

機能性の活潑なほど、言語要素としては不安定である。例へば卑語の類が辭書に登録される頃には、卑語としての生きた機能を失つてゐる場合が多いやうに、情的表現も辭書に載るやうになれば、表現性を幾分なりとも喪失してゐることが多い。さうでなければ、辭書の與へる定義そのものが不安定であつて定義らしくないものである。例へば『言海』によると「ヤッパリ」は「ヤハリ」の音便訛であり、'leetle' の說明は既述の N. E. D. のやうに不安定である。

意味上から情的表現を求めると、その表現性は感情價値に依るものである。例へば「大きい」と「ドエライ」、「辛辣な」と「エゲツナイ」などを比較すると、後の俗語が情的表現になるのであつて、それは特別に訴へる感情價値を持つてゐるからである。俗語や方言はよくさういふ理由で普通語の中に採用される。「立派な」と「素晴らしい」を比較しても、後者の方が感情價値を多分に持つてゐて、情的表現になる可能性が多いのである。英語で情的な要素のよく現れるのは、old, poor, little などの形容詞で、I am so pleased to see you, *old* fellow. や *Poor* Mr. Hauchecorne! he could scarcely speak

や Good morning, *little* Robin. などその例であつて、多くは呼び掛けに用ひる。 Old は親密の情を表はし、poor は「可哀さうに」といふ憐愍の情を表はし、little は可愛い者を呼ぶ時に用ひる。 日本語では「お利口さん」の如く接頭辭や接尾辭を附けて情的表現にする。 Charles を Charlie, bird を birdie と呼ぶのも親愛の情を表はす例である。接尾辭によるものでは、manly (男らしい) は良い意味で、mannish (男みたいな) は悪い意味に用ひる。 卽ち感情價値が異るのである。 此種の接尾辭はイタリー語に發達してゐて、dottore (醫者) から dottoracio (藪醫者)、cane (犬) から cagnolino (犬ころ) といふ語が作られる。 英國の詩人スペンサー (Spenser) は、此の語形を眞似て braggadocio (大法螺) といふ語を造つた。

但し、形容詞でも立場によつて情的要素を表はすことは言ふまでもない。 例へば、ウォードハウス (Wodehouse) の「流行小說」(*Best Seller*) と題する小說に、女流作家の書くものにウンザリした雜誌記者が、偶々見つけた戀人に自作の小說を讀んで聞かされて、苦しい相手をする場面がある。

"Great!" he croaked.（「立派です」と彼は悲鳴をあげた）

Her eyes were shining.（彼女の眼は輝いてゐた）

"Do you really think so?"（「ほんとにさうお思ひになつて」）

"Fine!"（「美事です」）

此處に用ひた great や fine は勿論そのままの意味で言つてゐるのではない。苦々しく嚙んで吐き出すやうに言つたのである。皮肉や反語は此種の語である。

Here is a *nice* mess.（困つたことになつた）

You're a *nice* fellow, I must say!（ほんとに君はひどい男だ）

の nice の如きはその例である。

シェークスピアのジュリアス・シーザー劇に、アントニーがローマの群衆に向つて演説する有名な箇所がある。彼は「ブルータスが公明正大な人である」ことを繰返して述べる。繰返しは感情論理に訴へる一種の修辭法で、その效果はローマの市民を蹶起させるに役立つてゐる。かういふ方法は、どの言語と限らず、一般に情的表現の一方法なのである。その他、漸層法とか、反語法とか、強意法とか、すべて修辭學で教へてゐる表現法は、あらゆる言語に共通な情的表現法と稱してよい。次の上田廣『建設戰記』の一節なども、さういふ方法を用ひた情的表現である。

　私はその波のやうな兵隊の萬歳の中に臨汾の司令所へ報告するやうに、と電話手に吩附けた水間部隊長の聲を聞いた。笑つてはゐないが、笑つてゐない部隊長の笑顏を私は見たやうな氣がする。私はそして灼けるやうなものを自分の目頭に感じた。私はふと、自分の姿を見る。まだ濡れたまゝである。兵隊の姿を見る。まだ濡れたまゝである。

部隊長の姿を見る。まだ濡れたまゝであつた。

Indeed, really, surely など文修飾の副詞は屢〻情的表現となる。Indeed は C. O. D. (*Concise Oxford Dictionary*) にも「皮肉、輕蔑、不信」を表はすことがあると定義してあるが、他の副詞にもさうした可能性はある。その例は劇の對話などを見るとよく出てくる。「皮肉、輕蔑、不信」は主觀的な態度であつて、意義の中核はやはり「實に」なのである。此の意義を主觀的に色付けするのであつて、その結果情的な機能を生むのである。日本語の「實に」も、意義の中核そのものは變らないで「君は實に偉いよ」が反對の意味を寓し得るのである。これも機能そのものを觀察しなければ、生きた意味は分らない。「彼は確かに成功するよ」を英語に譯す場合に、He is sure to succeed. とすれば誤解の虞はないが、He will *surely* succeed. とすれば、往々情的な要素が勝ち過ぎて、普通の文章としては避けた方がよい。同じ意味内容の語でも、副詞になると主觀的態度が混じ易いのである。

日本語には、女の言語として、一種別な形式が、あるが、英語もそれほどではないが、獨得な用法がある。[六]イェスペルセン (Jespersen) は、女子の好んで用ひる語法として、pretty, nice などの形容詞の他に、特に强意の副詞を擧げてゐる。例へば *terribly nice* (トテモいゝ) *awfully* pretty (トテモ美しい) の如くである。It's *so* kind of you. (マア御親切に) のやうな言ひ方も女子に多いと言はれる。フランス語でも *rudement* joli (トテモ綺麗な)、*affreusement* délicieux (マア樂しい) などその例であるが、此點では英語以上に感情的であり女性的である。支那の[七]林語堂は、英語は支那語の簡潔なのに及ばないとして、英語を男性的だと言ふ[八]イェスペルセンの説を疑つてゐるが、此説の可否はさておき、女子が男子に較べて饒舌なのは事實である。女子は感情の方が發達してゐるから、情的な生活の全機能を表現することが多い。その點でむしろ素直な表現者と稱してよいだらう。情的であるから、上述の副詞の如く、意味を强める語や、新しくて印象的な語を選んだり造つたりする。强意の副詞は元の意味を失つてゐるものが多いが、かういふ意味變化の原因になつたのは女子の表現性

によることが大であらう。パパ、ママの如き家庭語、ワンワン、トトの如き子供の語なども女性によつて廣められるのではないか。英語の pussy (猫)、polly (鸚鵡) などの愛撫語も同樣だと思ふ。

情的表現は、文の構造として、分析が不完全な、ベルグソンの語を用ひると、global なのが特徴である。その代表的なものは感嘆文である。とりわけ間投詞は、感情を感情として表現する語であるから、これを用ひた文は主客未分の構造を示す。「生の流れ」を直寫した文字にそれが現れる。菊池寛の『敵討以上』で、大願成就した日の了海は次のやうに歡喜の感情を表現してゐる。

あな嬉しや。天上界へ生き乍ら、昇る心持がする。眼も耳も衰へて、川の流も聞えねど、ほの明りは見えまするぞ。あな嬉しや。嬉しや。嬉しや嬉しや。心の中が、煮えくり返るやうに嬉しい。

情的表現は、瞬間的な生命を表はし、分析的な構造を持たないで、或は花火の如く光彩を放ち、或は星雲の如く押しひろがる。 それだけに實感が强く印象が著しい。 情的表現は言語活動に於ける詩である。 我々の生活に於けるパトスは、かういふ情的表現が表はすのである。 その適例は、モーム (Maugham) の *Our Betters* といふ風な劇に見ることができる。 その中から、ベッシーといふ女性の情的表現を拾ふと、Really, Pole! (さうよ、ポール!)、Well? (それで?)、Fancy that! (まあ本當に)、Why not? (どうしていけないの)、Oh, what nonsense! (マァ呆迦々々しい) のやうな斷片的な表現が多い。

3　情的表現の作品に現れた實例

一　金田一京助、『採訪隨筆』

大正四年樺太へ二度目の研究旅行をした時に、山邊君のゐる落帆村は八年振、よつぽど

寄りたかつたが、少しでもまだ見ない方面を調べたいので、よそながらたゞ噂を聞いて通り過ぎた。その噂が又ステキで、行く所行く所、落帆村を羨んで山邊君の村人に俺も成りたい、俺も成りたいといふ聲だつた。もうすつかり嬉しくなつて、さうだらう、さすがだ、さうだらうさすがだ、とうなづきながら、もう逢はなくても、逢つたやうに滿足して歸つたものでした。

「よつぽど」は「餘程」の情的表現、「ステキ」は「立派」の情的表現、「もうすつかり」は强意の副詞、そのほか「行く所行く所」の如き反覆法が三回使用されてゐる。「落帆村は八年振」といふ止め方及び「俺も成りたい、俺も成りたいといふ聲だつた」は直接話法を混へた文も、歡喜の體驗を記錄するに役立つてゐる。

二　小川正子、『小島の春』

それから、數日の後、もう故障も直つてゐた車は夜の十時過ぎ、〇〇川の溪谷の橋畔に雨

の降る夜をひそかに土藏座敷を脫がれ出づる女の人を待つてゐた。眞夜中を驅け通して來た人の收容が無事に濟んだ頃に、島にも亦この女の人の上にもほのぼのと明かるい夜が明けかけてゐた。對岸まで送つて來ながら人目に立たぬ樣にと、私に手紙をかきのこして急いで歸つてしまつたお父さんの心は悲しい。

文語的な詠嘆法が此の作者の情的表現である。これを「……お父さんの心が悲しかつた」と改めると知的表現になるであらう。「心は」は英語でいへば呼格法に相當する語法であり、「悲しい」は感嘆文に相當する表現法である。主觀的な詠歎がそのまま文章の中に入つてゐる例である。

三　林芙美子、「放浪記」

女給入用のビラの出てゐさうなカフェーを次から次へ野良犬のやうに尋ねて、只食ふ爲めに、何よりもかによりも、私の胃の腑は何か固形物を欲しがつてゐるのだ。あゝどんな

にしても私は食はなければならない。街中が味しさうな食物で埋つてゐるではないか！

「野良犬のやうに」「胃の腑」「固形物」「埋つてゐる」は何れも誇張法で、情的表現の一種である。「何よりもかによりも」と「あゝどんなにしても」は强意の副詞で、「欲しがつてゐるのだ」「食はなければならない」「埋つてゐるではないか」は積極的な斷言又は說得を表はす意欲の修辭法である。

四　岡本かの子、『鶴は病みき』

私はむつとして傍を向いた。何故私が扇ケ谷の道路で觀た馬上の女性を麻川氏の前で美人と云つたのは悪いか。そのくせ麻川氏自身は殆ど絶えず色々な女性の美醜を評價し續けて居ると云つても好いくらゐだのに何故私がたまたま扇ケ谷の馬上美人を氏の前で褒めては悪いのか。事實としては白日の下で近來あれ程高貴で美麗な顏立ちを

見たことが無いのだ。

これも意欲の修辭法であつて、反問の形式を反覆して執拗な感情を表現してゐる。主情的な詠嘆法にならない所に特色がある。言ふだけのことは言ひ盡す強い修辭法である。

五　石坂洋次郎、『若い人』

あの子は肉體も精神も美しい。けれ共それは滅びる者の美しさ、崩れる者の華やかさだ。自分は晴朗快活にあの子の美しさの總てを認めてやれる。だが何といふ、はかなさ、もろさ、暗さであらう。そして其へうじやけた關心を持つ間崎の卑屈醜陋なプチブル性に至つては、あの人自身が江波恵子と逢つて、物を考へる多少の餘裕を存し居るだけに、憎みてもなほ餘あるものだ。

「何といふ、はかなさ……であらう」は西洋流の詠嘆法で、「憎みてもなほ餘ある」は東洋流の罵詈法である。「うじやけた」は俗語、「卑屈醜陋なプチブル性」は知識階級の語である。全體は激しい感情で貫かれたものでありながら「あな嬉しや、嬉しや」といふ風な分析不完全な間投詞ではない。分析があり論理のあるのが此處に擧げた情的表現の特色である。

作品に現れた情的表現は、文字及び文字で表はされる言語形式の制約を受けることと、相當の分析を施して主客の別を明かにしなければならぬ必要のあることに注意を要する。その結果、情的表現といつても、生のままの感情を反射的に表出するのとは趣がちがふし、聲の表情が自然と現れるのでもない。表現への形成があり洗練がある。かやうな形式や洗練の過程の間に、作家の個性が出てくることは、右に擧げた例からも窺はれることであらう。例へば小川正子の感情は岡本かの子の感情とは同じでない。此點は個人文體を研究する上に肝要なことである。なほ此事は章を新たにして述べることとし、此處では、情的表

現の一般的な特徴に注意するだけでよいと思ふ。

4 知的表現

知的表現は、特殊な場合、例へば概念で論理的に物を考へてゐるやうな場合に現れる。科學者が科學の法則を考へるとか、哲學者が哲學するとかいふ場合がその適例である。しかし之も廣く生活の機能と解するならば、一種の感情に支配されてゐることは否めないと思ふ。[九]ゴンペルツ(Gomperz)は、前置詞や接續詞で表はせるやうな論理的な意味にも、一種の形式感情が働いてゐることを述べてゐるが、さういふ風に解すれば、知的表現と雖、感情の支配を脱することはできない。ただその感情がリファインされた特殊な感情である點が異るのみである。さういふ點に、機能性のnegativeな特徴が現れる。知的感情——之が形容矛盾で

ないならば――の働いてゐるものを知的表現と稱する。之が通俗の意味でいふ情的なものと區別されるので、此處で情的表現に對する知的表現を擧げるのである。

一　林髞、『思想と生理』

既に、神經系統に於ける反射なる概念は、神經的相關作用と呼んでよいであらうことは、内分泌を化學的相關作用と呼ぶと共に定まる。然し、この神經的相關作用が、單に反射又は神經を介して、或る臟器が、自分から遠隔してゐる臟器に對して及ぼす作用を意味するに止まらず、別に重要なる意味のあることは、原型としては、一九〇九年のシエリントンの研究に依つて示された。シエリントンは、犬の延髓と脊髓との間を切斷し、所謂脊髓犬を作つた。この脊髓犬の背部、鞍形の皮膚の部分に刺戟をあたへると、同側の後肢が周期的に屈伸して、刺戟の與へられた皮膚の部分を搔く現象の起るのを見た。脊髓と延髓の間が切斷せられてゐるから、刺戟は大腦へはゆかない。從つて感覺はない筈なのに、斯くの如き恰も背部の痛痒を搔く運動が現はれて來るので、シエリントンはこれを搔痒反射と

名付けたのである。

此の文章の意味は次の如く圖示することができる。

反射——神經的相關作用＼（單なる）反射作用
（内分泌——化學的相關作用）／搔痒反射
｜
シェリントンの犬の實驗

此の圖式は、意味の論理構造であつて、意味の中心點は「搔痒反射」であり、その內實がシェリントンの犬の實驗となつてゐる。各語の概念は明確な科學的內包を有し、感情價値は無色である。此の文章を理解する我々の思考作用は、論理構造を基礎として「搔痒反射」なる中心點に向ひながら、最も興味を唆られるのは、シェリントンの犬の實驗に關する記事である。「シェリントンの研究に依つて示さ

れた」までは、形式論理の命題として整然たる構造を見せてゐる。ところが「シェリントンは、犬の脡髓と脊髓との間を切斷し……」からは、具體的な實驗を語つてゐるので、構造に亂れが生じ、思考作用の進行が複雜な文樣を示してゐる。

脊髓と延髓の間が切斷せられてゐるから、刺戟は大腦へゆかない。從つて感覺はない筈なのに、斯くの如き恰も背部の痛痒を搔く運動が現はれて來るので、シェリントンはこれを搔痒反射と名付けたのである。

の部分は、論理的な形式感情が、事實の體驗に對する感情によつて、複雜な波紋を畫いてゐる。此事は、全文の論理構造が整然としてゐるだけに、注意を惹くものであつて、讀者も著者と共に、息を凝らして實驗の記事に見入るのである。

二　出隆、『哲學以前』

意識するといふは、分裂を再び統一する事である。純粹感覺の形に於て雜然と分裂散布したものを純なる統一的思惟が再びまとめて一つの姿――對象界――とするのである。簡單に言へば統一的或者（其儘の事實＝眞實在）が自己を思惟の形で表現することである。或は、この純粹な或者が自覺する事である。併しこの或者は無限に豐富な内容を有するからして、その自覺は無限であり他方面的である。即ち彼は自らを無限に分裂し乍ら之を更に種々の方向に統一してゆく。斯くして或る分裂は或る方面に、他の分裂は他の方向に、併し又或る分裂はその來し方に向つて再歸的に、各々夫々再統一の足を謂はば前後左右に種々の形で延ばしてゆく。現實の意識生活はこゝに種々の意識界（意識された精神現象界）や自然界（意識された客觀界）を構成しつゝ無限の豐かさを得てゆく。科學的哲學的などいふ所謂知的學的の世界や知識も斯かる再統一の所產であつて、何れもこの統一の基礎には純粹思惟ともいふべき先驗的――意識或は經驗を生ぜしめ乍ら自らは意識されず經驗されない純粹經驗的――なる或者を有する。

右の一文は認識論の解說である。意識は分裂の統一であることを述べたのが

全文の意味であり、各語は哲學上の用語として規定されたものである。強調されてゐるのは「統一的或者」の分裂と統一の作用である。「簡單に言へば統一的或者……」から始まつて「……種々の形で延ばしてゆく」に到る部分は、知的緊張に張り切つたところであつて、かういふ部分は、最も直接に著者と讀者を共感させる力を持つてゐる。「現實の意識生活は」以下は、緊張を弛めながら所論をまとめて行く部分で、「結論は再び「統一的或者」なる意味の中心點に落ち付いてゐる。

三　阿部知二、『冬の宿』

私を迎へてくれた女の顔は一層白く蒼ざめ、あの西日の中で火照(ほて)つてゐた陶器の光澤ではなく、暗い冬の夕方にあたりの空氣よりももつと冷たくなつて光を底に凍らせてしまつた陶器の感覺があり、その言葉も、凛として刺すやうな響きがあつた。

內容は特異な感覺を表はしてゐるが、表現としてはきちんと整つてゐて一向に

破れを見せない。書いてゐることは無色の概念ではなく、觸れて感じられるやうな形象となつてゐる。冷えびえした感じを味はせるが、それは我々が感ずる生の感覺そのものではない。例へば「陶器の感覺」は感性の鋭い者でなければ感じ得ないだらう。「冷い色」は敢て隱喩と云へない程、感情的に我々が直接に經驗するものであるが、それに「陶器の感覺」を感ずるのは、餘程みがかれた感性である。感じぬく、唯その強さではない。同時に感覺を美しく透明に見てゐる。其處に知性のみがきがかかつてゐることを知るのである。又文をポッンポッン切らないで、長い文にまとめ上げながらあらゆる角度から感覺像を畫き出して行くのは、根強い感情といふよりは、表面的に手際よく分析して、明晰な印象を示して行く知的な構想力を表はしてゐる。情的表現になりさうな内容まで、透明な知性の透視圖に描き上げるのである。かういふ文章は、情的表現を抑へる態度に、その特徴が見えるのである。

菊池寛の「敵討以上」「劇」の最後は、實之助の語で、

恩讐は昔の夢ぢや。手を擧げられい。本懐の今宵をば、心の底より欣び申さう。あな嬉しや。嬉しや。欣ばしや。

の如き情的表現である。これに當る箇所は『恩讐の彼方に』(小說)では、

敵を打つなどと云ふ心よりも、此の羸弱い人間の双の腕に依つて成し遂げられた偉業に對する驚異と感激の心とで、胸が一杯であつた。

となつてゐて知的表現である。此處に擧げた比較から知的表現の一般的特徴を指摘すれば次の如くである。

一　客觀的提示の形式

狹義の感情表現、即ち主觀的「表現」に代つて、客觀的な「提示」(一〇)の形式を取る。換言すれば、事情を明にし理由を説明し主客の別を明示して、事實を客觀的に提示する形式になる。劇ならばト書きで説明される部分が文脈として組入れられることになる。それだけ暗示的な性質を失つて外顯的になる。即ち一亘り理路を盡して説明しなければならない。

二 論理的分節作用

右に述べた客觀的提示形式を取るために、論理的な分節作用を受ける。主客の別を明かにするのは著しい一例であるが、上例で云へば「敵を打つ心」と「偉業に對する驚異と感激の心」とを比較してその大小を決定するのも一例である。その場合に、比較された内容よりも比較の「關係」(一一)又は「形式」を表はす點に、知的表現の特徴が存する。かかる形式の明確なものほど、知的表現の名稱にふさはしいもので、レーヴィン(一二)(Lewin)の語を借ると「強いゲシュタルト」を形成するのである。始めと終り、部分と全體の如き構造に分析綜合するのは、とりわけ知性の

作用であり、自然な生活の機能性から云へば、情的表現と比較して、negative であるが、有意的な構成作用から云へば、positive である。

三　靜止的な構造を作ること

右に述べた構造は、論理的な構造であつて、時間的に生成消滅する過程ではない。それだけ客觀的な意義を有する譯である。靜止的な固體は、ベルグソン[一四]も述べた如く、知性の産物であるが、知的表現はかやうな固體を明示するところに特徴がある。これを知的構想作用と稱してよいであらう。

四　構想作用の自由なこと

知的構想作用は、感情の論理で聯合比較されるものよりも、もつと本質的なものを組立てて見せる。例へば、「敵を打つ心」と「驚異と感激の心」との比較は、單純素朴な比較によつては爲されるものでなく、人間心理の本質的なものを見貫く鋭い知性の作用によつて出來るものである。それは事實そのものの外面的な觀察によつて生れるものではない。深い人性の解釋を要するのである。

右に述べたやうな比較は、自由な人間の構想力を示すものであつて、ジャネ(Janet)[一五]によれば、言語活動の威力の存する所以である。即ち、物其自體の比較や、手足を使用しての行動からは、到底不可能と思はれる比較作用を、知的な言語活動がやつて見せるのである。知的表現は、それを明確な形式に於て示す點に特徴がある。

五　言語形式が觀念を作る手段になること

「此の羸弱い人間の双の腕に依つて成し遂げられた偉業に對する驚異と感激の心」なる表現には、次の如き壓縮された判斷が含まれてゐる。

1 人間の双の腕は羸弱い
2 此事業は人間の双腕によつて成し遂げられた
3 此の事業は偉業と稱すべきものである
4 此の偉業に(我は)驚異し感激した

かやうに分けては、夫々の文が完全な構造を示すだけに、そのままの形で上述の比較形式に組立てることはできない。比較形式として始めて完全な全一體に組立てるためには、右の文例が全體に對する部分の形式を取る必要がある。卽ち各文の論理的輕重を表現に表はさなければならない。その結果、最も中核になるものが「驚異と感激の心」であり、それに次で「偉業」が定位され、兩者を結ぶ形式要素として「に對する」なる表現が用ひられてゐる。さうした構成を整へてみると、「偉業」「驚異」「感激」などの語が一きは目立つた觀念を示すことになる。此處ではそれらが何等かの價値を表示する觀念になつてゐる。此の觀念とそれを表はす語とは、密接不可分の關係に在つて、[二三]かかる語法がなければ、かういふ表現の構成はできないのである。例へば、同じ内容を云ふにしても、ゲシュタルトが弱くなれば、次のやうにも表現できるだらう。

敵を打つことなどはどうでもよく、羸弱い人間の双の腕で成し遂げた立派な事業に驚

きもし感激もして、胸が一杯であつた。

これを原文と比較すれば、知的表現の特徴がよく分るであらう。原文の方が、論理形式が明確であり、所謂 discursif である。それだけ英語などに直譯し易い。安藤寛一氏の英譯は次の如くである。

His heart had been simply filled with unbounded admiration at the achievement wrought by a pair of frail and aged human arms, an achievement before which such a despicable mortal sentiment as vengeance utterly vanished.

「敵を打つなどと云ふ心よりも」の箇所は、英語の方がより論理的で外顯的である。即ちかういふ所は英語の方が知的表現の特徴が大きいと云へる。

5　知情的表現——比喩法

知的表現と情的表現の混合型を知情的表現と名付けておく。知的な特徴と情的な特徴とが掛合はされたもので、その代表的なものは比喩法である。

何等かの論理に卽して分析し統一し整序するのは知性の作用であるが、具體的に我々の經驗するのは、それに情感の加はつたもので、嚴密な形式論理ではない。例へば「角帽」なる語を「大學生」の意味に用ひるのは、角帽なる衣裳を以て之をかぶる大學生に代用するだけではない。論理學でいふ pars pro toto（全體を代用する部分）だけではない。それは角帽に大學生の中心特徴を見出す一種の直觀である。此處に支配してゐる識別作用は、部分——全體の如き量的なものではなく、むしろ質的な直觀作用である。純粹の知性は量的に分析するが、それよりも

感情作用が優位を占める時に、質的直觀を生ずるのである。「角帽」に大學生らしさを最もよく直觀するのがその一例である。

隱喩(metaphor)の一種に、「冷い色」、「和らかい音」の如く、物とは別種の感覺を表はす形容詞を用ひることがあるが、これは、リボー(一七)によれば、既知の經驗を置き換へたのではなく、むしろ直接に感じてゐる經驗である。嚴密に感覺的な識別は純粹知性の作用であつて、「色」を「冷い」と感じ「音」を「和らか」と感じるのが、感情的な論理作用なのである。

一般に比喩と稱してゐるものは、知的な分析に情感の掛合はされたもので、隱喩は概して情感が勝つてをり、その意味で表現性の強いものであるが、直喩(simile)は知的分析の方が優れてゐる。芥川龍之介のアフォリズムなど後者の代表的な例である。

人生は一箱のマッチに似てゐる。重大に扱ふのは莫迦々々しい。重大に扱はなけれ

ば危險である。

人生は落丁の多い書物に似てゐる。一部を成すとは稱し難い。しかし兎に角一部を成してゐる。

などその例であつて、人の意表に出るやうな類似點を發見し、又部分と全體を分析綜合するのは、鋭い知的作用を示してゐる。我々が其處に皮肉めいた情感を感ずる所に、かやうな比喩の表現性が存在するのである。しかし興味の中心點は、知的分析そのものにあると思ふ。

これに比して、隱喩の方は、情感そのものが勝つてゐて、直觀的な聯合作用が情感そのものと一致し、其處に強い表現性を生ずる。例へば、大學生を「角帽」と呼ぶ時は、角帽を大學生と直觀的に聯合する作用に、大學生らしさに對する我々の情感が代表される。「角帽」と呼べば、大學生はその大學生らしさを表はして、生きた想像的表象卽ち image を作り、それが我々の大學生に對する親密の感情と一致す

るのである。

次の例は、友松圓諦の『法句經講義』より取つた。

苦痛といふものは生命のサイレン、生長の心臓の鼓動だ。このサイレンがないとひとは警告なしに死んでしまふのです。くるしみ、いたみは生きてゐるものの早鐘です。さて私たちはかうした四苦八苦におどろいてはいけない。この苦しみに直面しなければならぬ、顔をそむけず、ぢつと、これをみつめてこれに體あたり、どんとぶつつかつてゆくことが大切です。

「苦痛」を「生命のサイレン」とか「生きてゐるものの早鐘」とか言ふと、我々が直接經驗する具體的な表象になつて、深い論理はわからなくても、成程と合點させる力を持つてくる。さうした情感に訴へるところに、かやうな比喩の効果がある。芥川龍之介のマンネリズムのやうに、斯く斯くの點に於て斯く斯くのものに似てゐ

るといふ風な、論理的說明がないだけに、かうした隱喩の方が俗耳に入り易い。宗教は、譬喩を方便としてよく用ひる。佛教の經典にその例が多いが、聖書にも有名な parable が澤山ある。マタイ傳第十三章にあるものを引用すると、

天國は一粒の芥種のごとし、人これを取りてその畑に播くときは、萬の種よりは小さけれど、育ちては他の野菜よりも大きく、樹となりて空の鳥きたり、其の枝に宿るほどなり

これはキリストの示した譬の一つである。弟子どもが何故に譬によつて語り給ふかと訊ねると、キリストは「なんぢらは天國の奧義を知ることを許されたれど、彼らに許されず。それ誰にても、有てる人は與へられて愈々豐ならん。然れど有たぬ人は、その有てる物をも取らるべし。この故に彼らには譬にて語る、これ彼らは見ゆれども見ず、聞ゆれども聽かず、また悟らぬ故なり」と答へてゐる。これは譬喩の方便である所以を說明したものであるが、見易く聽き易くなるの

は、譬喩の具象性によるものであり、人々に感銘を與へるのは、感情論理に訴へるからである。

古來比喩法が修辭學に於て重んぜられてきたのは偶然ではない。人を動かす辯論術としては、比喩法は最も有力な武器なのである。或る科學者は、講演に際して、比喩はごまかしが多いから使はないと言つたが、普通人の經驗から云へば、正しく使用された比喩は却つて眞實性の大きいものである。比喩は理論に形態を與へる方法であつて、單なる說明のための便法ではない。理論を純粹知性の對象だけにしないで、直接我々の觸れて感知し得るものにするためには、比喩はもつと本質的な働きを有してゐる。比喩は我々の情感に訴へる力を持つてゐるので、比喩といふ形態によつて、我々は理論を具體的な物として把へることができるのである。比喩は理論そのものの重要な一面を成すものであつて、完成した理論を分り易く傳達する手段であるばかりではない。例へば、「生命の躍動」、「意識の流」、「實在の影」、「觀念の束」の如き比喩は、對象の把へ方思考の形式そ

のものを示すもので、これらの理論が形成されるのに、重要な役割を演じてゐる。カントが「義務は自己獨得の法則と自己獨得の法廷とを有する」と述べた時は、「義務」に尊嚴なる人格性が賦與され、最高善の實現される世界を「見えぬ教會」と呼んだ時は、具體的に把握された地上の天國を意味してゐる。此の人格性や具體性がカントの實踐哲學に大切な要素なのであつて、此處に擧げた比喩は、說明のための比喩に止まらない、彼の哲學に直觀像を與へる形成要素になつてゐる。

比喩法は、知的表現と情的表現の混合型であると述べたが、此事を少し詳しく說明してみよう。三木清氏は、[一八]ロゴスとパトスの統一したものを「構想力」に求めてゐるが、此處では言語活動の機能性を中心にして考へたいと思ふ。類型として見た知的表現と情的表現は、前（八七頁）にも述べたやうに、機能性の兩極、卽ちnegative な極と positive な極を代表するものである。兩表現の混合型といふのは、此の兩極が合一したものに外ならない。

「神の如く弱し」といふ比喩を取つてみる。人間の弱さを神の屬性のうちから

抽出した弱さに比較することは、すぐれた知性のなし得ることであつて、神の屬性に注目しながら此の比較の過程を見れば、此の比喩は頭で作られた思索の產物であつて、具體的な生活機能から遠い、卽ち機能性を喪失した negative な表現である。ところが比較された人間の弱さそのものに注目して出來上つた比喩を見れば、人間の弱さが具象的な姿を取り、我々はそれに對する感情的な批判を經驗する、卽ち positive な機能性を經驗するのである。前者、卽ち比喩法の過程を見た場合には、此の比喩を知的表現と稱することができ、後者、卽ち比喩法の目的と結果を見た場合には、此の比喩は情的表現と稱してよいのである。

　比喩が比喩として表現力を有してゐるのは、右に述べた兩面が同時に經驗されることを要する。知的な面が目立つ場合は、「人生は一箱のマッチに似てゐる」といふ比喩のやうに、作者の思考過程に注意が集中し、情的な面が目立つ場合は、「苦は生きてゐるものの早鐘である」といふ比喩のやうに、比喩によつて說明された事實そのものが注意の焦點となる。前者は思惟的で個人的な特徴を有する

が、後者は道德的で社會的な性質を持つてゐる。これは兩極端を比較したのであつて、一般の比喩は上述したやうに、兩方の面を合はせてゐるものである。それで比喩には獨創性が目立ちながら一般の共有財になり易いといふ奇妙な性質がある。「荒鷲」、「體あたり」などいふ比喩が、獨創的なものとして强い表現力を持つてゐるかと思ふと、何時の間にかそれが廣く人々の口に上り、何時しか表現力を失つてしまふ。さうして又、新しい比喩が創造されて行く。言語活動が活潑であればある程さうである。俗語や卑語に比喩の多い所以であつて、アメリカ英語などに、さうした例がいくらもある。

比喩法は、發生的に見れば知的表現であり、效果的に見れば情的表現である。さういふ意味で兩表現の混合型と稱したのである。かういふ複雜な構造を有するので、比喩法は言語活動の個性や言の直觀像を理解するには最も好適な材料になる。簡單に個人言語の特性を把へようとすれば、比喩を使用してゐるかどうか、使用してゐるとすれば如何なる比喩であるか、を調べるのが一番の早道

である。詩の imagery が好んで研究されるのも、さういふ理由に基づくものである。

6　統語的置換による情的表現

比喩は意味の置換による表現法である。即ち、意味上聯合したものを置き換へることによつて表現性を生ずるものである。統語法（Syntax）の置き換へによつて情的表現を生ずることがある。例へば、「來ないか！」は普通の命令形「來い」に比べて情的表現であり、「美しいではないか」はただの「美しい」といふ形に比して情的表現になる。意味から云へば結局同じことになるのであるが、統語法の置換される所、即ち疑問形を以て命令形に代へ、否定の疑問形を以て肯定形に代用する所に、情的樣相の發現を見るのである。

形式の置換は、'call a spade a spade' 即ち單刀直入に物を言ふの反對であつて、遠廻しに物を言ふか、捩つた物の言ひ方をするのであつて、起源は一種の辯證法である。所謂「修辭的質問」(rhetorical question) などがその適例である。'Who can tell?' (=Nobody can tell) や 'Whom should I see but my teacher?' (會つたのは誰あらう僕の先生です) などいふ言ひ方がこれに相當する。その他、'Go this way (=If you go this way), *and* you will find a bridge.' や 'Had I some money (=If I had some money), I would buy this book.' などももとは辯證法から出た一種の情的表現であつたものが、一般語法として落ちつき、情的な性質を失つたものと解してよいであらう。

強勢語法と解せられる 'He is always forgetting.' (彼は忘れてばかり居る) は、事實に對する強勢法から主觀的な強勢法、即ち一種の情的表現に轉換したものと思はれる。かういふ形式が從來學校文法で許されてゐないことは、それが情的表現であることを間接に示してゐる。'I wish I *were* a bird' よりも 'I wish I *was* a bird' の方が表現力が強く、又假定法の 'If I *had* some money,...' よりも 'If I *had had* some money,...' の方が意味が

強いと云はれるのも、常に新しい形式に情的表現を求めて行く言語活動の更新力を示すものである。

かういふ形式は、意味を定軸として「新しい」形式と云へるのであるが、逆に形式を定軸とすれば、それは「新しい」意味とも云へるであらう。「新しい」意味に強意の加はつてゐる事實に注意を要する。強意は活潑な情的機能であるから、かかる語法を情的表現と稱してよい。

かやうな形式と意味の間のズレをたどれば、言語史的研究又は「通時的」(一九)研究が出來るのである。should の如き助動詞は、右に述べたやうな方法で研究すれば、幾度か更新を經てゐることが分るであらう。此處に示したやうな例は、文法と文體の相互關係を明かにする好材料になると思ふ。

一、Cf. Sechehaye : "*La stylistique et la linguistique théorique*" (*Mélanges de linguistique offerts à M. Ferdinand de Saussure*, Champion, Paris, 1908, P. 155 ff.)

二、'identification' (Bally : *Traité de stylistique française* I, P. 88 ff.)

三、Bally : *Le langage et la vie*, P. 155 ff., P. 177, P. 179.

四、Brugmann : *Kurze Vergleichende Grammatik der indogerm. Sprachen*, Walter de Gruyter, Berlin / Leipzig, Neudruck 1922, P. 293.

五、Dauzat : *La philosophie du langage*, Flammarion, Paris, nouvelle édition 1929, P. 80.

六、Jespersen : *Language, Its Nature, Development and Origin*, Allen and Unwin, London 1922, P. 249.

七、林語堂、吾國土、吾國民（新居格譯、豐文社）

八、Jespersen : *Growth and Structure of the English Language*. Teubner, Leipzig / Berlin, fourth edition 1923, Introductory P. 17.

九、Gomperz : *Weltanschauungslehre*, II, I. P. 232 ff.

一〇、'Darstellung' (Bühler : *Sprachtheorie*, Fischer, Jena, 1934, P. 28.)

一一、Bergson : *L'évolution créatrice*, Félix Alcan, Paris, vingt-huitième édition 1924, PP. 160—161.

一二、Cf. Lewin : *Dynamic Theory of Personality*, McGraw-Hill, New York / London, 1935, P. 221 ff.

一三、Cf. Hönigswald : *Die Grundlagen der Denkpsychologie*, Teubner, Leipzig / Berlin, zweite Auflage 1925, PP. 57—58.

一四、Bergson : *L'évolution créatrice*, PP. 166—169.

一五、Janet : *L'intelligence avant le langage*, Flammarion, Paris, 1936, P. 134.

一六、Ibid., P. 135.

一七、Ribot : *La logique des sentiments*, Félix Alcan, Paris, cinquième édition 1926, P. 7.

一八、三木清、構想力の論理、第一（岩波書店、昭和十四年）

一九、'diachronique' (de Saussure : *Cours de linguistique générale*, deuxième édition 1922, P. 117. 小林英夫譯、言語學原論、一六三頁)

　

知的表現と情的表現の別のやうに、單に生活機能の表現を見究めるだけに止まらないで、之を基礎にして一步を進め、兩表現の特性を檢べてみる必要がある。知的表現の特性は思考形式の別によつて明かにすることができ、情的表現の特性は感情及び情緒の別によつて之を究めることができる。

とりわけ知的な人間、例へばカントのやうな哲學者の思考形式は夙に研究されてゐる。直觀及び悟性の範疇形式を見ると、彼が數學的な整序を好んだことが察せられる。又プラトーなどは飛躍的な理想主義の觀念論が特色になつてをり、ルッソーの自然主義は感情的な浪漫精神の發露を示してゐる。我々はこれらの思考形式を言語表現の方から研究しなければならない。

言語表現が果して思考形式を忠實に表はすかどうかに關しては問題のある所である。カッシレル[一](Cassirer)やヴァイスゲルベル[二](Weisgerber)などは、言語表現を認識形式と見做してゐる。その點はカントやフンボルトの影響を受けてゐるのであつて、渾沌たる感覺材料が言語形式によつて整理され統一される所に認識を生ずるとの考へである。思想内容そのものは直接に言語表現と關係がないかも知れないが、之が一般社會の共通な機能となるためには、一定の言語形式によつて形成されなければならない。感情的なものは必ずしも夫を要しないが、知的な内容に於てはかうした形式化は認めなければならない。思考に言語活動の必要なことは、ドラクロア[三](Delacroix)も説いてゐるがピック[四](Pick)の分析した心的法式と文法的型式は、實際に於ては明確に分けられないで、兩者が融合して一種の「内部言語形式」になり、それが思考作用に形式を與へるものと考へられる。從つて使用された言語形式を分類すれば、自ら思考形式を明かにすることになるのである。但し、かやうにして知り得た思考形式は、哲學者の觀念論、實證論のや

うな形式とは又異つたものになる。何となれば、觀念論を實證論的な形式で表現することも可能だからである。此處にいふ思考形式はあくまで言語表現に現れる形式であつて內容そのものではない。シュピッツェルが「語ることは見ることであり、世界を文體化することだ」と述べてゐる（*Stilstudien*, II, PP. 163, 164）のも同じ事を別な語で言つたものである。

個人の思考內容は千差萬別であらうが、思考形式は比較的簡單な型にまとめることができる。個性の絕對的な價値は情的な特性が主動力となるものであつて、知的な思考形式だけを抽象すれば、[五]ユング（Jung）の「內向型」と「外向型」、[六]シュプランゲル（Spranger）の「生存形式」のやうな類型に整理することが可能である。

1　ハックスレーの文體

個人がとりわけ知的な性格を有する場合は、かやうな思考形式を明かにして、性格を見究めることが容易である。例へば、英國の小説家オールダス・ハックスレー(Aldous Huxley)がその一例であつて、彼自身は「外向型」であり、外界の事物に卽して物を考へると稱してゐる。しかし自身も認めてゐる如く、彼は「視覺型」ではない。記憶だけで、例へば部屋の道具を敍述することはできない。一定の語又は觀念があつて、それに嵌め込んで物を描くのである。之は自然の描寫にも見られるが、特に彼の本領とした人間の敍述に著しく、人物の性格、態度、擧動などを描くのに特徴がある。一例を擧げると、副詞の用法にそれが現れてゐる。*Two or Three Graces* といふ小説にキンガムなる男とグレースなる女が出てくる。キンガムを敍して

Indignantly, Kingham threw himself back in his chair.（憤然としてキンガムは椅子に身體を投げた）

Restlessly, he walked about the room. 103 (不安氣に彼は部屋を歩きまはつた)

Painfully and *profoundly*, he was enjoying it. 137 (悲痛氣に深刻に彼はそれを味はつてゐた)

Wearily, *wearily*, he uttered his sedative phrases. 188 (物憂げに物憂げに彼は鎮靜的な文句を口にした)

と述べ、グレトスを敍して

And then, *helplessly*, their mother would give it up. 33 (それから頼りなげに彼等の母はそれを中止するのだつた)

Diffidently at first, Grace let herself go. 97 (始めは內氣にグレースは思ふままに話した)

Provocatively, *promiscuously*, she flirted. 107 (煽情的に當ても無く彼女はふざけた)

と記してゐる。文頭に出した副詞で、人物の擧措が躍如と浮ぶやうな工夫をしてゐる。同樣な例は、他の小說からも多數集めることができる。同樣な傾向は、

彼の隨筆にも見られるもので、*Along the Road* に

But *grimly*, *indomitably*, in spite of their fatigue……, the three young girls sat on. 6 (だが疲勞に拘らず恐しく頑固に三人の若い娘は坐つてゐた)

Fitfully, I read about the American church. 227 (氣まぐれに私はアメリカ教會の記事を讀んだ)

On the Margin に

Feebly and *belatedly*, let me follow the pack. 115 (力弱く遲々ながら犬群に從ふことにしよう)

Jesting Pilate に

Curiously, admiringly,……, I looked on. 3（好奇的に讃嘆しながら私は眺めた）
Reluctantly, with pain I woke myself. 85（厭々ながら苦勞して私は眼を覺した）

主に氣持や感情を敍べたものが多いが、その敍べ方が如何にもかうだと許り目立つやうに强調してある。彼は視覺型でないから、自然と人物のイメヂが眼に浮ぶことはない。しかも性格描寫を生命としてゐるので、どうでも極立つた語形によつて力强く表現し、讀者の注意を之に向けなければならない。彼は語によつて考へてゐる。彼は代表的な「語の人」（Wortmensch）である。從つて描寫の内容は自然と浮び上るのでなく、觀念的にでも之を强調しなければ濟まないのである。その特色が殆んど定つたやうに同じ副詞形に現れてゐるのは、彼が主知的である一つの徵である。

(七)ハックスレーが知的表現の作家であることは、彼の中心思想なり傾向なり理想なりが、一定の語形によつて判を押したやうに體系化できる點からも知られる。

彼はシュプランゲルのいふ「理論人」であつて、その考へ方は常に少數の形式と軸による組織的な點に特色がある。彼はその點で'deliberate'(熟考的)な作家である。しかも自身はかやうな單純な思考形式で甘んじない。現實はもつと複雜で御し難いものであることを知り、かかる現實をそのまま純眞な卽ち'genuine'な氣持で摑むことを理想としてゐる。彼は何でも'genuine'なものが好きである。「本物の靴」「本物の書物」「本物の藝術」など、それから「本物の人間」卽ち純眞無垢な人間を好む。'genuine'であるとは同時に物の本質的・根源的なものを表はすので、'genuine'な人生にあこがれるのである。不完全な'deliberate'な形式を棄てよ、'genuine'な生活、'genuine'な現實を求めよ、と叫んでゐる。問題はさういふ理想を考へる考へ方、それを表はす表現形式であつて、之はどこまでも「理論人」の熟考的な思考形式を去れないのである。彼は、ウォーズウォースが「熟考的」に限定した狹い自然をしか歌つてゐないと批評してゐるけれども、彼自身の人生觀も同樣な形式が因果の如く附きまとつてゐる。

右に述べたやうな特色は、'genuine' と 'deliberate' といふ二つの語を用ひた例を、カードにでも取つて、圖式に表はしさへすれば、判然と組立てられる思考形式である。ハックスレーの考へは、大體此の二つの坐標によつて正確に定位されるものだ。かういふ特色があるので、彼を代表的な知的表現の作者と稱してよいのである。

ハックスレーのやうな作家の文體を檢べるには、材料の整理と組立てさへうまく行けばよいのであつて、かういふ研究方法を「外延的」(extensive) と呼んでよい。平面的であり圖式的である。ところが、情的な特性の強い文體はかういふ方法では充分な研究ができない。人格の深みに滲透しなければならない。此の方法を私は「內延的」(intensive) と呼ぶ。

知的な思考形式は、少數の類型に整理して、對比し得ることは既に觸れた通り(一三二頁)である。研究方法そのものも知的な類型論によることができる。類型論は思考形式 (Denkformen) の研究に特徵のあるドイツで發達してゐるが、シュナ

イデル (Schneider) の『ドイツ語の表現價値』(*Ausdruckswerte der deutschen Sprache*) は、その代表的なものである。彼は「觀念的」と「感性的」、「明斷」と「朦朧」、「平靜」と「興奮」、「塑像的」と「音樂的」、「客觀的」と「主觀的」の如く、兩々對比した形式を擧げて、表現價値を論じてゐる。その概念はドイツ人らしく、圖式的に整然たるものがある。一例を擧げると「塑像的文體」とは全體像を劃然と畫き出すもので、太い線によつて總體表象を一目瞭然と示すところに特徴がある。「音樂的文體」といふのは主觀的な氣分が主調をなすもので、感性的表象により喚起されるものをいふ。ゴットフリード・ケルレルが塑像的文體の一例で、ニーチェは音樂的文體の例であるといふ。同じやうな別は、英國の浪漫派詩人キーツとシェレーにも立てられるであらう。

類型論の特色は、代表的な特徴を對比し又は體系化する點にあるもので、對比又は體系化に價値を認めない限り、その生命は無いのである。故に、個人文體の絶對價値を見究めるには、此の方法は不完全である。上述のシュナイデルの分類にも見られるやうに、對比するためには何か一定の標準が無ければならない。

此の標準が個人文體を價値づけるのに本質的であればある程よいのであるが、標準である以上さういふことは不可能である。又、標準の數が多ければ多い程、絕對價値に近づくが、之に到達することは難しい。例へば、(八)ミューレル・フライエンフェルス (Müller-Freienfels) は、「知」「情」「世界」「態度」などの項目に分け、それらの標準から自己と世界との關係卽ち「世界觀」を分けて類型を立ててゐるが、かかる類型によつても、絕對の人格像に達することは不可能である。標準を如何に增してみても、本質的に重要な要素が缺けてゐる。卽ち、類型論は分析的な體系化を使命とするものであるが、絕對人格は分析し切れない生命又は價値を有するのである。之に達するためには、純化された生活機能又は生命にそのまま突入しなければならない。此處で「內延的」な方法が必要となる。

2 芥川龍之介と里見弴の文體

例へば、芥川龍之介は知的な體系で割切れるのに反し、里見弴にはさうしたもののの言ふことをきかない感性的な要素、ねばり強い情的な要素がある。即ち情的表現に特色がある。之をつきとめないと結局本質的な文體は摑むことができない。里見弴には、芥川龍之介に適用した方法から超越した別な方法が必要である。之を說く文體論にも、所謂「體系」以上のものが無ければならぬ。作家が「感ずる如く考へる如く全身を擧げて」書いたものは、我々も身體全體の神經を働かせて理解しなければならない。

以下、感性と感情を生命とする作家を少しく擧げて、文體論の實踐を試みてみたい。これは知的表現の特性から情的表現の特性に移ることであり、同時に知

的と情的のごとく一定のカテゴリーにはまらない表現の世界に飛躍することである。

順序として、知的な芥川龍之介の文體を、はじめに檢べてみよう。

……それは小ぢんまりと出來上つた、奧床しい門構への家だつた。尤もこの界隈にはかういふ家も珍しくはなかつた。が、「玄鶴山房」の額や塀越しに見える庭木などはどの家よりも數奇を凝らしてゐた。

この家の主人、堀越玄鶴は畫家としても多少は知られてゐた。しかし財産を作つたのはゴム印の特許を受けた爲だつた。或はゴム印の特許を受けてから地所の賣買をした爲だつた。現に彼が持つてゐた郊外の或地面などは生姜さへ碌に出來ないらしかつた。けれども今はもう赤瓦の家や靑瓦の家の立ち並んだ所謂「文化村」に變つてゐた。……

しかし玄鶴山房は兎に角小ぢんまりと出來上つた、奧床しい門構への家だつた。殊に近頃は見越しの松に雪よけの繩がかかつたり、玄關の前に敷いた枯れ松葉に藪柑子の實が赤らんだり、一層風流に見えるのだつた。のみならずこの家のある橫町も殆ど人通り

と云ふものはなかつた。豆腐屋さへそこを通る時には荷を大通りへおろしたなり喇叭を吹いて通るだけだつた。

「玄鶴山房――玄鶴と云ふのは何だらう？」

たまたまこの家の前を通りかかつた、髪の毛の長い畫學生は細長い繪の具箱を小脇にしたまま、同じ金釦の制服を着たもう一人の畫學生にかう言つたりした。

「何だかな、まさか嚴格と云ふ洒落でもあるまい。」

彼等は二人とも笑ひながら、氣輕にこの家の前を通つて行つた。そのあとには唯凍て切つた道に彼等のどちらかが捨てて行つた「ゴルデン・バット」の吹ひ殼が一本、かすかに青い一すぢの煙を細ぼそと立ててゐるばかりだつた。……

如何にも肌理の細かな、見透しの明るい、組織立つた文體である。特徴を分けてみると、

一　常に全體の布置を考へて觀察してゐること

二　度繰返されたり「小ざつぱり」と出來上つた、興味しい門構への家」の構造やその

前景、「玄鶴山房」の額や見越しの松に塀越しに見える庭木、人通りのない横町、そこを通る豆腐屋、全てはまるで芝居の書割りでも見るやうに整然とした布置に於て物を觀察してゐる。一定の視點と、その視點から見られる全景の組織、さういふものが小綺麗に並べられてゐる。

二　視覺的であること

客觀的に觀察して描寫する態度が視覺的な表現によく現れてゐる。「雪よけの繩」「赤らんだ藪柑子」「髮の毛の長い學生」「細長い絵の具箱」「かすかに靑い一すぢの煙」など、透明な觀察眼を示してゐるが、これは全神經で感じた印象ではない。洗練された、それ丈觀念的なイメヂである。

三　論理的な脈絡に敏感なこと。

「小ぢんまりと出來上つた……家」から「尤もこの界隈にはかう云ふ家も珍しくはなかつた」と斷り書きのやうなことを言ひ、更に「が……どの家よりも數奇を凝らしてゐた」と述べなければ氣が濟まない。西田博士に見るやうな強靱な

論理性ではない、小心な、人から弱點を押さへられないやうに心を遣ふ几張面さなのである。これは「多少は知られてゐた」が「資産を作つたのはゴム印の特許」の爲である「或は……地所の賣買をした爲だつた」と發展させる傾向にも窺はれる。

四 觀察眼の纖細なこと

これは全體構造が整つてゐるのと同じく知的な性質の一特性であるが、煙草を「どちらかが捨てて行つた」と言ひ「一すぢの煙を細ぼそ（細・ぼ・そ・は彼の愛用した語である）と立ててゐるばかり」と述べてゐるあたりに夫が見られる。「生姜さへ碌に出來ない」といふのも、生きた體驗といふよりは頭で構想したものだらう。

五 論理的な事實性に用意周到なこと

これは論理的脈絡とも關係があるのだが、「尤も」「……も多少は」「殊に近頃は」「のみならず」「たまたま」「そのあとには」などの語法に明かなやうに、中心になる事

實又は映像をそのまま言つて捨てることができないで、前後との關係や周圍の事情との辻褄を油斷なく述べつくすのである。

六　文が短くて段落がはつきりしてゐること

語尾のたで終る短い構造の文が並んでゐる。作者は部分部分を小さくまとめて了ふ。それからそれへネバリ強く引張ることができない。恰も小ぢんまりした文化住宅が並んでゐるやうだ。彼がアフォリズムを愛したのも、かういふ所に原因がある。

右のやうな特徴から、芥川龍之介を、線の細い、洗練され切つた、病的に神經の鋭い、小心な知性人と斷じても異論はあるまい。如何にも透明な小氣味よい文體に見えるが、これを讀んで同じ感情を持つのは、相當しんの疲れる仕事である。彼は物を書くのに用意おさおさ怠りない。『黠心』(二五三頁)に「大抵は筆を取る前に考へて、その考へた通りに書いて行くのが普通である」と述べてゐるが、これは彼の文章にもそのまま當てはまる言葉である。

芥川龍之介とは對蹠的であり、しかも彼と同列に置かれない以上のものを持つてゐるのは、里見弴であらう。『本音』と題する短篇から一節を拔いてみる。

　徹夜の仕事のあと、あまり空腹だと寢つかれないので、輕くパンくらゐ食ふ、それが終るか終らないに、豫科で、八時初りの多い欽造の朝飯、暫くして森山、寢坊な昌一がその次、三時半頃に、主人たちの朝飯、五人家内の風呂、六時には森山と兄弟二人の晩飯、少しおくれると、腹がすいたで大騷、それをひとたてすまして、大抵一人や二人は客のある、晩酌で、たつぷり二時間もかゝる晋藏たちの晩飯、客の歸るのが、十二時前といふことはめつたになく、その揚句が、蕎麥が食ひたい、何？　もう間に合はない？　ぢア、パンかお雜炊でも、と無遠慮に寢夜食を請求する客もある、その間に、女中たちの三度の食事や入浴も挾まるのだから、その總てに氣を配らなければならないおこうの忙しさといふものは、いゝ加減な料理屋、待合の女將の遠く及ぶところでなかつた。

齒切れの惡いことおびたゞしい文章だが、全文の論理的な意味構造には氣を

遣はないで、部分部分の意味について行けば、却つて解し易い。結局大意はおこうの忙しさは料理屋などの女將以上だつたといふ丈のことで、あとはその忙しさを夫々の場面に就て述べたてたに過ぎない。場面の述べ方は、芥川龍之介のやうに、視點を統一して組立てたり、觀念的に整頓したりしない。場面を直寫する行き方であるから、會話がそのまま文の中に入つてきたり、おこうのあれからこれからと氣忙しい氣持がそのまま織り込まれてゐる。從つて、論理的な構造よりも一面に行き亙つてゐる氣持そのものに同化しなければならない。從つてその文體は、感性的であり、情的である。これが大體里見弴の文體なのであるが、同じ小說から材料を取つて、この特色をもう少しつきとめて行きたい。視點が統一されてゐない例には、次のやうなのがある。

二十臺の初め、年上の友達の影響で、己に寛ふしない習癖を得たのはいゝが、神經衰弱に手傳はれて、いつか嗜虐性を帶びて來ると、無意味に自分で自分をいじめつけ、もつて生れ

た性分が、一々嫌惡の種となり、なんのかのと工夫を加へずには措けない。偶々、それを小煩く感じれば感じるで、どうしたらそこから抜け出られるかと、やはり工夫だし、それに氣がついて、……どこまでゝも深入りすればするほど、意識的な、生氣のない、拵へものゝ人間になつて行きさうだつた。

初めから主語の無い、まるで源氏物語か何かのやうな書き出しであるが、それは描かれてゐる人間が、はつきり輪廓づけるよりも、おぼろ氣ながら大きく浮き出して來さへすればよいからで、讀者もそれらしい人間をぼんやりと頭に浮べればよいのである。必要な箇所だけ抜き出さうと思つても抜き出せない、全文を寫しとらねばならないのは、文全體が一種のリズムにつながれてゐるからで、此のリズムの特色は、一々感覺にまつはつて、切らうと思つても切れない粘着性があるからである。かういふ粘着性があるから、遠くより美しくまとめて見るのとはちがひ、視點が急に轉換してゐても、それと感じないのである。圏點を附し

たところは、視點の轉換した例であつて、例へば「なんのかのと工夫を加へずには措けない」といふのは、現在の狀態そのものを直寫した言ひ方であつて、その上の事實又は過去の由來を敍した部分と同一平面ではない。芥川龍之介ならば「工夫を加へずには措けなかつた」と、之も事實の敍述にして統一してしまふところである。「やはり工夫だし」は、主人公の氣持そのものといふよりも、それに對する判斷であつて、前後の文脈からこれ丈が凸面をなしてゐる。全文に一種のリズムがあり、粘着性がつきまとふと言つたが、その中心をなすものは、客觀的な描寫でなく、自分の愚痴、自分の救ひきれない氣持であつて、それ丈觀念的でなく、もつと身近な感情である。

主語と述語の順序が、初めから整つてゐるのではない。先づ直觀してゐるものを述べ去つてから、後でまとめるといふ形が多い。次のはその例である。

1. 健康の回復につれて、嗜虐的な傾向が薄れて行つたあとでも、己には工夫、ひとには註文、

――何かにつけて、人工的な、さういふねば〳〵したものは殘つてゐた。「素町人」といふが如き意味での「素人間」になりたい、天容開豁にさらりとしたい、――それだけを唯一の望みに、親兄弟友達とも離れて、あ・て・な・し・の旅に出たこともある。

2. 居所次第で、勝手に體の色を變へるカメレオン、生來の自分自身を、嚴重な金庫のなかに鎖ぢ込めて置いて、どこかに鍵をしまひなくして了つたやうなもの、――無論、惡意からのい・や・が・ら・せ・ではないが、そんな風に云つては、度々腹をたてさせた。

3. それっきり、腰が拔けたやうになつて了ふ氣遣はない。きつとまた、シャキ〳〵働きだすが、一應はそこから出直さなければ駄目だ、――ちよつと類のない口說きやうだが、こんな風にも云つた。

4. 月末勘定はもとより、銀行への引出し、料理屋、待合への仕拂ひ、そんな使も賴んでゐたので、或る時、婆やに述懷して「……」と云つてゐたさうだ。

5. 父から讓られた土地があるから、五千圓もかけて家を建て、そこに、是非旦那樣や奥さんに來て貰ふ。一萬五千圓の利子なら、田舍では立派な生活が出來る。――と、かういふ話だ。

6. 下手(したで)に出て消し止まる火ではない、——そんな分別(ふんべつ)より先に、吊り込まれて、事實、腹もたつたが、……

7. 晉藏がゐればしないのだが、朝の出がけにも、二階まで「行つて參ります」を云ひに來るし、一度は、風呂場の戸をあけて、「お流しいたしませうか」とはつて來かけた——そんな話をして、「どういふんでせうね、いやンなつちまふわ」

感じたままを先に述べてしまふ。それから說明を改めて續けるといふ形である。讀者もそれについて感じたままを一應感じて了はなければならない。感じたままは同時に發音や言葉遣ひに現れてゐる。片假名や平假名を用ひたりルビを附けたりしてゐるのは、それを明かにするためである。句讀點もリズムを示してゐる。言語活動を元のまま再現しなければ濟まない。シャキ〳〵のやうな象徵語の多いのもそのためで、之は里見弴に最も著しい特徵の一である。語彙にも夫が現れてゐて、生(なま)のままの語が羅列してある。

兩親の膝下にゐた頃には、總領らしい弱氣、強情、甘ッたれ、我儘、お洒落、お茶ッぴい、泣き蟲など、あらゆる幼い感情を、のう〳〵と展べ放題に育つて來ながら、……

はその一例である。 シュピッツェルによると、ケル(Kerr)は自分の文章に方言を用ひて田舍人の氣持を感じたままに表はしてゐるさうだが、里見弴は生粹の下町式な東京辯を用ひて、同じやうな效果を出してゐる。

主語が無いために、却つて目立つた相貌の印象を浮き出たせる描き方は次の例にも見られる。

「おい、よせよ、聞えるぞ」と、兄が、肩で肩を小突いた時には、もう、敷居際に突き膝した女中のうしろへ、ぬッと立ちはだかつて、日焦のした顏に、齒並びばかりくつきりと、釣りあがつた眼尻や、高い顴骨の横手から口もとへかけて、素朴な笑窪を湛へてゐた。

生のままの直觀が織り込まれた例には、次のやうな例もある。一たん印象が完了してから、話をつづけるといふ方法である。

晉藏がさう云つたのは、おしげの口裏から「ぢア、今夜は、九圓まる〳〵浮いちやつたわけね？」といふ風な、露骨な羨望が、これ以上にじみ出すことを惧れてだつた。先方の可厭がるのは別として晉藏にもおこうにも、この態たらくを見られては恥しい、といふやうな相手は一人もなかつた。

「……」といふやうな注意から、じぶくりだして、結局、可厭だ、の氣持に、なんの變りもないどころか、だん〳〵深刻になつて行くやうにさへ思はれた。――生憎、丁度さういふ最中だつた。

芥川龍之介の觀念的な美しさとは反對に、里見弴の文體は、感覺や感情など、身體のリズムで感得すべきものである。文字に書かれた文章では、珍しい例なので一寸ペースを合はせるのに面くらふけれども、うまく生理機能が一致しさへ

すれば、特有なねばつこさで、からみついて行くのである。

3 谷崎潤一郎とウェルズの文體

感覺的と云へば、その優なるものは、谷崎潤一郎である。次の例は「鶉鷸隴雑纂」—から取つた。

南風の吹く日などはべとべとした汐風のために顔がぬらぬらと脂汗を湧かして頭痛のするやうなことが珍しくない。

……例のボヤボヤとした生ぬるい汐風の吹く日が多く、着物など直ぐべつとりと濕つて來て頭がかつかつと上せてくる。

その他、「べたべた」「ギラギラ」「ねとねと」などいふ觸覺の表現が、特有なあくどさで我々の直感に訴へる。同じ粘つこいことでも、「粘い」「粘り氣がある」「粘着的だ」と表現すれば、それは觀念的な表現であるけれども、「ねばねばしてゐる」といへば、それは直接に感覺表象を表現したことになり、我々も頭で考へる前にその粘り氣を直感するだらう。「ねばねば」といふのは一種の象徴語であつて、説明するよりも象徴し、直接情感に迫る形象となつてゐる。それが觀念的なことばゝ、特に文字で書かれたものに現れる場合に、表現效果を生むことは言ふまでもないだらう。

かかる表現は、谷崎氏の作品に於ては、濃厚な體質を表はすものと云へる。(九)グールモンのいふ「身體で書く」一例である。谷崎氏は、たとへ洗練されてゐるにしても、さうした特色のあることは、他の表現からも云へることである。例へば『盲目物語』から引用すれば、

當時おくがたは二十をふたつみつおこえなされ、四人にあまるお子たちの母御(ははご)でいら

つしやいましたけれども、根がおうつくしいおかたのうへに、ついぞいままでは苦勞といふ苦勞もなされず、あらいかぜにもおあたりなされたことがないのでございますから、もつたいないことながら、そのにくづきのふつくらとしてやはらかなことと申したら、りんずのおめしものをへだてて揉んでをりましても、手ざはりのぐあひがほかのお女中とはまるきりちがつてをりましたから。もつともこんどは五たびめのお産でござりましたから、さすがにいくらか窶れていらつしやいましたものの、おやせになればおやせになるで、その骨ぐみの世にたぐひもなくきやしやでいらつしやることはおどろくばかりでござりました。わたくし、じつに、このとしになりますまで、ながねんのあひだもみれうぢを渡世にいたし、おわかいお女中さまがたをかずしれず手がけてまゐりましたが、あれほどしなやかなからだのおかたには觸つたことがござりませぬ。それに、おんはだへのなめらかさ、こまかさ、お手でもおみあしでもしつとり露をふくんだやうなねばりを持つていらしつたのは、あれこそまことに玉の肌と申すものでございませうか。おぐしなども、お産をしてからめつきりと薄うなつたと、ごじしんでは仰つしやつていらつしやいましたが、それでもふさふさとうしろに垂らしていらつしやるのが、普通のひとにくらべたら鬱陶し

いくらゐたくさんにおありになつて、一本一本きぬいとをならべたやうな、太い、くせのない、どつしりとおもい毛のたばが、さらさらと衣（きぬ）にすれながらお背なかいちめんにひろがつてをりまして、お肩を揉むのにじやまになるほどでござりました。

此の一節を讀んで先づ氣付くのは、昔の年老ひた座頭の訥々たる言葉を寫すのに、特別の工夫をしてゐることで「おこえなされ」「ついぞいままでは」「ないのでござります」「わたくし、じつに、このとしになりますまで」「もみれうぢを渡世にいたし」「お手でもおみあしでも」などの語法から察せられるのであるが、とりわけ座頭の言葉つきを寫すのに、平假名を多く用ひ、切れのわるい長い文をつらねてゐて、風貌、態度を眼前に浮ばしめるものがある。座頭が視覺以外の官能を働らかせて觀察することを述べたものであるが「ふつくら」「しつとり」「ふさふさと」「どつしり」などの象徴語の他に、「にくづき」「手ざはり」「きやしや」「しなやか」「露をふくんだやうなねばり」「うつたうしいくらゐ」「きぬいとをならべたやうな」などの表現

に、盲人獨得の感覺の鋭さを描き出してゐる。全體の調子は作者特有の濃厚な味を持つてゐる。谷崎氏の感覺は、味覺や觸覺に根ざす強い獨得なニュアンスを帶び、何よりも「肌」の色合と「肌ざはり」を感ずるのである。氏の感覺は異常なものであるが、之を異常と感ずるのは、我々にも普遍的な感覺があつて、直接敏感に共感し得る能力があるからに外ならない。感覺による最も根本的な生活に於ては、誰しも同じものがあるに違ひない。之を表現するにしても、生じ觀念的な語を用ひないで、直接に物を象徴する擬音語のやうなものを用ひると、直ちに我々の感覺は共鳴して旋律を始める。その意味で象徴語は原言語と稱してよい。かやうな原言語は現在の生活にも生きてゐる。唯之が文學に用ひられると別な注意を喚起するのである。象徴語はどの言語にもあるが、民族の感覺生活及び之を表現する必要の相違により、その形式なり使用法なりは一つではない。例へば、ねばねば、ねとねと、ねちねちの如き象徴語が英語には無いだらう。ねばつくといふ意味の動詞(stick, adhere)や clammy(ねばついた)の如き形容詞はあるが、直

接感覺に訴へる象徴語は稀である。此種の象徴語で、英語に一番多いのは、擬音語である。擬音語を好んで用ひる作家にウェルズ(H. G. Wells)がある。次の例は、彼の小説から引用したものである。

Flash! It had buried its fangs deep into his arm. (パクッと、牙が腕に深く食ひ込んでゐた)

Over he toppled, face foremost, *splash!* into the pool. (うつぶせにパシャンと水たまりの中に落ちこんだ)

Snap! and it had vanished into night. (パタッといふ間に闇にかくれた)

Drip, came a drop of water upon my face. (ポタリと滴が顔にあたつた)

Bang! went the gun on the left. (ドンと鐵砲の音が左手にした)

"*Trickle, trickle,*" went the flowing light very softly. (チョロチョロと光つた流れが靜かに音をたてた)

Boom··loom···looom··· It came from beneath our feet. (ドン、ドン、ドンと足下から響いてきた)

Crack, crack, crack, the shots came one after the other. (パチ、パチ、パチと續いて銃聲が聞えた)

Something— a wind — a *pad, pad, pad* rushed by. (何か風の音かパクパクとそばをかすめた)

Whizz came a flint. (ヒューッと石がとんで來た)

Smash, and then the *whack* of boards hit hard came from downstairs. (ガチャリ、それから板をはげしく打つパタンといふ音が階下より聞えた)

Flick! something flew over my head. *Flick!* (パクリ何か頭の上を飛んだ。パクリ)

Clang, clang, came up through the grating. (カランカランと格子の外から聞えてきた)

The multitude were beating time with their feet, *tramp, tramp, tramp, tramp*. (同勢は足で調子をとつてゐたドシンドシンドシンドシン)

Clatter, clatter, thud, thud — rode the man with the silver bridle. (ガチャガチャヅシンヅシンと銀の馬轡をつけた人が馬を走らせた)

The place made the visitor's head reel with the *throb, throb, throb* of the engines. (その場所はエンジンのドキンドキンといふ響きで來た人の頭がふらふらした)

かういふ擬音語は、だしぬけに耳朶を打つか、テンポのはつきりしたリズムに

よつて我々の感覺に直接訴へ、運動的な要素に富んでゐる。靜かに奥まつた場所で陰翳を樂しむやうな生活には見られない活潑なリズムである。行動的でadventureに富む生活のリズムである。深みや執拗さよりも、外的な動きのはつきりしたのが特色である。

このやうな表現は、ウェルズのどの小說にも一樣に出てくるものであつて、その印象は情景よりも噪音と行動の慌しさに惹かれる。これは勿論題材に關係したことであるけれども、物を表象する方法が、例へばハックスレーのやうに觀念的ではなく、感覺的であり、しかも谷崎氏の如く感覺に沈潜するのでなく、外向的であり客觀的であるのは、彼の表現の特異性であると云へるだらう。

4　モームの文體

（一〇）モーム(Maugham) の *Red* と題する短篇小說に、船を敍して 'a *bedraggled* object' と言つてゐる。此の形容詞は、雨などで濡れそぼつたことをいひ、だらりと垂れてゐる、薄汚い有樣を述べるものであるが、bedraggle といふ形は be + drag + le より成り、-le は crumple (皺くちやにする)、dazzle (まぶしくする)、twinkle (ピカピカする)、waggle (ブルブル振る)などの語にも加はつてゐて、元來反覆を表はす接尾辭である。bedraggle には元來ズルズル引きづるといふ意味があり、それが見すぼらしい感じを表はす要素になつてゐる。從つてただ wet や moist と言つたのでは感じられない氣持を持つてゐる。bedraggled の如き語を用ひて形容してあると、いきほひその表現法に注意せざるを得ない。その文體としての價値は何であるかを求める氣持になる所以である。そのつもりでモームの他の作品を讀んでゐると、同じ形容詞を使つた例が屢〻出てくる。形容してあるものは「男」("The Moon & Sixpence" 131)「衣服」Ibid. 221, "The Casuarina Tree" 169, "The Trembling of a Leaf" 253, 270)「家」Ibid. 51, 271, "The Painted Veil" 99)「植物」("Circle" 223, "The Narrow Corner" 221) などで、相當思ひ切つた比喩を用ひた場合もある。

例へば「薔薇」のことを述べて

It was all over-blown and bedraggled. It looked like a painted old woman. *Circle* 267. (それはすつかり盛りを過ぎて濡れそぼつてゐた。まるで白粉を塗つた老婆のやうだつた)

とあるのはその一例である。これに頽廢美に對する感覺を認めることができるだらう。理想の Red といふ男を敍して

His mouth was like a scarlet wound. (彼の口は眞紅な傷のやうだつた)

などいふ比喩にも、モームの特異な美感が見られる。それは淸淨な美しさを求めるものでなく、ただれるやうな叉醉ひしれるやうな官能であつて、普通醜と思はれるやうな現實に美を見出すのである。彼はエル・グレコやゴーガンの畫を

愛したが、同じ傾向を表現の中に見出すことができる。 これはたしかにモームの文體を構成する一つの徴表と考へられるだらう。

モームには又、日本畫に見られるやうな繪畫的印象を好んで描く傾向がある。日の暮れた光を敍して

The island now was only a darker mass against the night. The stars were very bright. *Red.* (今はもう島は暗を背に一層暗い塊となつてゐた。 星はとても明るかつた)

と記してゐるのはその一例で、これと同じやうな背景の前にくつきり浮ぶ景色は、彼が好んで描くところである。

…… saw the vague outline of the boat, a little black mass against the black sea. *The Narrow Corner* 26. (船のぼんやりした輪廓が、黒い海面を背景に小さな黒い塊となつてゐるのを見た)

In the distance, darkly silhouetted against the blue sky, was the rugged outline of a mountain. *Ah King*

233. (遠くに青空を背景に暗く影繪になつて、山の峨々たる輪廓があつた)

同じやうな描寫は他にも枚擧に遑がない。殆んどマニールと稱してよい位である。かういふ描き方は、視覺に映じた靜的な畫面を單彩で表現するものであつて、其處に用ひられる語は、色彩、輪廓、背景などを表はすもので、整理された骨法がその特色である。*Cosmopolitans* (Preface 8) にモームは記してゐる「自分の苦心は言ふべきことを超えてはならない少數の語に壓縮することだつた。……一語も冗に使ふ餘裕がない、私は簡潔でなければ濟まなかつた。內容に何の害もなくどれ位副詞や形容詞を抹消できるかを經驗して一驚した。」此の告白は短い單純構造の文で一々實證できるものである。短文は新しい時代の文體であるが、モームが印象的に心がける用意を、彼の文章から見出すことは困難でない。又そのために文のリズムが流露感を缺くことは注意してよいと思ふ。

他にもモームの文體で注意してよい點はあるが、此處に擧げた二つの徴表をどう解釋するかだけを述べよう。モームにはウェルズのやうな象徴語は稀である。表面に現れる感覺的表象よりも、彼は内面的な姿に惹かれる。内面的に観察する角度は、病的な官能のずれを示してゐる。薔薇は咲いた姿を正面から見て美しいのではない。萎れた姿をゆがんだ眼で見て美しいのだ。それを彼の愛用語と稱してよい bedraggled なる形容詞から知るのである。一方彼は場面を印象的な映像にして眺めることを好んでゐる。これも彼の趣味を表はすもので、それが刈り込まれた短文によく現れてゐる。其處には極度に節約した表現が見られる。これも一つの態度であるが、表象を内面的に定着させる表現法と、知的なつつましさに於て一致するものである。彼は官能的ではあるが、官能を官能として端的に表現しない。比喩といふ迂路（デトール）を通る。その方向は前述の通り特異な視點によつてゆがめられ、情緒は情緒そのものでなく、置換された形象となつて現れてゐる。その置換作用に見られる用意が、一方では印象的整理と

いふ特色になつて現れてゐるのである。その視角なり、それによつて觀察される面の透明なことは、官能的なものを描きながら、知的な美しさを示してゐる。モームの小説を文體から見れば、小説といふよりは繪畫に近い。

5　ジョイスの文體

初期のジョイス (James Joyce) に現れてゐる「冷さ」「暗さ」には、ダブリンの風土が大いに影響してゐる。*A Portrait of the Artist as a Young Man* を讀むと「冷い」(cold)「粘つた」(slimy)、濕つた」(damp)、「蒼白い」(pale)、「鈍い」(dull)、「微かな」(faint)、「暗い」(dark)、「灰色の」(grey) の如き形容詞がどんなに多いことであらう。窓から見た外の景色、目を覺ました朝の空氣、寢床のシーツの肌ざはり、——全ては冷々(ひやひや)した感じである。「冷い」空氣、水、暗、日、光、陽光、香、汗。先づさうしたものを肌に感じる。

And he felt the prefect's hand on his forehead; and he felt his forehead warm and damp against the prefect's cold damp hand. That was the way a rat felt, slimy and damp and cold. (そして彼は學監の手を自分の額に感じた。そして學監の冷い濕つぽい手にあたつて自分の額が溫く濕つてゐるのを感じた。それは鼠の手觸りの感じ、ぬら〳〵した濕つぽい冷い感じだつた)

此文には特殊なリズムがある。それは鈍重であるが非常に摑まへ易い(tangible)リズムである。擴大されたやうなリズムである。

アーナル師の說敎を聞いた翌日のスティーヴンが、罪に對する罰を恐れるところを敍したのが次の文である。

He felt the deathchill touch the extremities and creep onward towards the heart, the film of death veiling the eyes, the bright centres of the brain extinguished one by one like lamps, the last sweat oozing upon the skin, the powerlessness of the dying limbs, the speech thickening and wandering and failing the heart throb-

bing faintly and more faintly, all but vanquished, the breath, the poor breath, the poor helpless human spirit, sobbing and sighing, gurgling and rattling in the throat. (彼は死の冷さが手足に觸れ心臟に這ひ登るのを感じた、死の膜が兩眼を覆ひ、頭の明るい中心は一つ一つ燈火のやうに消え、最後の汗が皮膚に滲み、死滅する手足が無力になり、舌はこわばつて言ふことを聞かず、心臟は愈〻微かに鼓動を打ち、殆んど打ちひしがれ、息が、哀れな息が、哀れ無力な人間の靈がすゝり泣き溜息をついで、咽喉の奥でごろごろと音を立てた)

これは決して比喩を用ひてゐるのではない。本當に死の冷たさ、苦しさを五體に感じてゐるのである。全身の神經が迫つて來る死を感じてゐるのであつて、息づまる死の恐怖をあらゆる感覺に感じさせる。ジョイスのいふ靈は、肉と離れた靈ではない。むしろ肉が靈そのものと稱してよい位である。靈の苦しみは、全身に感じられ、罪の苛責は手足の末にまで感覺する。彼の感覺はただの感覺でなく、思想を作り感情を養ふ感覺である。

右の文は、彼が感じた (felt) ことを述べてゐるのであるが、その後に動詞の不定法 (touch, creep) が續き、それから現在分詞と過去分詞及び名詞が現れ、最後に現在分詞 (thickening and wandering and failing; throbbing; sobbing and sighing, gurgling and rattling) が相次いで現れてゐる。これは調子が始めは緩く、後になるほど急調になることを示してゐる。同時に、終に faintly and more faintly; the breath, the poor breath, the poor helpless human spirit と漸層法が用ひてあるので、リズムが高調する。文法的に云へば、これらは全て 'felt' の目的語になるのだが、リズムが急調になり感情が昂揚するにつれて、我々もさういふ論理的關係は忘れて、同じ興奮にまきこまれてしまふ。ただ感覺と感情を深く貫きさへすればよいのである。ジョイスの文は、論理的な脈絡よりも、感覺と感情のリズムに同化することが大切である。從つて「冷たい濕つぽい」感覺から「濡れた鼠」を聯想する場合でも、分離した觀念が聯合するといふやうな機械的なものではなく、感覺そのものが脈動する瞬間に、別なイメヂの形が出來るのであつて、彼の感覺が強いだけに、觀念としては遠く分離したものが、唐突

に見えるほど急激に聯合するのである。彼の場合、例へば「鼠」は感覺されてゐるのであつて、考へられてゐるのではない。感覺の中に全ての觀念が融合してゐるので、それが脈動するにつれて、次々に色んなイメヂが現れて來るのである。

6　室生犀星の文體

室生犀星の『あにいもうと』から一節を取る。

てめえはただの書生ぽで、男に生れついてゐるから遣るだけのことを遣つてしまへば譯はないだらう、だが、さうは旨く、うちの親父のやうにきれいに手前を手前にもどすことは出來ないのだ。伊之はかういふうちにも小畑の手首をいつの間にか摑んで、それをちから一杯に摑み返し逆にもみ上げたりしながら、目になみだをうかべて道樂者といふの

はこんな變な思ひ上りをするものかと思へるくらゐ、親身にぞくぞくした口惜しさに掻きむしられて、その眼のいろは對手に嚙みつかんばかりの口つきと一しよに尖つて行き、小畑は摑まれた分からさきの手をしびれさせ、恐怖以上の境に追ひ詰められたまま、これから先どうなるのか、どういふ手荒なことをされても拒めない自分から、どういふ風に遁げ出したらいいかさへ考へつけないほど、伊之の云ふままになりまるで馬鹿のやうになつてゐた。

除りうまい文章とは云へないが、稚拙な言ひ方に却つて野性的な感覺を與へる。「これをちから一杯に摑み返し逆にもみ上げたりしながら」や「親身にぞくぞくした口惜しさに掻きむしられて」や「その眼のいろは對手に嚙みつかんばかりの口つきと一しよに尖つて行き」と言ふところなど、くどい言ひ方の中に、言葉には表はせない迫力がある。まとまつた觀念や美化されたイメヂになり切らないもの、それ以前のもの、又それ以後に殘つてゐるものが一見まづいこれらの表現に

溢れてゐて、頭だけでは讀めない原始的な要素がある。一たいに室生犀星の文章は、意餘つて語足らずといふやうな表現が少くない。

赤座はかういふごちやごちやした一家の中でむんづりと暮してゐたあの時分の弱つた氣持を……

赤座は半分しよぼしよぼな顏つきになつて……

伊之の顏は明るい動物的なかんしやくで揉みくちやになり……

伊之はにくたらしくもんの顏を見てから、あざわらひをふくんで云つた。

もんは……その肥つた手をぺたりと伊之の顏に引つかけたなと見ると、伊之の眼尻から頰にかけて三すぢの爪あとが搔き立てられると、腫れたあとのやうになり……

などその例であつて、知的な言語(卽ち固有の意味の言語)で整理されないものを含んでゐる。次のりきともん對話のくだりは、「もんは」「りきは」といふ主語と「聞いた」「答へた」「云つた」の繰返しで、長々と引つ張つて行つてゐる。

りきがこの間小畑がたづねて來たことを話したが、もんはその話をゆつくり聞いて別に驚くふうも見せなかつたが、父さんはどう云つて應待してゐたかとそれが氣になるらしく、それだけを急き込んで聞いた。父さんは何にもいはず寧いたはるやうな調子だつたといふと、さう、わるかつたわね、あの人はもう來なくともよかつたのにと云つた。そしてこんどは伊之兄さんと會はなかつたのとたづねたが、りきは會はなかつたらしいと答へた。そりや何よりだわ、あの人に會ふとめんだうなことになつたかも知れないもの、と、もんは安心して横になり、そら眼をして、ちよつといい男ぢやないの母さんと云つた。バカ何をいまになつていふのだ、子供まで背負ひこませた男のことをまだほめてゐるなんて、いい加減にするがいいとりきは苦々しく云つたが、もんはあの男からあとに男ができてもあんなにあるたけのものを好きになれる男なんてなかつた。小畑には有せるものでも他の男には有せないものがあり、小畑よりずつといい男であつてもそのいい男すぎるのが氣障だつたりして、ちやうどいい頃加減の小畑とくらべるともの足らないと云ひ、けれども小畑が來たつて一しよになつてやらないさ、好きなのは考へてゐる時だけで會

つたらあたしにはもう生ぬるい男になつてゐるからと笑つて云つた。

もんとりきの氣持を述べた箇所は、

別に驚くふうも見せなかつたが
それが氣になるらしく
安心して横になり
苦々しく云つたが
笑つて云つた

であるが、いづれも印象的な描寫ではなくて、ありのままの說明である。例へば、「苦々しく云つた」や「笑つて云つた」を「苦り切つた」「笑つた」とは言はない。まして「顏をしかめた」「笑ひ顏を見せた」とは述べないのである。印象よりも事實を云ふのに急である。印象はむしろ二人の對話の中から汲み取れるのである。さ

さういふ點から、自分の描く心像にこだはらないで、人物や事件を客觀的に敍し、感覺や感情はさういふ外的なものから直接に感じさせるといふ特色が見られるのである。

7 メルヴィルの文體

溢れるばかりの感性の逞しさは、アメリカの作家メルヴィル (Herman Melville) に現れてゐる。次[二一]の例は傑作 *Moby Dick* より取つた。

…the ship *groaned* and *gasped*. Modern Library 358. (船は呻きあへいだ)

…*tied up* and *twisted*; *gnarled* and *knotted* with wrinkles; *haggardly firm* and *unyielding*. 532. (捻り上げ捩ぢ曲がつてをり、皺で節くれ立ち、窶れながらテコでも屈しなかつた)

のやうな對句法や、

‥a *brown* and *brawny* company, with *bosky beards*; an unshorn *shaggy* set 29.（色の黒い筋肉逞しい一群で、ムシャクシャの鬚を生やし、剃刀を入れないモシャモシャの連中）

…a *boggy, soggy, squitchy* picture truly 11.（ほんとにグチャグチャした繪だつた）

…hammock clothes all *rumpled* and *tumbled* 125.（ハンモックの衣類がすつかりクシャクシャになつてゐた）

の如き類音法に、飽くなき感覺の強さが示されてゐるが、それが壯大美を表はす場合には、

…*mightiest* animated *mass* that has survived the flood; *most* monstrous and *most* mountainous! 62.（大洪水このかた巨大この上もない生き物であり、巨怪きはまる、山なす動物）

のやうに頭韻法にm音を使用してゐる。海洋の景觀を敍した文は、視覺及び聽覺を通じて表象したもので、多彩なイメヂと優美なリズムが結びついて素晴らしい敍述となつてゐる。

It was while gliding through these latter waters that one serene and moonlight night, when all the waves rolled by like scrolls of silver; and by their soft, suffusing seethings, made what seemed a silvery silence, not a solitude; on such a silent night a silvery jet was seen far in advance of the white bubbles at the bow. Lit up by the moon, it looked celestial; seemed some plumed and glittering god uprising from the sea. 231.（かういふ海面を辷つてゐると、或る靜寂な月光の夜、波が全て銀の卷物のやうにうねり、その靜かな漲つた波騷で孤獨ではなく銀の靜寂と見えるものを作つてゐた。そんな靜かな夜に船首のかなた白い泡の立つ先の方に銀のやうな噴出が見られた。月に照らされてそれは聖なるものに見え、海面から羽毛をつけて輝く神が現れたのかと思へた）

以上の例は、直接リズムに現れた感覺であるが、(二)具象的な形象にも、感性の强さは現れてゐる。

The warmly cool, clear, ringing, perfumed, over-flowing, redundant days, were as crystal goblets of Persian sherbet, heaped up — flaked up, with rose-water snow. 123. (暑からず寒からず、晴れた賑かな香り高い、色彩濃厚な日々は、まるで透明な盃にもつたペルシヤの清涼飲料に薔薇水の凍つた雪がつもり重つたやうであつた)

はその一例であるが、特に視覺的な形象の生彩なことは次の例でうかがはれる。

As its name imports, it (=plum-pudding) is of an exceedingly rich, mottled tint, with a bestreaked snowy and golden ground dotted with spots of the deepest crimson and purple. It is plums of rubies, in pictures of citron. 415. (その名にいふ如く、この鯨肉はとても豐かに色とりどりで、地は雪と黄金の縞模樣であり、これに濃い紅と紫の斑點がある。枸櫞の繪に畫いたルビーのすもゝである)

とりわけ目立つのは「光」と「白」のイメヂである。

…the appalling beauty of the vast milky mass, that lit up by a horizontal spangling sun, shifted and glistened like a living opal in the blue morning sea. 258. (水平線を出たばかりの燦然たる太陽に照らし出されて、青い朝の海に、生きたオパルの如く位置を變へては光る巨大な乳色の塊の驚くべき美しさ)

はその例である。メルヴィルのもう一つの特徴は、かやうな感性面が、ぐんぐん深くつきつめられて、遂に觀念的なものに到達してゐる點であるが、そのことは今述べないにしても、感性の飽くなき強さは、淡白なものを好む我々日本人には、とてもついて行けない程で、むせ返るばかりの力を持つてゐる。

8　ロレンスの文體

メルヴィルの感覺には、明るい逞しい健康的なものがあるが、次に述べるロレンス(D. H. Lawrence)のは又異つた特色がある。

ロレンスの自敍傳であるといはれる小說 *Sons and Lovers* には、不思議と人物の立體的な性格が明かでない。此點は、既述のハックスレーとは對蹠的な點で、ハックスレーは『ロレンス書翰集』の序文で斯う言つてゐる。

心理的實在は、物理的實在と同じやうに、我々が精神的に又肉體的に組立てたものである。常識は、我々の獨立な感覺が提供する實證に則つて、物理的實在が固體のテーブルや椅子、石炭の塊、水、空氣のやうな物から成つた世界を自明のこととしてゐる。科學は、その

研究を一歩進めて、かやうな實在の見本は「實は」異つた元素から成る原子で出來てをり、原子は更に種々の型式に排列された多數のエレクトロンやプロトンから成つてゐることを發見する。心理的實在に關しても同樣に常識的實利的な概念があり、又非常識的な概念がある。通常の實際的目的には、我々は人間を性格を持つた動物であると考へてゐる。しかし人間の生態の分析も進めると、人間は性格を有することを止め、心理的原子の集合となつて現れる。ロレンスは(安心してをれるほど卑近な現象の背後に在る別な世界を常に知覺できる人ならば當然なことだが)心理の非常識的な見方を採つた。

ハックスレーには、人間は性格を持つた動物だが、ロレンスは人間を心理的原子の集合と考へてゐるといふのである。ハックスレーが、副詞の特殊な用法で、人間の性格付けに特別な工夫をしてゐることは、既に述べた通り(一三三頁)である。ロレンスには、此種の副詞は大切な要素ではない。ロレンスの *Sons and Lovers* を讀んで、直ぐに氣が付くことは、次の引用にあるやうな、敍述語の用法である。

Presently the lad stood in front of her, *wildly excited*. 研究社版 5. (間もなく若者は氣狂ひのやうに興奮して彼女の前に立つた)

Mrs. Morel, *very tired*, and *sick of his babble*, went to bed as quickly as possible…9. (モレル夫人は疲れ切つて彼の饒舌にうんざりし乍ら、出來るだけ早く寢に就いた)

Gertrude Coppard had watched him, *fascinated*. 12. (ガートルード・コッパードは魅惑されて彼を見まもつてゐた)

"How do you fancy your son in this!" he said, *enraptured*, showing her the suit. 73. (「子達に之を着せたらどんなでせう」と、彼は衣類を彼女に見せながら、恍惚として言つた)

Cold, and *unhappy*, and *silent*, they huddled together on the platform. 109. (寒く不快で口も利かず、彼等は步廊にかたまつてゐた)

"But I love to touch them," she replied, *hurt*. (彼女は傷つけられて「でも彼等に觸るのは好きです」と答へた)

…only floundered tumultuously back again, *wild with joy*. 295. (…は喜びに有頂天になつて、騷ぎながら元の場所へ踠いた)

He turned on her, *white, his eyes furious*. 325. (彼は蒼い顔をして眼を兇暴に光らせながら、彼女の方へ向いた)

He pushed the tumbled hair off his forehead, *his eyes full of pain and fire*. 345. (彼女は亂れ落ちる髪を額から押しやつた、眼を苦痛と情火に光らせながら)

Fanny, *her long cheeks flushed, her blue eyes shining*, was gazing at him. 361. (ファンニーは、長い頰を火照らせ、青い眼を輝かせながら、彼を凝視めてゐた)

かやうな敍述語で述べてある内容は、一般心理過程か單純感情のやうなもので、別に人物の性格化をする程のものではない。かういふ敍述語によつて、一般に人間の心的過程を知ることはできるが、人物の個性を明かにするには足りない。要するに、人間が「喜んだり」「興奮したり」「魅惑されたり」するに過ぎない。中心體のない人間一般といふやうなものである。これがハックスレーのいふ原子的な要素から出來た人間なのであらう。

しかしロレンスは、ハックスレーの批評から察せられるやうに、科學的に觀察したのかどうか疑問である。彼はむしろ異常な神經でそれを感じたのであらう。彼は、科學的な知能よりも、衝動的な本能によつて生命そのものを感得してゐるのである。本能の觸角でさぐり當てた世界は、時間も無ければ歴史も無い、性格も無ければ文化も無い暗の世界である。人生は影である、夜と死と靜とが存在である。「生きることは存在しないことだ。」

これは *Sons and Lovers* のポールが考へたことであるが、其處まで行きつくのには、どういふ心的體驗をしてゐるか。次の引用文を、形容詞に注意しながら、讀んで頂きたい。

Later it began to rain. The pine-trees smelled very strong. Paul lay with his head on the ground, on the dead pine-needles, listening to the sharp hiss of the rain—a steady, keen noise. His heart was down, very heavy. Now he realized that she had not been with him all the time, that her soul stood apart,in a sort of

horror. He was physically at rest, but no more. Very dreary at heart, very sad, and very tender, his fingers wandered over her face pitifully. Now again she loved him deeply. He was tender and beautiful.

"The rain!" he said.

"Yes—is it coming on you?"

She put her hands over him, on his hair, on his shoulders, to feel if the raindrops fell on him. She loved him dearly. He, as he lay with his face on the dead pine-leaves, felt extraordinarily quiet. He did not mind if the raindrops came on him: he would have lain and got wet through: he felt as if nothing mattered, as if his living were smeared away into the beyond, near and quite lovable. This strange, gentle reaching-out to death was new to him. 384.

(程經て雨が降り出した。松の樹が強い香をした。ポールは地上に、枯れた針葉に頭を載せて横になつた、雨のきつい音——止まない鋭い響に聽き入りながら。彼のこころは鬱いで、とても重かつた。彼は彼女が始終彼と一緒にゐたのでないことを、彼女のたましひが離れてゐたことを、一種の恐怖のうちに悟つた。彼は肉體的には安息してゐたが、もう居なかつた。こころはとても憂鬱で、物悲しく、情をこめて、彼の指は彼女の顔を哀れん

で撫でた。彼女は又再び彼を深く愛した。彼はやさしくて美しかつた。

「雨だ」と彼は言つた。

「えゝ――かかつて？」

彼女は手を彼の上に、彼の髪に、兩肩に置いて、雨滴が彼にかかつたかどうか觸つてみた。彼女は心から彼を愛した。彼は、顏を枯れた松葉に載せて横になりながら、異常に落ちついた感じがした。彼は雨滴がかかつてもかからなくても關はなかつた。彼は横になつたまま濡れつくし度かつた。彼は何もかまはない、彼の生存が蹈みつぶされて、近くてなつかしい彼の世に入るやうな感がした。此の不思議に靜かに死へ手をさしのべるのは彼にとつて珍しいことであつた」

此文に敍べてあるのは、靜かな物憂い哀しい感情である。生きること――卽ち生存しないことへの哀愁である。人間及び人間の生活を哀れむ切ない氣持である。その氣持が如何に五感を通じてひし〳〵と感ぜられることだらう。全文のリズムに、沈痛なペーンスが溢れてゐる。此の感情は何處から出てくるの

であらう。

先づ此處に述べられた感覺と感情が、きはめて單純なものであることは、用ひられた形容詞や副詞などから察せられることである。松の樹の香り、雨の音、重いところ、やさしい氣持、雨滴の觸覺、など。それらを感じて行く生のリズムは、五感に響く現象の姿と、靜かに内的なものへ沈潛して行く感情との交錯によつて、しのびやかな敍情的調べを奏でてゐる。面が異り深度の異る感覺と感情が、全體として生の靜かなリズムに統一されてゐる。

Sons and Lovers (1913) はロレンスの初期の作であるが後期に屬する *The Woman Who Rode Away* (1928) を分析してみよう。

結論をさきに要約すると、

一、リズムはなめらかであるが起伏に富んでゐること

二、内面に執拗に集中する傾向のあること

が二大特色として擧げられると思ふ。これは必ずしも分離して考へられるも

のでないので、一括してこれを表はしてゐる語法を順次說明して行かうと思ふ。

イ、同じ語形を繰返して行くうちに漸次印象の强化されて行く例

There was no sign of anything, save the *deserted* mine, the *deserted works*, and a bunch of half-*deserted* miners' dwellings. 三省堂版 3.（何物の兆もなかつた、人の居ない坑山、人の居ない工場、大方人の居ない坑夫小屋のほかは）

And in his battered Ford car her husband would take her into the *dead*, thrice-*dead* little Spanish town forgotten among the mountains. The great, sundried *dead* church, the *dead* portals, the hopeless covered market-place, where, the first time she went, she saw a *dead* dog lying between the meat stalls and the vegetable array, stretched out as if for ever, nobody troubling to throw it away. *Deadness* within *deadness*. 2.（夫は潰げたフォード車に彼女を乘せて山中に忘れられた死んだ、死に切つたスペイン町に連れて行くのだつた。大きな陽に乾いた死んだ教會、死んだ入口、絕望の遮蔽した市場、其處へ彼女が始めて行つた時、肉店と野菜の列の間に死んだ犬が一匹ころがつてゐるのを見た、誰も取り捨てる者がなくて、いつまでも延び切つてゐるのを。死の中の死）

ロ、形象が次第に具象的に强められる例

Her little *wiry*, *tough*, twisted, brown-eyed husband was fifty-three, a man *as tough as wire*, *tenacious as wire*, still full of energy … 3. (彼女の小さい屈强な頑丈な身體の曲つた茶眼の夫は五十三歳だつた、針金のやうに頑丈で、針金のやうに執拗で、まだ精力の溢れた…… 男だつた)

He never quite got over his dazzled *admiration* of her.…… / He *admired* his wife to extinction, he *admired* her body, all her points. 3. (彼は彼女に對する眩惑的な讃美をおさへることはできなかつた。 ……一彼は妻を死ぬほど讃美し、妻の身體を、全ての點を讃美した)

All was *silent*, *mountain-silent*, cold, deathly. 22. (全ては靜寂だつた、山のやうに靜寂で冷たく死のやうだつた)

…she seemed at last to feel her own death ; her own *obliteration*. As if she were to de *obliterated* from the field of life again. 44. (彼女は自分の死を遂に感ずるやうだつた、彼女の滅亡を。恰も生の世界から再び滅亡する運命であるかのやうに)

Yet there was such a glitter in his eyes, and an unrelenting sort of *hate* came out of his words, *a strange*, *profound*, *impersonal hate*. 55. (まだ彼の眼にはあのやうな閃きがあり苛責して容赦

のない憎惡が彼の語から漏れた、奇妙な深刻な非人格的な憎惡が）

And in their black, empty concentration there was *power, power intensely abstract and remote, but, deep, deep to the heart of the earth, and the heart of the sun.* 66.（黑い眼が呆然凝視する中には力があつた、強く抽象的で遠いが、深い、地の中心まで、太陽の中心まで深い力が）

此例は他にも多數あつて、病的な息づかひの短かさを示してゐる。たしか晩年の芥川龍之介にも、之に似た語法があつたと思ふ。

八、印象の集中的な語法

A green valley, with a river, and trees, and clusters of low flat sparkling houses. *It was all tiny and perfect,* three thousand feet below. Even the flat bridge over the stream, and the square with the houses around it, the bigger buildings piled up at opposite ends of the square, ... *There it was, all small and perfect,* looking magical ...... seen from the mountains above. 24.（綠の谿川があり、木があり、低い平たいきらめく家々がある。三千呎足下は全て小ぢんまりとまとまつてゐた。流れにかかつた平たい橋でさへ、その周りに家々のある四辻の廣場、廣場の兩側に積み重つた大きい建物……。山の上から見ると魔法的に見えて、全體小さくまとまつた眺めがあつた）

They were anxious, terribly *anxious,* and fierce. …… their ferocity was ready to leap out into a mystic exultance, of triumph. But still they were *anxious.* 66. (彼等は焦つてゐて、おそろしく焦つてゐて、兇暴だつた……。彼等の兇暴は何時でも神祕的な法悦、勝鬨の、に飛躍しさうだつた。がしかし彼等はまだ焦つてゐた)

二、視野の縮小を示す例

As she climbed, the trees shrank and the trail ran through a thorny scrub …… Then these flowers lapsed. *She was nearing the pine trees.* 11.(彼女が登るにつれて、樹々は萎え蔓草が棘のある矮木の中を徊つてゐた。……それからかういふ花が無くなつた。彼女は松の木に近づいてゐた)

Huge shadows came down from steep rocky slopes. *Water was rushing.* 20. (巨大な影が險しい岩のスロープから落ちた。水が奔流してゐた)

Why she did not hurl herself down, and have done! *The world was below her.* 24. (何故彼女は身を投げておさらばにしなかつたのか。人里は彼女の足下に在つた)

It seemed to her they were climbing to the roof of the world. *Beyond against heaven were slashes of snow.* 23. (彼女には彼等が世界の屋根に登つてゐたやうに思へた。遙か天涯のかたたに

切り口のやうな雪があつた)

ホ、官能的な觀察の例

…yellowing aspen trees whose white trunks were round and suave *like the white round arms of some woman.* 13. (蒼ばむトネリコの木、その白い幹は何處かの女の白い圓い腕のやうに圓くてしなやかだつた)

She noted *this long black hair* with a certain distaste. 15.(彼女は此の長い黑髮を或る嫌惡の情で注目した)

She met the eyes of the young man, and in their bright black inscrutability she saw a fine spark, *as in a snake's eye,* of derision. 18.(彼女は若者の眼に會つた。そのキラキラした黑くて底の知れない中に彼女は蛇の眼にあるやうな侮蔑の強い閃きを見た)

They rested for a time with a great slant of living rock in front of them, *like the glossy breast of some earth-beast.* 23. (彼等は大きな天然石の傾斜を前にして暫時休んだ、その岩は土獸のつやつやした胸のやうだつた)

…his red and orange-yellow sarape was covered with curious black markings, *like a leopard-skin.* 26.(彼

の赤いオレンヂ色の衣服は豹の皮膚のやうな妙な黒い斑點があつた）

感覺や印象がさきに立つので、どんなものでも同じ感じで見据ゑようとする。そのうちに印象が段々内面的な意味を持つやうになる。但しこれが形而上的なものにまで達してゐるかどうか疑問である。「死の中の死」と言つても、抽象的に深くなつては來るが、やはり肉體的な眼で見据ゑてゐる。病的な息の短かさのために、一應全體的な印象を述べてから、次第に之を具象化して行く。宗教詩人ペギの文體にもこれに似たものがあつて、それを解釋するフォスレル及びシュピッツェルの考へ方は、此處に述べたのと一致する所があつて興味深い。Cf. Spitzer: *Stilstudien*, II PP. 301—305.）執拗に印象の本體をつきとめるのであるが、その行き方には切迫した息づかひと、強い凝視がある。靜かにのびのびと物を眺めるといふ餘裕が見られない。常に瞳孔が縮小したり擴大したりして、同一の平面や廣がりに止つてゐない。「彼女は松の木に近づいてゐた」や「水が奔流してゐた」といふの

は、近景を述べたもので「人里は彼女の足下に在つた」や「遙かかなたに切り口のやうな雪があつた」は遠望であつて、兩方の場合に共通なのは同一平面の上を視點の方向が變化するのでなく、遠近の差が轉換するのである。眼の底から凝視しながら、遠近を急速度に調節する。遠望といひ近景といひ、ピントの合せ方は、急激に深みへ入つて行く合せ方である。內面的な方向へ凝視する傾きがある。感覺の此の凝視は、形而上的なものを觀念で作つて行くものではないと思ふ。感覺の眼で見貫く凝視であると思ふ。それは、凝視された物よりも、凝視への緊張が、目立つてゐて、其處に生理的なものを感ずるからである。「女の腕」に木の幹を譬へたり、眼の閃きに「蛇の眼」を想つたり、「長い黑髮」を嫌惡の情で見つめたりするのは、作者にとつて最も直接な感覺ではないかと思ふ。從つて、これは時間的な歷史ではなく、むしろ空間的な感覺像である。

ロレンスの文も短いのが特色であるが、殊に *Sons and Lovers* は短文が多くて、好ましい文章になつてゐる。(二三)東田千秋氏がロレンスのリズムを、すぐれた感受性で

とらへてゐる。それによると、ロレンスのリズムは「生の流れ」といふ內實に叶つたリズムである。卽ち彼の內的生命がそのままふさはしいリズムとなつて表現されてゐる。彼の英語は傳統的な「文體」を脫して、新しい生命に卽した表現を生み出してゐる。それは口語に近く、魅惑的な美を持つたもので、內心の動きを如實に表はすのであるが、特に彼の「感じ方、生き方、愛し方」を言葉に表はす時が最もすぐれてゐる。かう東田氏は述べて、彼のリズムを連續 (*continuity*) と均衡 (*balance*) の方から特徴づけてゐる。

Afterwards she felt a great soothing languor steal over her, her limbs felt strong and full of languor, and she lay on her couch listening to the sounds of the village, watching the yellowing sky, smelling the scent of burning cedar-wood, or pine-wood. So distinctly she heard the yapping of tiny dogs, the shuffle of far-off feet, the murmur of voices, so keenly she detected the smell of smoke, and flowers, and evening falling, so vividly she saw the one bright star infinitely remote, stirring above the sunset, that she felt as if all her

senses were diffused on the air, that she could distinguish the sound of evening flowers unfolding, and the actual crystal sound of the heavens, as the vast belts of the world-atmosphere slid past one another, and as if the moisture ascending and the moisture descending in the air resound like some harp in the cosmos. *The Woman Who Rode Away.* (後で彼女は大きな和らげる倦怠が身體に忍び寄るのを感じた、彼女の四肢は強く弛み倦怠に充ちる感じがした、それで彼女は床に横たはつて村の物音を聽き、黃ばむ空を凝視め、燃える杉の木、又は松の木の香をかいでゐた。　はつきり彼女は小犬の吠聲、遠くの人足の引きづる音、人聲の囁きを聞き、鋭く彼女は煙の香と花と日の暮れるのをみわけ、鮮かに彼女は明星が一つ涯しない遠くに、入日の上にまたたくのを見たので、まるで五感が空中に廣まるやうな氣がし、夕の花が開く音を聞き分け、世界の大氣の廣い帶が互ひにすべり過ぎる時の、天體の實のままの透明な音を聞き分けられ、空氣中を昇る濕氣と降る濕氣が宇宙の竪琴のやうに響きわたるのを聞く心地がした)

それぞれの句が均衡を保つて、全體が大きな調和、卽ち宇宙(cosmos)を想はせる調和を示してゐる。　此の調和は立體的な調和よりもむしろ音樂的な調和である。

それがあたかも交響樂のやうな大きな調べを奏でてゐる。
これは連續と均衡をよく表はした一例として、東田氏の引用した例である。
短文に特色のあるのは次の例であらう。

Paul went out to play with the rest. Down in the great trough of twilight, tiny clusters of lights burned where the pits were. A few last colliers straggled up the dim field-path. The lamp-lighter came along. No more colliers came. Darkness shut down over the valley; work was gone. It was night. *Sons and Lovers*, 研究社版 83.（ポールは他の者と遊びに出た。たそがれの大きな凹地では、竪坑のあたりに小さな燈光のかたまりが燃えてゐた。二三人の坑夫が薄暗い野道をはなればなれに歩いて行つた。點燈夫がやつて來た。もう坑夫は來なかつた。暗が盆地を閉ざした、仕事は濟んだ。夜だつた）

此の文章には別に連續もなければ均衡もない。意味上から云つて、最初の Paul went out to play with the rest. で事實を說明し、最後の It was night. で情景を說明する。中

間は遠近の點景である。それが强ひて脈絡をつけないで自然に描かれてゐる。ささやかな事物をささやかに述べて行く。無理のないなだらかな書き方で、靜かな氣持を想はせる。

これは確かに前世紀には見られなかつた文章である。平明な構文であり、單純な動詞の用法である。

これは、おだやかな息づかひのそのまま現れた文章であるが、脈々と生の鼓動を强く感じさせるのは次の例である。

Then softly, oh softly, so softly that she seemed to faint away, his lips touched her cheek, and she drifted through strands of heat and darkness. *The Rainbow*, 281. (それから柔かに、まあ柔かに、彼女が氣を失ふかと思はれるほど柔かに、彼の唇は彼女の頰に觸れたので彼女は熱と暗の撚の中を漂つた)

And she slept deeply, sweetly, oh, so sweetly. Ibid., 232. (それから彼女は深く、樂しく、まあ、とて

緊張した息づかひが、動的なリズムを吐き出して行く。 それはむしろ均齊を破るリズムであつて、我々はこれを出來上つた形で觀察するよりも、リズムの動きに歩調を合はせて、高鳴る鼓動に耳を傾けなければならない。 此處に擧げたやうな例は、ロレンスのあちこちに散見するもので、全身で書いた文字といふ形容が何よりもあてはまるのである。

憂鬱感と單調な氣持は次の例で直感的なリズムを作つてゐる。

She slipped from her seat and went vaguely along the path —— vaguely. It was a long way home, she had an idea that she must walk for the rest of her life, wearily, wearily. Step after step, step after step, and always along the wet, rainy road between the hedges. Step after step, step after step, the monotony produced a deep cold sense of nausea in her. *The Rainbow*, 462. （彼女は席をはずしてぼんやりと路を歩

いた――ぼんやりと。それは長い歸り道だつた。彼女はこれから先疲れて、疲れて歩かねばならないと考へた。一步一步、一步一步、いつも籬の間の濕つた雨の道を。一步一步、一步一步、單調が彼女の心に深い冷い嫌惡感を生み出した）

生の倦怠が物憂いリズムを作り出してゐる。これは考へられたことでなく、感じられたまま――それは生のままで粗雜なといふ意味ではない――が文字に脈を打つてゐる例である。既述（八〇頁）の如く、シュピッツェルによると、ペギは「生の流れ」を表現しようと欲しながら、結局理知的な文體を作つてしまつた。それほど「生命に卽した表現」は困難なのである。其事を思ふと、ロレンスの文體はたしかに一つの驚異である。彼は本能の語、感覺の語に高い價値を作り出してゐる。*The Rainbow* といふ小說などを讀むと、彼の生理が客觀的な價値を創造してゐると見られる。生きるまま、感ずるままに表現するといふことは決して容易な業ではない。其事はジョイスにも云へるであらう。

ハックスレーの文體には構成が目立つてゐるが、ロレンスのは表面的な構成よりも構成のない直觀が特色になつてゐる。ハックスレーは概念的であるが、ロレンスは感性的である。此の二人は色々な點で對蹠點に立つてゐる。(三)ロレンスがハックスレーに宛てた手紙に「君の言ふ内向型や外向型は「意識又は注意の方向に適用される語であつて、個人的本質の何ものにも適合しない」と記してゐる。此の語はそのまま二人の文體を比較する場合にも當てはまると思ふ。廣がりと深さといふ點に、それぞれの特色があると思ふ。ハックスレーの文體には廣がりがあり、ロレンスの文體には深さがある。

一、Cassirer: *Philosophie der symbolischen Formen*, I, Bruno Cassirer, Berlin, 1923.

二、Weisgerber: *Die Stellung der Sprache im Aufbau der Gesamtkultur*, Wörter und Sachen XV. Band, 2 Teile, 1933 - 1934.

三、Delacroix: *Le langage et la pensée*, Félix Alcan, Paris, deuxième édition 1930, P. 414.

四、Cf. Ibid., P. 418.

五、Jung : *Psychologische Typen*, Rascher, Zürich / Leipzig, 1937.

六、Spranger : *Lebensformen*, Max Niemeyer, Leipzig, siebente Auflage 1930.

七、Tadao Yamamoto : "Genuine" and "Deliberate" in Aldous Huxley（英文學研究、第十九卷、第四）

八、Müller-Freienfels : *Persönlichkeit und Weltanschauung*, Teubner, Leipzig / Berlin, zweite Auflage 1923.

九、Gourmont : *Le problème du style*, Préface P. 9.

一〇、山本忠雄、「モームの文體」（英語教育、第三卷夏季特輯號）

一一、同「*Moby Dick* に現れた明暗と色彩」（英語青年、第七十一卷第七號）

同「*Moby Dick* の文體論的研究」（廣島文理大英語英文學論文集、第一輯）

一二、Chiaki Higashida : *On the Prose Style of D. H. Lawrence*（英文學研究、第十九卷、第四）

一三、*The Letters of D. H. Lawrence* ed. by A. Huxley.

三　文體論の實踐法

文體論の實踐法は、個々の對象そのものによつて規定される。いつも同じ方法を用ひては、對象の本質を逸する處がある。個々のものに卽して個々の價値を見出すには、それぞれ方法を變へなければならない。その方法が見つかつた時は、半ば實踐は完成したと稱してよいのである。

大體の方法は次の如く分けられる。

一、外延的(extensive)方法

これは語法を分析して取出し、比較對照する方法で、細分して

1. 量的調査（統計によるもの）

2. 質的調査（對比によるもの）

とする。統計法による量的調査は、例へば波多野完治氏[一]の試みてゐるもので、frequencyを調べて、大體の傾向を知るやり方である。對比法による質的調査とは、例へば具體的な意味を持つた語と抽象的な意味を持つた語を對比して、意味の特質から思考形式を求める如き方法である。前者は率の大小から、後者は對比の內容から進むが、いづれも比較對照を原理とする。

A　比較の對象

1. 作家の異る語法

これは或る語法について一作家の全部の作品に目を通すのである。

2. 一作家の異る作品

例へば、ハックスレーの小說と隨筆、ロレンスの初期の作品と後期の作品、と

いふ風に異つた作品を一作家から取つて調べる。

3. 一語法についてA作家とB作家

これは或る語法を異つた作家に於て比較するのである。その際、内容又はテーマの等しいものを取つてもよいし、さうでなくてもよい。例へば、海洋の描寫法をコンラッドとモームから取つて、文の構造を比較するのは前者の場合であり、體驗話法の例をオーステンとゴールズワージーに就て比較するのは後者の場合である。

B 比較すべき徴表

1. 全作品に亙つて frequency の大きい語法

例へば、メルヴィルの 'whiteness' の如き名詞、ロレンスの 'soft' といふ形容詞 (cf. They were *soft*, blind kisses, perfect in their stillness. Yet she held back from them. It was like strange moths, very *soft* and silent, settling on her from the darkness of her soul. *Women in Love*. 195) など。これには作家の愛用するものと、機械的に癖として使用するもの

が分けられる。

2. 同一箇所に反覆使用される語法

例へばハックスレーの It was like a Sherlock Holmes story, immensely *elaborate*, too *elaborate*. のやうな例である。

3. 意味又は語形の特異な語法

モームの 'bedraggled' や、ハックスレーの 'parenthetically,' 'congenitally,' 'melodramatically,' 'enigmatically,' の如き副詞など、意味か語形で特別に注意を惹くもの。

4. 文の長短及び構造

メルヴィルやラスキンは長い文を好み、ロレンスやモームは短い文を好む。さういふ長短をしらべ、同時に單純構造か否かなど文の形式(接續詞に注意する)をも調べる。

5. 品詞、特に名詞・形容詞・動詞・副詞の如き形式これは意味內容の如何に拘らず、どういふ品詞に特色があるかを調べる。例へば波多野氏(二)によると志

賀直哉は名詞を好み、谷崎潤一郎は形容詞及び動詞を好む。

6. リズム

頭韻、脚韻、母音の長短及び音質、子音の性質、アクセント配列などを部分的に分析して比較する。象徴語なども問題になる。これは次の形象と密接な關係があつて、切り離せぬことが多い。

7. 形象（イメージ）

波多野氏[三]によると久米正雄は視覺型である。例へば色彩語にその特色が現れてゐる。メルヴィル[四]がやはり視覺的である。一般に感覺的描寫が多い中でも、特に明暗及び色彩の感覺が鋭敏である。ロレンスは觸覺型である。先づ皮膚の感覺で形象を作つてゆく。場面の構造よりも感覺でさぐり當てる形象の方がすぐれてゐて詩的である。

二、內延的(intensive)方法

これは語句を取出して分析し、他の語句と比較するのでなく、選ばれた語句そのものの內的な價値を直觀する方法である。多數の例から歸納的に結論を出すのでなく、直接作家の意味聯關に透徹する方法である。前者を相對的な方法とすれば、これは絕對的な方法である。前者は心理學的な方法であるがこれはフォスレルなどの美學的方法に屬する。

直觀すべき徵表は、前の方法の場合と異つたことはないが、それらの徵表に就て、表面的な特色や心理的メカニズムや素質を比較するのでなく、直ちに創作者の本質に迫るのが此の方法の特徵である。此の方法を實踐するには、シュピッツェルも述べてゐるやうに、作品を反覆精讀して、全體印象をとらへる工夫を

し、同時に意味の中心點をつかまへる志向力を働かせなければならない。それには特異な意味(内容・形式)の廣がりよりも强さ深さを掘下げることが大切である。モームの 'bedraggled' に彼の美感の本質をさぐり當てるとすれば、それは一例である。ロレンスの 'soft' に彼の感覺の本體を求めるとすれば、これも一例である。[六]小林英夫氏のしたやうに、芥川龍之介の筆癖に彼の生活態度を見出すのも一例である。特異な語法の奥に何か深いものがあるとの自信を以て、感覺を鋭くし知性を働らかせて考へぬかねばならない。

此の方法に關して、これ以上具體的なことを述べるのは困難である。それはかやうな實踐をする場合の心理の働らきは 'sense' とか「勘」とかいふ語で呼ばれるやうに、その本當のメカニズムがまだ分らないからである。これで此處では實踐方法を說明するよりも、實際の經驗を擧げて例證としたい。

私はメルヴィルのモービー・ディクに現れた -ness のついた名詞例へば 'whiteness' に着眼し、これが彼の觀念的な强さを表現する語形であると言つた。その意味

は、原始的な感性面を見貫くところに絶對的な直觀が生れ、表象は單なる表象であることを止めて遂には形而上的な意味に達することが、此の名詞形による表現で知られるといふのである。此の解釋は全ての人の同意を得てはゐない。しかし少くとも一人――即ちヴェーベル[八] (Walter Weber) は同じ解釋らしい。彼は「かかる語形が特に用ひられてゐるのは、神祕的氣分の朦朧性と無限性を表現すべき時である」と述べてゐる。かやうな意味に對する重點のおき方は異つてゐるが、兎に角解釋の内容そのものは等しい。此の語形を見出し、それの價値を求めて行つた過程を紹介しよう。はじめざつと一讀した時には、此の語形の特異性に氣付かなかつた。二度目讀んだ時は、-ness のついた名詞が多いなと感じた。三度目には 'such is the *endlessness*, yea, the *intolerableness* of all earthly effort' の如き用法に特異なものの存することを豫感し、それからは注意して同じ語形が出るたびに印をつけて行つた。それから改めて全部について、同じ語形を集め、意味に從つて右に擧げたやうな例と '*darkness* came on' の如き例とを區別

した。それから上例の 'endlessness' の文法的構造を吟味し、それが 'darkness' などとは異つて、とりわけ the state or fact of being endless といふ意味の名詞、イエスペルセン(九)のいふ Nexus-substantive に相當することを確めた。それで此の語形が密接に原形の 'endless' と關係のあることを知り、それが單なる文法的な言ひ廻し即ち文脈上名詞を使ふ必要のある場合に用ひられる形式とするだけでは滿足せず、進んで何故かういふ名詞形を使はねばならなかつたかといふ必然性を求めて行つた。其處でヴント(一〇)のいふ「客體的思考形式」やガーディナーの「名詞は物・・として表現する形」といふ說明の意味を、此例に卽して掘下げた。客體的に考へるといふのは此の場合何を意味するか。物・・として・・といふのは具體的に此例では何を示すのであるか。私は何度も何度も集めた例を比較したり原作で印をつけた箇所を讀返してみなければならなかつた。'darkness' は「暗」といふもので「暗くあること」「暗いこと」ではない。その意味で 'night' を用ひてもさして變化はない。ところが 'endlessness' はどうであらう。これを例へば 'eternity' で置

き換へては、'endless' だといふことが明確に強く表はすことができない。即ち此の語形はどこまでも形容詞の原形がはつきり分析できるものでないと工合がわるい。明確に強く表はすのは、どういふ意味であらう。此處まで來て改めて原作に當つて讀み直してみた。こんどは前後の意味や全體印象をとらへることに苦心すると同時に、何か求めるものを作家自身の間接的な說明によつて確めようとした。その結果、It was the *whiteness* of the white whale that above all things appalled me. といふ文や、that *blackness* of darkness といふ句などを參考材料にして「白い物」を凝視する底に神祕的な觀念を見出す方向がたどれて、前述したやうな結論に達したわけである。これが一般に認めてもらへるかどうかは別問題として、私はこれで作者の根本觀念に觸れ得たと信じ、安心して此の作品全體の文體をまとめにかかつたのである。此の經驗で痛感したことは、機械的に同じ語形だけを蒐集しても無駄であり、却つて誤解又は迷路に導く虞のあること、特に價値の著しいものを質的に精選する必要のあることである。

作者の表現過程より云へば、恐らくはじめは機械的に使つたであらう語形に、無意識にもせよ或る價値を持たせるにいたつたものであらう。「白い鯨の白いこと」だけの表面的な意味では濟まないものがあることを、作者も感じてゐたにちがひない。一方で極めてすぐれた文體を示してゐる作者が、機械的といふには餘りに多く餘りに意味の深い語形を、無器用だと言はれるまでに使つた筈はないと思ふ。假に無器用だとしても、文體論としては、むしろその「無器用さ」に意味を見出さねばならないと思ふのである。

もう一つの例はロレンスの反覆語法である。これは東田氏も注意してゐるのであるが結論はちがふ。東田氏は同じ語法に「連續」と「均衡」だけしか認めてゐない。私の結論は、靜的な圖型でなく、動的な鼓動である。同じく「生の流れ」を表はすとしても、一方はその均齊に注意し、他方は高まる發展に注目する。東田氏も「漸層的效果」には觸れてゐるが、重點のおき場所は全一體としてのバランスである。私はさうしたバランスを破つてまでも、層面の異つた底に本

質的なものの現れる事實を重んじたいのである。私の結論を要約すれば、ロレンスは直接の感覺で物に觸れ、觸れる底に本質的なものを見出す、といふのである。見出したものは、'darkness' といふ形而上的なものであるが、彼がこれを感覺を通じて直觀するところに特色があると思ふのである。ハックスレーが『ロレンス書翰集』の序文で「ロレンスは水に酸素と水素を味ひ、ダイヤモンドや石炭に炭素を感ずる」（圏點は原文イタリクス）と述べてゐるのは正しいと思ふ。ロレンスの反覆語法は一々擧げ切れないほど多く、又その價値は必ずしも同一ではないが、上述の結論に適した一例を引用すると、

And in their black, empty concentration there was *power*; *power intensely abstract and remote* but *deep*, *deep to the heart of the earth, and the heart of the sun.* *The Woman Who Rode Away*, 99. (眼の黒い空な凝視の中に力があつた、烈しく抽象的で遠隔なものではあるが、深い、大地の中心と太陽の中心まで深い力が)

「力」といへばそれを抽象的な力にまで透徹し「深い」といへば大地と太陽の中心まで深めて行く。その順序は、段階を逐ふて次第に本質に達するといふのでなくて、直ちに層面の無限に深い世界を直觀するのである。これは反覆された語法を比較すれば分ることで、後に來る語法は思ひもかけぬ含蓄的な意味を表はすのである。反覆語法は色々な形でロレンスの作品に現れるから、誰にも氣が付くのであるが、意味の内包をしらべてみると、單に同じ語を繰返して意味を強めるといふのでなく、意味の層面、例へば感覺層の急激な變化に注意される。それは感覺から本質の直觀にまで飛躍するからである。それが我々の語法であれば、突發的な理由があつて、さういふ變化を示すのであるが、ロレンスの場合は、それが突發的な又偶然的なものでなく、彼にとつて最も自然な傾向であることを知れば、其處に特殊な價値を見出すことができるだらう。

以上で、外延的な方法と內延的な方法をあらかた說明した。兩方法とも長短を有するから、實際に當つては、兩方を綜合して足らないところを補ふことが肝要であらう。例へば、外延的な方法によつて、語法の頻數を調査し、客觀的な材料の整理をすれば、その材料に關する限り、精確な與件（データ）を得られる譯であるが、材料の選び方や與件の解釋の仕方には、對象の全體又は本質を見通す直觀の作用が必要である。特異な語法を選ぶのは一法であるが、一般語法と如何なる點で異つてゐるか、特異と思つたものが個人に特有なものでなく、時代又は環境が異つてゐるために特異なのではないか、特異なものであるとして、それは作者が意識的に用ひたものか、それとも作者の自然傾向なのであるか、特異なものの意味をどういふ風にして解釋するか、等の問題は、單に外面の計數だけでは十分の解決を得られない。前にも述べた如く、材料を完全に選ぶためには、或程度までそれの價値付けが要請されなければならない。さうでないと折角集めた材料が大

して物を言はなかつたり、わるくすると誤解に導いたりすることが少くないのである。又内延的な方法も兎角主觀的な印象に陥り易く、その解釋に客觀性を持たなかつたり、解釋の仕方に科學性を缺く憂が生じ勝ちである。全體印象といふものは讀む人によつて異ることが多い。さうした缺點を補ふために、具體的な材料を並べて比較したり、頻數を調査したりして得た着實な結果に照合する必要がある。色々な方面からメスを入れて正確を期しなければならぬ。質と量、廣がりと深さ、など各方面から確めて、はじめて信頼できる結論に到達するのである。

　材料を解釋する仕事は容易ではない。先づ研究對象の部門に對する知識、例へば文學作品ならば文學的な素養、哲學上の著作ならば哲學の知識、が先要條件であるが、更に研究者自身の態度――大きく云へば世界觀――が大いに作用することを考へなければならぬ。どういふ辭項で考へ且つ言ひ表はすかといふ問題になるのである。バイイは「知的表現」と「情的表現」なる辭項を用ひた。類型

學には「靜的」「動的」の如き辭項がある。「外延的」「內延的」といふのも一つの辭項である。これらは單なる言葉遣でなく、もつと本質的な思考の形式を表はすものである。これが明かになれば、文體論の學的性格がはつきりするであらう。現在認められる大きい特色は、ヴントとバイイとフォスレルが代表してゐる。文體論の行ふ解釋には、それらの人々が根柢とした科學――例へば心理學や美學が根柢になつてゐる。辭項を見出すといふことは、結局どの科學を根柢とするかといふことになるであらう。

波多野完治氏が色彩語によつて久米正雄と室生犀星の文體を比較した結論(一二)を引用しよう。

　久米氏がいろいろな色をつかふといふのは、氏が、客觀的な作家であるといふことに對應するやうである。氏は世界を「見る」作家であるが、この「見た」世界を氏はありのまゝに表現する。對象の性質をかへずに、そのまゝ表現する。ここに氏の文章にいろいろな色彩

で出て來る理由があると考へられる。

これに反して、室生氏は、ありのまゝの世界をゑがかない。氏は自己によつて「感じられた世界をゑがく。言はば自己のうけとつた世界をゑがく。さうしてそのうけとつた世界が、「蒼い」世界なのであるために、蒼が多くなるのである。……

此の結論は、「主觀」と「客觀」といふ類型學的な概念で考へられたものである。類型學的な心理學が波多野氏の研究の根柢になつてゐる。

(三) 小林英夫氏は、島崎藤村の文體を研究して、十三ヶ條の特徴を擧げ、

それらは氣のよさ、氣の弱さ、餘情、未練、腰の低さ、主情性、物への關心、靜止、散文性、接近、親しみ、内部の曝露、内局性といつたやうな樣々な言葉で言表はし得るものを示してゐるが、これらを一言を以て貫いてみせるならば、「親しみ」といふ言が最も適してゐはしないであらうか。氏のすべての文體的特性は、「親しみ」へと翕合してゐるのだ。

と結論してゐる。これは明かに美學を根柢としてゐる。大體に於て、波多野氏は外延的方法により、小林氏は內延的方法をとつてゐる。そして結論には、波多野氏は用意された概念があるやうだし、小林氏は作家に對する同情といふ態度があるやうだ。從つて、波多野氏の用ひる辭項は知的又は科學的であり、小林氏のは情的で文學的だ。この差別は單なる手順の差異ではなく、兩者の根柢にある學問なり研究する態度の異ることを示してゐる。

一、波多野完治、文章心理學
　同、創作心理學
二、波多野完治、文章心理學
三、波多野完治、創作心理學
四、山本忠雄、「*Moby Dick* に現れた明暗と色彩」（英語青年、第七十一卷第七號）
五、Spitzer: *Stilstudien*, II, P. 17.
六、小林英夫、言語と文體（三省堂、一九三七年）
七、山本忠雄、「*Moby Dick* の文體論的研究」（廣島文理大英語英文學論文集、第一輯）

八、Walter Weber: *Herman Melville, eine stilistische Untersuchung*, Philographischer Verlag, Basel, 1937, P. 143.
九、Jespersen: *The Philosophy of Grammar*, Allen & Unwin, London, 1924, P. 136 ff.
10、Wundt: Die Sprache, Völkerpsychologie I, 2 vols., Alfred Kröner, Stuttgart, vierte Auflage 1921, II, P. 447 ff.
一一、*The Letters of D. H. Lawrence*, P. 693.
一二、波多野完治、創作心理學、九七頁以下
一三、小林英夫、言語と文體、七五頁以下

附録

一　『綴方教室』とその作者

「殘業」と題する作品『續綴方教室』の書出しはかうである。

朝、六時半に始まつてから間もなく、便所から歸つて來た仲田れんちやんが私の横を通りながら、

「あゝあ、眠い〳〵。昨夜、殘業したから今朝眠くつてしやうがない。」と言ひながら、眼をこすつてゐる。

私は昨夜殘業があつたことを知らないので、行き過ぎようとしたれんちやんに、

「ちよつと、れんちやん。昨夜、殘業あつたの。」

と訊くと、れんちやんは驚いた顏をして、

「あら、あんた達、しなかつたの。皆やつたわよ。十日ばかり前にはいつた菊ちやんだつてしたのよ。」と、金歯を見せて言つて、ぐるつと後を向いて行つてしまつた。

此文に、指導者の教へた「文の擴充」の施されたところを指摘するのは困難ではない。例へば「便所から歸つて來た仲田れんちやん」「行き過ぎようとしたれんちやん」「十日ばかり前にはいつた菊ちやん」がそれである。れんちやんや菊ちやんだけでは、どうした人間だか分らない。それを分るやうに說明するのに骨が折つてある。「擴充」は又別な方面に現れてゐる。「眼をこすつてゐる」「驚いた顏をして」、「金歯を見せて」「ぐるつと後を向いて」などの描寫がそれである。作者は克明な觀察を表現することを教へられた。ただ、說明するのには別な表現法もあり、描寫すべきものは精選を要することが十分には分つてゐない。そのために、文章が間延びをしたり描寫が型にはまつて來てゐることが注意される。人物の會話が活き〳〵と寫されてゐることは、目立つた特徴であるが、それで人物の性格が

描き出される場合は兎に角、一般にありのままを寫す結果、冗長に流れるきらひがある。『續綴方教室』になると、一通りの表現法を覺え、わるく云へば筆たつしやであるが、表現負けがしてゐる點は見逃せないと思ふ。

例へば、林芙美子の『放浪記』の一節と比較してみればよい。

「厭んなつちやふね……」

女王はまるで、サ、ラのやうに腰を浮かせて御製作なのだ。同じ繪描きでも、これは又餘りにもコツケイな、ドミエの漫畫のやうではないか。

「まるで人間を莽だと思つてやがる。」

五時の時計が鳴つても、仕事はドンドン運ばれて來るし、日給袋は中々廻りさうにもない。工場主の小さな子供達を連れて、會計の細君が、四時頃自動車で街へ出掛けて行つたのを一番小さいお光ちやんが便所の窓から眺めてゐて、女工達に報告すると、芝居だらうと云つたり、正月の着物でも買ひに行つたのだらうと云つたり、手を働かせたがら、女工達の間にはまちまちの論議が噴出した。

此文は、直接話法と間接話法の使ひ分けが巧みにしてあつて、それぞれ締つた形になつてゐる。『綴方教室』の作者を既成の小說家と比較するのは不當かも知れないが、それは兩者の巧拙を比べるためでなく、むしろ稚拙な文體から、恐らく作者の豫期さへしない結果が生じてゐることを述べんがためである。

林芙美子には、女工達の生活を批判したり戲畫的にした所がある。ドミエの漫畫を持出すまでもなく、彼女には立派な批判的立場があり、その批判は意識した客觀性がある。ところが『綴方教室』の作者は、正直に克明な觀察を報告してゐるうちに、作者を押しのけて自然と人物の戲畫が描かれ、人間に對する鋭い批判が生じて來てゐる。

此の作品には、「くやしくなつてきた」「なみだがボロ〳〵出てきた」「いやなやうでした」「なきたいやうでした」の如き、深刻な感情體驗の告白がある。體驗そのものは、たとへ悲慘な境遇にもせよ、子供らしい感情なのであるが、これをそのまま筆

にする力を持つてゐることは異常な例であらう。作者自身は批判してゐなくても、讀者はかかる主觀的表出から、或る客觀的な批判を理解するのである。作者の批判は主觀的である。子供らしい、特に女の子らしい細かな觀察から、強い感情の表白となり、遂には大人に對する批判を下すところがさうである。水野さんといふ人を「ずゐぶんお酒のすきな人だと思ひました」と述べたり、「ふだんの父ちやんはいゝけど、よつぱらふと、そんだからきらひさ」と言つたりしてゐる。前に引用した「殘業」といふ作品では、荒井さんといふ女工監督の仕打ちを「不公平な」と思ひ「口惜しい」といふ語を五回も繰返して、小さな憤慨を投げつけてゐる。それがもう單純な感情だけでないことは、

1. 私でさへ口惜しいと思ふのだから、八年にもなる秋ちやんが口惜しがるのも無理はないと思つた。

2. 私は、この腹の痛さを、その人達にだけでも信じて貰ひたかつた。

3. トシちやんは何時までも口惜しがつた。しかしトシちやんが休んだのは前の晩にさせなかつたのが多少は原因してはゐたと思はれた。

のやうな反省から窺はれるのだが、此の作者はまだ自分達女工の生活を反省したり、社會制度を批判するほど大人にはなつてゐない。彼女の感情や批判の對象になつてゐるのは、直接自分達を監督する荒井さんといふ男なのである。觀察してゐるのは抽象的な生活や制度ではなく、具體的に生きて眼を光らせてゐる監督である。その見方は巨視的ではない、微視的であり近眼である。從つてその眼に映ずる荒井さんの精確な姿は、レンズで擴大されて物凄い風貌を呈してゐる。

1. 荒井さんは、右手に卷煙草を持つたまゝ、私たちをじつと見てゐる。私は、肩のあたりが固くなるやうな思ひで荒井さんの机に近づいた。默つて立つてゐると、荒井さんは落着

き拂つて、大きく煙草を吸ひ込んだ。先についた火が息をつくやうに光つた。それから、殘つた吸殼を海苔の空罐に入れてパカッと蓋をした。口と鼻から煙を出しながら、私たちの顏を眼鏡越しに見てゐた。……

2. 私は默つて、荒井さんの、青白い、長い横顏を見てゐた。顎から咽喉にかけて、剃り立ての青ひげがざら〳〵してゐる。話す度に、咽喉の眞中のぐり〳〵が動く。

顏の表情は好んで描かれてゐる。「驚いた顏」「ふくれつ面」「つまらなさうな顏」「しかめつ面」「怒つたやうな顏」「こはばつた顏」「睨めるやうな顏」「難しい顏」などが作品「殘業」に出てくる相貌であるが、荒井さんの表情を敍して

1. 荒井さんは、細い垂れ眼を眼鏡の裏でパチ〳〵させて、「冬ちやんが仕上の係か。」と、きつい調子で言つた。

2. 荒井さんは笑ひながら何か言つて、それから私たちの方を見たが一寸顏に皺を寄せただけで行つてしまつた。

と述べてゐる。表情が目に見るやうに動いてゐる。かういふ種類の描寫は、兎の大きさを「大人のげたぐらゐ」、その草を食べる樣を「はなまでうごかして、もくもくと、まるで、おばあさんが、かたいものを食べるやう」と子供らしく形容した初期の『綴方教室』時代から、をばさんが「おびはだしなくだらんとさげて、まるでげいしやみたいな風」と敍じた少女らしい觀察を經て、うんと知的なものにまで成長してゐる。

「おりえさんのをばさん」や「きつねつき」になると、右に述べたやうに形容が哀れな人間の性格づけに役立つてゐる。これは作者の豫想しなかつた手柄であらう。おりえをばさんは

こんどは口をむすんで、にらむやうな目で、おとなりの方を見てゐました。

と述べてあり、きつねつきは「色が黒くて、大きい目玉がいつもひつこんでゐて、ひよろ／＼とせいの高い女」であり、

をばさんの顔は、いつもより青くて、目なんか、おくにひつこんでゐて、蛇の目のやうに光つてゐました。

といふ形容は、すでに子供らしい主觀の域を越えて、客觀的な人間像を描き出してゐる。それほど特異な性格は『綴方教室』には見られないで、「色が白くて、おかめによく似た」小母さんや「額の狭い、色の赤黒い、猿のやうな感じのする父ちやんの横顔」が出はするが、一般に見る眼が据つてきて分析的な觀察をするやうになつてゐる。「猿のやうに出はつた口」「上眼でじろつと見て」「でらでらした馬面」「意地惡さうな眼」など大人に對する惡意さへ見られる形容であるが、かういふ形容をなし得るためには、自我の意識が強くなつてゐなければならず、知的な發達

を經なければならない。

1. 中澤さんの鼻の下の大きなホクロを見てゐると……

2. あんこのはみ出たパンケーキが二つ入つてゐて、よく見たら、その上に袂くづのやうなものがついてゐた。

3. スヱちやんはさう言つて、小さい光つた鋏の先で唇の下を突つきながら、細い白糸のこぼれてゐる疊の表をじつと見詰めて何か考へてゐた。

4. 私は、早く歸してくれゝばいゝと思ひながら、白い天井をじつと見詰めてゐた。天井には、何か蠅のやうな虫が二三匹はりついてゐた。

5. 秋山さんは其處に立つて、細長いテカテカした顏をして睨んでゐるらしい。金縁眼鏡がとても顏を怖く見せる。

6. 母ちやんは上眼使ひにぢろりと見て、出した手を引ッ込めた時は膝の上で自然にげんこになつてゐた。

かういふ種類の克明な觀察が、「綴方教室」には多いのだが、それらはただ無邪氣な觀察ではなくて、知的に精密化されてをり、さうした觀察を表現するところに、甘いものとは思へない一種の態度があると思はれる。常にかういふ觀察をする少女は種々の意味で怖しいのではないかと思ふ。それだけ綴方といふよりは短篇小說の要素を加へてきてゐる。

「綴方教室」で作者は克明に觀察することを教へられた。それで一つの手法を覺えてきたのである。例へば「ゆうべ」といふ作品は、はじめに事件と行動だけを順に述べた平板なものであつたが、先生の注意で改作したものを讀むと、次のやうな描寫が新たに加はつてゐる。

1. 私は……ゆをわかして、ほうれん草をあらつておかまの中に入れました。そのとき、ぱつ、と電氣がついて、家の中があかるくなりました。

2. 私は父ちやんに「ずゐぶん母ちやん、おそいんだね」といふと、みのぼうは「ほんとだよ」とい

つて、ほうれん草をくちや／＼食べてゐました。父ちやんも「ほんとだ、どうしたんだろ」といつてゐたら、ガラッとげんかんの戸がいきほひよくあいて、だれかゞはいつてきました父ちやんが手だけうしろへまげて、しやうじをあげると、母ちやんがしんぱいさうな顔して立つてゐた……

圏點を附した箇所が擴充された部分である。人物の描寫が主なもので、場面の描寫がそれに次いでゐる。これは先生の大木顯一郎氏も『赤い鳥』の鈴木三重吉氏も讃めてゐるところで、作者も努力して書いた部分であると思はれる。作者の觀察は表面的であるので、それが克明であればあるだけ、宛も神經病患者の部分的に喪はれた心理作用を見るやうに、我々の生活の斷面が誇張されて凄い姿で寫つて見える。例へば、作者は「お湯屋の番頭さん」や「おりえのをばさん」などの作品で、背後にある事件の本當の意味を少しも知らずに、一場面だけを活寫してゐる。場面だけが固定してゐて、しかもそれが詳細に敍述されてゐるので、凹面鏡か何かで歪んだやうな姿を見せるのである。「お湯屋の番頭さん」に描かれ

たのは、

げたをぬぐ所で、二十七八の、色の黒い、たいかくのいゝ番頭さんが、あかだらけのシャツをきて、半もゝひきをはいて、顔中まつかになつてねてゐました。

といふ番頭さんで、

そこへ、また大ぜいの人たちがワイ〳〵入つて來ました。番頭さんは、「なにしに來やがるだ。みせもんぢやねえや」と、みんなにどなつて、それから、こんどは、をばさんのかみの毛をひつつかんで、ひきづりました。をばさんは、兩足をばた〳〵させて、ひいひいいひました。

といふ風な活劇を描寫してゐるのだ。かういふところは小さな少女には、とても冷靜に觀察し表現できないものだと思ふが、此の作者にはそれができるので

ある。

「おりえのをばさん」には、

をばさんは、古ぼけた、ところ〳〵あなのあいた茶色のえりまきをして、まつ黒な地に非の字のやうな、がらのついた着物を着て、たてじまの、こい空色みたいな、くしや〳〵な羽織を着てゐました。をばさんは、今三十六なんだけれども、年よりずつとふけて見えます。

といふ詳細な觀察があり、

おりえさんのをばさんは、又手を合して、「神樣、キリスト敎の神樣、私をこうふくにして下さい。さうですか、さうですか。わかりました。私は、たつた今から、きよい人間になります」といつて、又からだを右へまげたり、左へまげたりしはじめました。おりえちやんは、もうなれつこになつてゐると見えて、「母ちやん、又泣くウ、やめてよゥ」といつて、をばさんのえりまきで、をばさんの顏を、ふいてやつてゐました。

は好奇心と云へばそれまでだが、客觀的に細かな觀察をしてをり、

「なんだか、きゝにくくつて、きけないでゐたんですけれど、あれから、わたしのあと、ちらつたんでせうかと母ちやんにいひました。 母ちやんは「えゝ、わたしだつて、そらアね、お前さんにいひたくないと思つてゐたんだけど」といつて、母ちやんは、をばさんの顔を見てゐました。「さうですか」といつて、をばさんは又下を向いてかんがへてゐました。

「小さい子供をつれて來たんですけど、まだ若いひとですよ」と母ちやんがいふと、をばさんは又「さうですか」といつて、こんどは口をむすんで、にらむやうな目で、おとなりの方を見てゐました。

は自然と心理描寫になつてゐて、暗示的な效果を擧げてゐる。 其處まで印象させる位に、客觀的な觀察をするのには、異常な注意の集中力が要ると思はれる。それを十一か十二の少女が語つてゐるのである。 我々はこれを讀んで何だか

妙な錯覺を感じないだらうか。それに、本當の氣持は分らないだらうと思ふのだが、會話をよくもそのまま寫したものだと思ふ。大人の感情が、さうした感情を持たない子供の頭を濾過し、子供の表現に擴大されて、再現されてゐる。此の中間にある擴聲器は、何と強い客觀の把持力を有してゐることだらう。場面描寫ではじめて特異なものを見せてゐるのは「きつねつき」といふ作品であらう。

1. ある風の強い夜でした。道がカラ〳〵になつてゐるので、外を歩いてゐる人の足音が、とてもよく聞えます。そのときでした。道のよいのに、あしだをはいて、カラン〳〵と音をたてゝ、家(うち)の方へくる人がありました。

2. おかつての障子が、あけはなしになつてゐるので、おかつての中があかるくなつて、なべや釜のならんでゐるのが、みんな見えます。そこへ、をばさんのかげが、うつツて長つぽそくなつて、おかつてのガラス戸のところまでとゞいてゐます。

る。口をあけると、きたない、みかん色のはがずつとならんで見えて、なほきみがわるいのです。電燈が、をばさんの頭の上にあつて、うすぼんやりと光がさしてゐて、をばさんのかみの毛が黒びかりにひかつてゐます。

これは描寫が擴がりを持ち、多面的になつてきた例である。構成的な描寫になつてきた例である。これはただの直觀で把握したものではない。部分と全體の整頓には、知性の發達を想はせるものがある。これに科學性を加へるとポッの小説になり、表現に洗練を加へると芥川龍之介の短篇になりはしないかと思ふ位である。

此の特徴は、『綴方教室』になつて、益々發達してゐる。

ぐしや〳〵に濡れた土間を踏んで中程のテーブル迄行くと、白い前掛をした小僧さんが聲を張り上げて、「らつしやアい」と呶鳴つた。ひやつと冷たい空氣の中でアイスの甘い

匂ひがした。眞中のテーブルに金魚鉢が置いてあつた。きれいに澄んだ水に青い藻が搖れて、赤い金魚が靜かに泳いでゐた。

はまるで誰かの小說にあるやうな描き振りである。氷屋の雰圍氣がこれだけに寫せるのは、餘程筆の達者な證據である。『綴方敎室』では、父ちやん母ちやんをはじめ出てくる人物が自ら或る空氣をたゞよはせてゐたのだが、此處まで來ると筆の力を想はせる。それだけに、讀者の感銘は別種のもので、ほほゑまれるやうな氣分は失はれてゐる。

『續綴方敎室』で、もう一つ注意してよいのは、內的生活の描寫が多くなつてゐることである。前に反省の加はつた表白を擧げたが、此處で珍重してよいのは、體驗話法による心理描寫である。次の引用は、「殘業」の中にある珍しい例である。

私が敎へてやつたくせに、とう〳〵言はれないつて頑張つたんだな。何時も一緒の二

人が、二人とも病氣だと言つたら變に思ふだらう。冬ちやんが荒井さんにいひつけるに違ひない。そして、前の晩させなかつたから病氣の振りをして休んだのだと思ふに違ひない。しかし、もう仕方がないと思つて帶を解かうとした時、入口が亂暴に開いて、中川てるちやんの丸い顏がのぞいた。

これは心の言葉を述べたもので、内部の感情をただ嬉しいとか悲しいとか言ふ以上に、客觀的に組織立てる方法を覺えたことを示し、「綴方教室」時代とは又異つた描寫の面が生じてきてゐる。まだ他人の内心を同じ形で述べるところまでは行つてゐないが、體驗の方面が段々變つてくることは、作者が一定の轉換期に達してゐることを示してゐる。これが進むと、昔の暗示的な描法から、次第に外面的な表現法に發達するであらう。と同時に、別な暗示法や表現の刈込みの方法を覺えなければ、綴方としての興味も文學としての價値も得られないはんぱな物になるのではないかと思ふ。

語法から外延的に入るのには、『綴方教室』の方が適當してゐる。それは表現法が大體固定してきたからである。氣がつくのは、だいぶ大人びた言葉遣ひの多いことである例へば「神か佛がなんていふことを聞くと」「小母さんは平氣なもので」「藝者と言へば思ひ出されることがある」「丁度蟋蟀が鳴き出す頃だつた」、「大人はよく色々な言葉でお禮を言ふけれど」「私は相手になつてもしやうがないと思つたので」、「その動作がとてもわざとらしく」「浴衣らしい浴衣なんて、それ一枚きりだもの」「弟たちは意味も分らないくせに」「兵隊に出る人さへゐるんだ」「どう考へても父ちやんや母ちやんの方が道理に合はないと思ふこともある」「どうしてお前はそんな馬鹿なことを考へたんだと、自分で自分を叱りながら走つた」、「金縁眼鏡がとても顔を怖く見せる」「と思ふと、私は思はず苦笑ひした」「と自分の言葉に感心したやうな言ひ振りである」「男なんてものはもつとはつきりしなくては駄目ぢやないか、と言つてやりたい氣持だつた。でも考へてみれば、一人で物事を判斷することの出來ない父ちやんが可哀さうでもあつた」などがその例

である。十六七歳にもなり、殊に女子であつてみれば、かうした大人びた言葉を用ひるのも、さう驚くには當らないだらう。唯注意してよいのは、その中に處世ぢみた、又分別あり氣な語法の多いことで、これは作者の生活なり環境なりがさうさせるものと思はれる。かやうな表現に、もし「實感」があるとすれば、それは前にも述べた一種の態度なのであらうが、我々がこれを讀むと、表現とその實際の意味とが直ぐ結び付いてしまひ（其處に「綴方教室」の興味がある）、作者は除け者になつてしまふ。「實感」があることは、その意味で功罪相半ばするものである。餘りにもリアリスティックなものは、果して少女の正直な表現であらうか。

文語的な、又は文學的な色彩のある語法が出るのも、「續綴方教室」の特色である。

1. 吹つかけをやつてゐる窓から、夜にならうとする青黒い曇り空がちよつぴり見える。
2. 空の袋をくるつと丸めて落すと、小さい黒い影と一緒に朝顔の下までころがつていつ

た。

3. 眞暗な闇が黑々と窓一ぱいに見えて、雨の脚が時々ちらつと光つて見える。

4. 傘をひろげようとして後を振り向くと、小屋へ這入つた番頭さんの足が、ちらつと白く見えた。

5. おからこを入れた大丼と、大きな茶碗と四角な黑い木の箸の三つが、お膳の面に簡單な影を映して置かれてある。

これらの例から、作者の視點の鋭さと、それを簡潔に表現する手法の巧みさが察せられる。これは知的な構成力の發達してきてゐることを示してゐる。同時に、少し無理があると感ぜさせる。

作者は又直喩に巧みであつて、蚊帳の中でもがく姿を「網の中の魚のやうに」と言ひ、暗を「底なしの井戸」に喩へ、手拭ひの浮かぶ狀を「ふんわりと海藻のやうに」と形容してゐる。

向ひの寄宿舍の窓ガラスに物干竿の影が消えさうにうつゝてゐて、如何にも寒さうだ。小屋の横の砥石を入れた水のはいつた箱には、ガラス紙のやうな薄い氷が半分沈んでゐた。

の如き例は情景なり氣分なりを寫して遺憾がない。

「猿のやうな感じのする父ちやん」と同じやうに、正直な觀察が却つて不快な感情を伴ふものには、琴の爪を形容して「まるで人間の齒みたいなもの」と述べた例がある。此種の不快な後味を伴ふ形容法は、此の作者の一特徴と稱してよからうと思ふ。

負傷して頭に繃帶を卷いた母ちやんを「繪に書いてあるアラビヤ人」と喩へてゐるが、此の比喩が同じ作品「喧嘩」の中に三度繰返されてゐて、一種の樂旨（ライトモティフ）の役割をつとめてゐることは、子供の表現法としては注意すべきものと思ふ。これとはちがふが、型にはまつた表現に、「すつぱい糠漬の茄子」「家（うち）はよく／＼貧乏だから」

のやうなのがあるが、これなど或る效果を意識してゐるのではないかとさへ邪推されるもので、マニール化してゐるのは、筆達者な弊ではないかと思ふ。

要するに『綴方敎室』の作者は、鍛へられて達者になつたといふ感じで、書き方が怖しいほど客觀的であり、知的な分析力が鋭くて、視角が常に切れ込んでゐる。頭の中でぢつくり味ふといふよりは、外的な事物や周圍の人物を冷靜に眺めて、それを達者な筆でぐんぐん客觀化するといふところがある。そのために、例へば小川正子の物を讀む時のやうな優しさとか哀切とかいふ感じはなくて、强い叫び聲と冷徹な批判とを聞かされる氣持がする。これがどうしてもあどけないであらう實在の作者と結びつき兼ねるので、作者はいつたいどういふ少女であらうと思ふ時、讀者は當惑を感ずるだらう。室生犀星であつたか、『綴方敎室』を評して、小說はあるが詩はない、と言つたのは適切な言だと思ふ。換言すれば、本當の意味で作者の表現したものがあるかないかといふ事である。私はそれに疑問を持つてゐる。餘りにも眞實を語らせられた結果、作者は却つて自己の

眞實を失つてゐる。綴方を書く豐田正子の姿が目立ち過ぎると思ふ。

二　兵隊物と火野葦平

『麥と兵隊』の一節。

私は、ふと、私が孫圩で過した一日のことを思ひ出したが、私自身も、私はそれが何か特別な經驗であつたとは少しも感じないで居ることに氣付いた。戰場では特別な經驗などといふのはありはしない。取り立てて云ふほどのことはなにもない。同じやうな日が同じやうに過ぎて行くだけだ。上海から、南京から、徐州へ、それからもつと先へ、戰場は果しなく續いて居る。私が孫圩で得た感想が兵隊にとつては毎日連續されてゐる。それは既に何にも感想が無くなつてしまつてゐるのだ。それはその感想に負けたのではない。その感想を棄てたのではない。それは乘り超えたのだ。苦勞といふやうな生やさ

しい言葉では盡されないひとつの狀態が、最初は兵隊の上を蔽ひ、次の瞬間には兵隊がその上を乘り超えた。柘榴の丘に私が立つて茫然としてゐると、出發の命令が下つたやうである。兵隊が柳の木の下から起き上り、腰を叩いたり、欠伸をしたり、伸びをしたりしてゐる。家の中に居たのや、山の上に居たのや、麥畑の方にゐたのやが、それぞれ集つて來て整列し、銃を採り、やがて、東方に向つて前進しだした。石榴の丘から私は見て居た。一面の森々たる海のごとき麥畑の中を、遠く、右手の山の麓傳ひに行く部隊もある。左の方も蜿蜒と續いて行く。中央も長蛇の列をなして行く。東方の新しき戰場に向つて炎天に灼かれながら、進軍して行くのである。私はその風景をたぐひなく美しいと感じた。私はその進軍にもり上つて行く逞しい力を感じた。脈々と流れ溢れて行く力強い波を感じた。私は全く自分がその莊嚴なる脈動の中に居ることを感じたのである。私はこの廣漠たる淮北の平原に來て、このすさまじい麥畑に茫然とした。その土にこびりついた生命力の逞しさに驚いた。しかしながらそれは動かざる逞しさである。私は今その麥畑の上を確固たる足どりを以て踏みしめ、蜿蜒と進軍して行く軍隊を眺め、その溢れ立ち、もり上り、躍動してゆく生命力の逞しさに胸搏たれた。

これは事實の報告だけではない、感想と感激の記錄である。一たいに火野葦平の文章は、主語を明確に表はしてゐるのが特徵であるが、右の文でも「私は」「私が、」「それは」「それが」などの主語をむしろ繁雜な位に明示してゐて、表現の主體が何であるかを言ひ切らずには濟まさない。『土と兵隊』にもかういふ例がある。

我々は嚴しい軍紀と戒律の下にある。我々の現在は唯我々が知つてゐるばかりである。軍機を守るために我々は全く通信を禁じられて居る。それは當然のことである。我々はどこにも手紙を出すことは出來ない。

これには階級意識といふか、或るエゴに似たものを感じさせる。主語が明示されてゐるために、文の長さが自ら限定され、主語と述語や目的語の關係の明確な短い文になつてゐる。

1.私はその風景をたぐひなく美しいと感じた。私はその進軍にもり上つてゆく逞しい力を感じた。脈々と流れ溢れて行く力強い波を感じた。私は全く自分がその莊嚴なる脈動の中に居ることを感じたのである。

2.私はこの廣漠たる淮北の平原に來て、このすさまじい麥畑に茫然とした。その土にこびりついた生命力の逞しさに駭いた。しかしながらそれは動かざる逞しさである。

のやうな文は、短い文と文との間に、或る盛り上つて行く力がある。短い文の間に力強い脈動があるのだ。

これを他の作品、例へば『糞尿譚』などの文章と比べると、特色がだいぶ異つてゐる。例へば

赤瀬の奥さんは阿部の處置に對して、ひどく不機嫌でそれはあんまりではないか、なる[illegible]後になつては金に困つて潰れさうになつて居つたとはいへ、もともと小森が始めた仕

事であるし、家屋敷はもとより、田地田畠まで無くし、一生を棒に振つてかじりついて來た畢生の事業である、いくら、こちらで金を出してやつたからと云つて、御本尊の小森に二割五分といふのはいけない、なんぼ少くとも半分の權利をやらねば可哀さうだ、こんなことになれば、最初トラツクが抵當に入つてゐるのを氣の毒に思つて、少しばかりの金を貸してやつたわたしの立場が無くなるではないか、あんまりとは思はないかな、と、赤瀨にも、殊に、顏を見る度に阿部に云つた。阿部は初めは色々と辯解し說明もしてみるのだが、いくら口を酸くして述べ立てても納得せず、あんまりではないかなばかりを繰り返す奧さんにしまひには根氣まけして、近頃では赤瀨の家にも滅多に寄りつかなくなつた。結果に於てはかうして阿部の案が法律的にも效果を持つた形になつた。一生をこのために費やし、あらゆる苦難とたたかひ、ひたすら事業に拘泥するばかりに侮辱にも耐へ、迫害にも身を曝らして來たが、最近の諸種の事件のさ中にまき込まれ、いつたい何が何だか見當もつかなくなり、茫漠とした孤獨感のみがひたひたと胸をひたした。悲しみも喜びも忘却した空虛な氣持であつた。

これは文がだらだらと續いて、主體と客體との關係を明確に整理しない、一寸里見草のやうな文章であつて、會話に盛られる人物の氣持をそのまま文章の中に織込んだ形式になつてをり、何が何を何處で、といふ關係を觀念的に明示しないのである。これに比べると『麥と兵隊』の文章は「私」と「兵隊」と「麥畑」と「進軍」と「感動」との關係が、短い文に整理されてゐて、客觀と主觀の別が明斷に表はされてゐる。陣中忽忙の間に筆を走らせたものではあるが、文章として明確な體裁を示してをり、文章そのものは安心して書いたといふ風が見えるのである。

かういふ文章からは、行動を表はす動詞と、感情を表はす動詞とを選び分けることが容易である。『麥と兵隊』から別な箇所を引用すると、

さあ、手榴彈を出してくれ、いよいよ突撃だ、決死隊が七八名出ることになつて居るんだ。戰車と一緒に城門に飛び込むんだ、有るだけの手榴彈を持出してくれ、と彼は云つた。其處に居た兵隊が各々手榴彈を彼に渡した。それは殆ど鹵獲した黄色い木の柄のついた

手榴彈だつた。吉澤上等兵は木の柄を指の間に挾み、左手に四個、右手に三個、七個の手榴彈を持つた。よし、と強く點頭くと、一寸廟の蔭に身體を低くして彈丸の間隙を狙つてゐたが、躍るごとく前方に飛び出した。雄物が城門に向つて體當りをすべく、動き出した。私は背中に日の丸の國旗を背負つた吉澤上等兵の後姿を見て、何かしらぐつと熱いものが胸に突き上げて來るのを感じた。吉澤上等兵は一散に前方に走り出て戰車の線に行つたが、濛々と捲き起り立ち昇る黄塵の中に、雄物の姿とともに見えなくなつてしまつた。又も、機關銃と手榴彈のすさまじい音響が起つた。喊聲のやうなものも聞えた。私は眼を据ゑて城門の方角を凝視して居た。私は身體中が熱くなるやうな興奮を感じて居た。

圏點を附したところが「私」の主觀であるが、其處に用ひられた動詞は同じやうに「感ずる」である。感じたことは殆ど筆紙に形容できない感情であらうが、それを表はす語法が如何に少いことであらう。しかもその少い語法によつて客觀的な表現に作らなければならないのだ。此の作者が一樣に主觀を表はすところを見ると、情にもろい人間だといふことと、それを正直に表白する人の好さに氣

付くのであるが、表現の方法を見ると、それだけにきまつた言ひ方をきまつた時に使ふしかしないのだ。「何かしら胸を衝つものがあつた」や「いかにも尊いものを感じるのだ」のやうな語法が、用ひらるべきところに型の如く用ひられてゐる。『土と兵隊』から引用すると、

私は、その笑ふべき感傷の中から、何かしらもり上るやうに、湧つて居る勇氣のごときものが、ふつふつと溢れ上つて來つつあることを感じるのだ。

次に形容詞を見てみよう。次のは『土と兵隊』からの引用である。

本道上をさういふ苦勞をしながら進んで行く車輛部隊と、歩いて行く兵隊とが、見盡す限り蜿蜒と續き、進軍して行く。そのどの兵隊も、足を痛め、胸苦しく、齒を食ひしばつて歩いてゐるには違ひないが、ここから見てゐると、寧ろそれはただ颯爽として、美しくさへ見

える。いや、私は正に次第にかくのごとくも世に美しき風景があらうかと感じ始めた。かくのごとくも一個一個が譬へ難い勞苦に滿されながら、それが全體として非常に美しく見えるといふことは、見えるのではなく、ほんとうに美しく、強く、勇しいのだと感じた。私の身內に歡びに似た勇氣が湧いた。私は歩き出した。

圈點の箇所は、如何にも作者らしい表現の仕方であつて、何だか稚拙な言ひ廻しの中に、作者の正直さがそのまゝ現れた文章である。「寧ろ」「ただ」「まさに」「かくのごとくも」「世に美しき」などの素朴と見える語法に、却つて人の心を衝つ作者の感情が表白されてゐる。

　それが全體として非常に美しく見えるといふことは、見えるのではなく、ほんとうに美しく、強く、勇しいのだと感じた。

は作者らしい論理であつて、

しかし今は私は茫然となつたやうに、首を垂れ、足許を見ながら、默々として機械のごとく動くばかりである。それは、全く、既に私なのでなく、機械に違ひなかつたのである。

といふ論理に似たものであるが、「美しく、強く、勇しい」といふ形容詞は、かう述べるしか方法のない實感を表はしてゐる。かういふ形容詞には夫々作者の感情が溢れてゐるのである。

同じやうな形容詞は、上田廣の「建設戰記」にも見出される。

……そのやうな冗談の言ひ合ひを聞いてゐるうちに、めいめいへの親しみの情が増されてくる。それは美しい姿である。汚れてゐればゐるほど美しい姿である。私はたかぶる感情のあまり、笑顔ひとつつくれなかつたが、世にこれほど美しい人の姿があらうかと、その感激の止まるところを知らなかつた。

かういふ形容詞には、分析し切れない含蓄がこもつてゐる。實感の形容詞なのである。

「かくのごとくも」と同じやう強意の表現には左のやうな例がある。

げにも通俗小說のごとき感傷的な瞬間
切なく齒痒ゆくなつて來た我々の氣持
驚くべきことには、死の中へも飛びこんでゆく
私はあまりの事の重大さに、何か恐しく、愕然とするとともに……
土を踏んだのは、何とも知れず嬉しかつた
胸苦しいほどもお互の心に觸れ合ふものがあつた
嚙むごとき悲壯の感情が惻々として胸の中を衝ち流れた
私も明朝は熱い湯の中で一層しみじみと生きてゐることのうれしさを、身體に感じるに違ひないと思ひ、もう胸がどきどきするのである。

右の例は『土と兵隊』にあるものだが、他の兵隊物にも見出せる語法である。我々はそれから素朴な驚異の感情を受取るのであるが、兵隊物は素朴性を立派な意味に價値づけた。從つて、これらを一片の情的表現として見逃す譯には行かない。私共はどうかするとかういふ感情を喪失してゐたが、作者はその本當の意味を教へて呉れた。

注意されるのは數多い直喩の用法である。「泥飴をつつき散らしたやうな道」（『土と兵隊』）や「海のやうな」と形容した麥畑（『麥と兵隊』）は、新しい自然の發見であつて、作者はそれに驚嘆の眼を見張り、「この麥畑は正に恐るべきものである」といふ風に敍べてゐる。赤い曳光彈はきまつて「花火のやうな」と形容され、無邪氣な兵隊達は何時も「子供のやうに」と喩へられてゐる。「子供のやうに」は『花と兵隊』だけで七回用ひられてゐる。「芋蟲のやうに蒲團にくるまり、海老のやうに身體を曲げてゐた」（『花と兵隊』）も作者の好きな比喩らしいが、水族館の喩が三回出てゐ

るのは、餘程印象に強く映じたらしい。『麥と兵隊』に、

美しい東洋の滿月のさしこむ硝子張りの水族館のやうな箱の中で何時の間にか眠つてしまつた

といふのが、そのままの形で二回（改造社、新日本文學全集、第二十六卷、二八五頁、二九四頁）出てゐる。

『花と兵隊』に青蓮といふ女性の出てくる場面は珍らしく敍情的である。

私は、夕暮の湖畔を青蓮と二人で歩いてゐた。この頃は毎日のやうにやつて來る青蓮が是非話したいことがあるからと、陣中日誌をつけてゐた私を無理に誘ひだしたのである。乾いた青草の上に點々と、白い座蒲團を敷いたやうに雪が殘つてゐた。湖心亭にも、小瀛州にも、山々の襞にも消えやらぬ殘雪が寶石でも鏤めたやうに見られた。西湖の水

面は鏡のやうに動かず、水蒸氣が一面に立ちのぼつてゐた。私達は、をかしなことには、初戀の少年同志ででもあるやうに、默つたまま並んで歩き、青蓮は私を誘ひだしておきながら、いつまでも何も話さうとしなかつた。

かういふ文章になると、言葉の遊戲といふか、表現の色彩といふやうなものが現れてゐて、さし迫つた實感が感ぜられない。同じゆとりのある場面でも、上田廣の『建設戰記』にはさういふものがない。例へば、

皆相變らず默つて仰向けに寢たまゝ空を見あげてゐる。白い雲が頭の上を歩いてゐる。連枝の向ふに、內地の海岸に見られるやうな雲の峰が、いくつも、大きな顏を出してゐる。さうして空だけ見てゐると、どこか自分の鄕里の丘の上で、所在なく寢轉んでゐるやうな氣持ちになる。私はふと、自分の頰のあたりを撫でる白いものに首をもたげた。豆菊のやうな白い花が風にゆられて私の顏を擽つてゐるのである。見ればあたりには同

じやうな花で一色にされてゐる。私にはその白さがこの上なく清純なものに映じた。濁つた瞳を洗ひ、疲れた心と肉體を癒してくれるものが感じられる。

それに比べると、火野葦平の文章には、作者が表現と戰つてゐるやうな箇所が目にのやうな文章は、目立つた癖がなく、表現を弄んだやうな箇所が見當らない。そ立つし、一定の型を直ぐ意識させるやうな言葉の威力といふやうなものがのしかかつてゐる感じがする。次の『土と兵隊』の一節を讀むがよい。

私は久しぶりでしみじみと兵隊の日に焦けた顏を眺め、私は何かすばらしい發見をしたやうに、愕然とするものがあつた。それは先づ何よりも私が今日まで、このやうによくやつて來たといふことである。我々は出征した當初とは全く違つてしまつた。兵隊は見違へるばかり逞しく立派になつた。我々の間には限りない信賴と勇氣とが生れた。嘗て私がその思惟の大いさに駭き、新らしい生活の方法を自覺したことは、何ものよりも

簡單なことであることが明確になつた。私は私の部下を死の中に投じ得ると云はれた偉大なる關係に對して、その責任の重大さを思ひ、その資格について危惧してゐたけれども、それは何も考へるほどのことではないことが判つた。それは又思想でもなんでもない。私が兵隊と共に死の中に飛び込んでゆく、兵隊に先んじて死を超える、その一つの行爲のみが一切を解決することが判つた。

此の文章の構造を手ッ取り早く分析するには、その中に使用された抽象名詞を抜き出せばよい。

　發見　信頼　勇氣　思惟　生活の方法　死　關係　責任の重大さ　資格
　思想　行爲

かういふ抽象名詞を中核として文が構成されてゐる。それらは凝縮した概念語で、知的に思想する場合に現れる表現である。かやうな語を中核にした文は、簡潔な構成を示すのが特徴である。例へば、

嘗て私がその思惟の大いさに駭き、新らしい生活の方法を自覺したことは、何ものよりも簡單なことであることが明確になつた

を具體的にくだいて書けば、此の倍以上の大きさの文になるであらう。これだけの文に凝縮するところに、作者の思想又は哲學といふものがあるのである。同じ經驗は作者ならずともするかも知れない。しかしかうした表現にまとめる所に作者の意味があるのだと思ふ。卽ちそれは知的範疇に高められた思想であるからだ。

同じやうな例で、今述べたことをもつと具體的に示すのは『麥と兵隊』の左の一節である。

兵隊達の歌は「露營の歌」から「上海だより」になり「愛國行進曲」になり「戰友の歌」になつた。

私は何時か兵隊達と和してゐる自分に氣づいた時に、はつとして歌ひやめ、その感傷を嗤ふべきだと考へたが、然も、これらの切實なる感傷をさへ反省することこそが、嗤ふべき感傷なのではないか、と、ふと思つた。

此文に現れた思考形式は、インテリ共通の苦悶を表はしてゐる。反省の反省といふ風に形式だけは入込んでゐるのだが、內實には弱々しいものが感ぜられる。かやうな例は、端的な實感といふよりは、一種の「內部言語」のやうなもので、概念的な言語形式に操られて思考を無意味にたぐつて行く傾向がある。「感傷を嗤ふべきだ」といふ言ひ方や「これらの切實なる感傷をさへ反省することこそ」といふ表現は、それを示してゐるもので、それを自身は痛切に感じてゐるだけに、知識階級の悲劇があると思はれる。かういふ文章を讀まされるのは決して樂しいことではない。

私はふと石坂洋次郎の「若い人」を聯想した。何處でもよい、一節を引用する

と、

あまり美しくない獨身婦人の幻想に浮んだふろふきの御大根。——間崎は拂ひきれない寂しいものを頭のしんに感じた。それは地殼に穿たれた空洞のやうなもので何處からもそれを埋めつくす土を運んでくることが出來ないのだ。自然には意志だけあつて倫理がない。さう云ふほかには、人類の幾割か幾十百割かの人達が不法にも背負はされて居るこの種のどうにもならない不幸が存在する理由の說明がつかないのではないか。

此文が火野葦平の文と同じだと云ふのではない。知的な思考形式に似たもののあることを指摘しさへすればよい。火野葦平の方が、かういふ文章を書くときには、餘計の努力をしてゐるのではあるまいか。兵隊物の文體には、まだ擧げてよい特徵があるかも知れない。しかし大事な

ところは以上で盡きてゐると思ふ。あとはそれを實證して行きさへすればよいのだ。

『河豚』や『糞尿譚』から見ると、兵隊物の文體で作者は一段階に達してゐる。しかし同じ文體を再び別な作品、例へば『南京城』で發見すると、それはもう固定したものだといふ印象を受ける。作者はもう甘えてゐてはいけないのだ。それ程、兵隊物の文體は讀者の頭に入つてしまつてゐる。作者がもう親しまれてゐるのだ。

此の作者は、正直な感激性を持つた好人物である。我々は表現の裏にまで立ち入つて、作者の實在を確めるやうな苦勞はしなくともよい。表現の表面價値によつて、作者を判斷してよささうである。素朴なところは素朴なところで、思考の入込んだところは入込んだところで、觀想は觀想で、モラルはモラルで、そのまま受取つてよささうである。それといふのも、一たいに文體が單純なからである。例へば、『土と兵隊』を讀んで幾つかの特徴に氣付きさへすれば、それを『麥

と兵隊』を讀む目印にすることができる。又同じ作品の或る一節から特徵を見出しさへすれば、これを他の一節を讀む際の手がかりにできるのである。例へば、『土と兵隊』に

この寢床は實に素晴らしくぬくぬくと暖いのである

といふ文があれば、『麥と兵隊』に、

なにしろこの果しもない麥畑は實に駭くべきものである

といふ文を豫想してよいのである。或る一節に

私はその勞苦を痛ましいとも考へるのだが、兵隊は自分では何も氣づかないのだが、そ

の姿には太々しい不敵さがあつた

とあれば、他の一節に

私はそこに逞しい不敵さを感じるとともに一種の不氣味さも感じるのである

とあることが豫想されるのである。 麥畑は常に「茫漠として」ゐるし「海のやう」である。

かういふ文章に、若しも事實性がなければ、讀むに堪えないかも知れない。 しかし作者が驚く時には、讀者も一樣に驚くやうな客觀的な意味があるので、單純な型にはまつた文體が、却つて力強い效果を擧げてゐる。 從つて、事實そのものに客觀的な迫力を持たない「花と兵隊」では、表現が浮いて見えるのだ。 例へば、「青い海のやうな」野菜畑にはもう感嘆しないし、

私達が杭州市内でやつと得ることの出來た鯉や鮒が何十尾となく水桶の中に泳ぎ、見る事も出來なかつた鳥類が所狹きまでに竝べられてゐる。それらは私達には全く珍しく、十分に我々を駭かせたのである。

とあつても、讀者はさほど駭かない。又

私は次第に胸が痛くなり瞼が熱くなつて來た

といふ文句が何度となく繰返されてゐても、徒らなる作者の感傷に背を向けたくなるやうな氣持にさへなるのだ。

鋭く尖つた保淑塔のある寶石山の碧みがかつたり、赤みがかつたりしてゐる岩肌が、樹

が生えてゐるやうに、或は花が咲いてゐるやうに見える。周圍の山々は何枚も霞の幕を張つたやうに、遠近がくつきりと陰翳を見せ、湖上にその姿を逆に落す。西湖は水深が非常に淺いので殆ど波が立たない。水は美しく、足許には小さい魚が泳ぎ、水藻が浮んで、青黒い色をした水底が見えるが、その水深は三潭印月の小部分のほかは、全く、湖全體變らないといふことである。水の色が一日中何回も變り、天候と霞の魔法の中に、西湖は鏡のごとく光り、河のやうに見えたり、池のやうに見えたり、海のやうに見えたり、原つぱのやうに見えたり、縮緬のやうに見えたり、或時は霞の中に全くなくなつてしまつたりする。このやうな西湖の畔に、私達はやがて春が訪れる前兆のやうに小鳥が囀り、海の花がほころび初めるのを見た。

といふ風な文章を讀むと、文字が全く遊離してしまつてゐるやうに思ふ。書くために書いてゐるといふ印象さへ受けるのだ。かういふところにも、作者の正直さが示されてゐる。

しかし兵隊物によつて、作者は今迄の言語に新しい內容を盛り、單純な感激の

文字を作つた。兵隊物があれだけ讀者に感銘を與へたのは、單に書かれた内容そのものではないと思ふ。これを傳へる單純で逞しい筆の力があつたからである。表現に眞實性があつたからである。文體論が意地惡く分析して見せた素朴さが却つて讀者に訴へたものであらう。

それで、此の作者らしい次の一節――『麥と兵隊』の最後の一節――を引用して、此文を終ることにしよう。

私は眼を反した。私は惡魔になつてはゐなかつた。私はそれを知り、深く安堵した。

索引

1. 排列はアルファベット順による。
2. ローマ字は從來のヘボン式を採用。
3. 人名は固有の綴によらず、日本語式の讀み方に從ふ。

T

V

W

Y

Z

昭和十五年五月六日　印刷納本
昭和十五年五月十日　初版發行
昭和十五年六月八日　再版發行
昭和十五年八月一日　三版發行

文體論（方法と問題）
定價二圓八十錢

著作者　山本忠雄

東京市神田區一ツ橋二ノ五
發行者　朝倉鑛造

東京市神田區小川町一ノ十一
印刷者　綾部喜久二

東京市神田區一ツ橋二ノ五
發行所　賢文館
振替東京五〇八一番
電話九段四三四六番

宮本印刷所・佐藤製本所

萬一製本違ヒ（亂丁・落丁）ノアル場合ハ直チニ御取換ヘ致シマス。

國語音韻論

菊澤季生著

多年要望せられた國語音韻論は玆に初て科學的な基底と組織的な實踐體系を與へられて完成した。音聲學と音韻論とを峻別し從來の斷片的な研究を統合し國語音韻發達の歴史を闡明せる本書はまさに國語學界に一新時代を劃すべく苟くも國語學國語教育を語るの士は必讀すべき好著である。

菊判上製函入　價三・二〇
洋裝三八〇頁　送　一四

教育的解釋學

東京高師教授　石山脩平著

學界關心の焦點たる解釋學を明快なる理論と整然たる體系の下に論述せる眞の解釋學概論である。著者は解釋學の全貌を教育的視角より洞察し一切の論點を教育の實踐領域に展開せしめて豐富なる事例と迫力ある指導原理とを提供してゐる。國語教育の最新經典たるは言ふまでもなく實に精神科學全般の一大指標である。

菊判上製函入　價二・八〇
洋裝三九〇頁　送　一四

ソクラテスの對話法

廣島文理大助教授　稻富榮次郎著

實に世界史的存在であり、人類に對する共通の文化的先達である偉大なる教育者ソクラテスは理論の人ではなく實踐の人でその教育的實踐は常に產婆術といふ巧みな固有の對話法によつてなされてゐた。

從つて彼の教育的人格と實踐とを究明することは同時に又其處から時代と處とを超越して教育作用の本質に關する永遠の眞理を汲みとる所以となるであらう

四六判上製函入　價二・〇〇
洋裝二四〇頁　送　一四